
陸奥湾を抱く街

kanayano

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸奥湾を抱く街

【Nコード】

N0423U

【作者名】

kanayano

【あらすじ】

「それが誰に見止められることがなくても、わたしは――」

明治37年、青森懸川内村。

本州最北、下北半島のかの地に、歌人を目指す最上桔華は、傷心の体を引き擦り流れ着いた。その腹には、朝鮮半島出身者の血を引く、新たな命が宿っている――。

日露戦争に出征した夫を待つ和泉晴子と、実らぬ恋に身を焦がす女流歌人、最上桔華。二人が共に過ごす中で、暗澹たる時代の中に桔華の見出す“希望”を描きます。

承前（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog.fc2.com/>

承前

雨が降っている。

しとしとと、細い雨が降っている。初夏の鈍い湿気が地面の近くに靄の裾を広げている。行き交かう人も無く、穏やかな細い雨の線は、音も無く土を濡らし、小さな水面を揺らしている。

桔華は、道の脇にある小さなお堂の軒下で途方に暮れていた。庇は長く拵えておらず、雨は小降りといえど、おもむろに桔華の着物を濡らしており、先ほどから水気を含んだ袂から直に雨の冷たさを感じている。

替えの着物が一枚と、それから発句用の雑記帳三冊と雑誌を包んでいる手荷物は、水分を含んで随分ずっしりと重みを増している。避けきれない水滴は先っぽの方から体温を奪い、草履の先は地面の土の泥濘に沈む。ずるりと落ちそうになった荷物を抱えなおし、桔華は一度、鼻を吸った。

梅雨時の雨が降り止むことは無く、次第に辺りは夕闇に沈み始めた。まだ明るいうちにと、水に濡れた地図を開いて、次の街までの道程を確認する。田名部を立ったのが昼前。大湊の要港部を左手に眺めながら、天然の入り江に巡洋艦が一隻、停泊しているのを見、左手に陸奥湾を望みながら城ヶ沢の集落を抜けた。

最後に民家を見たのが約一時間前。野辺地を過ぎてから、田名部を過ぎる頃までは正面に見えていた釜臥という山を背にして、下北半島の鉞の刃を、西に向かって進んでいる。1時間ほど前からぽつぽつと雨が落ち始めた。程無くして、海から沸くようなび色の雲が空を覆い、たちまち辺りが真っ暗になった。せめて雨宿りする場

所でもと先を急いだが、城ヶ沢を過ぎてからというものの、民家の一つも見当たらない。赤蝦夷松に囲まれた街道の一本道を西に進みながら、山手によくやく小さな仏堂を見つけた。ぴしゃりと雷が鳴り、雨足が強くなった。桔華は荷物を胸に抱えなおして堂内の観音像に手を合わせ、くると振り返って海を対面した。そんな状態で二時間経つ。雨足は弱まり、細く落ちているが、空には厚い雲が張り詰めたまま、海も鈍く、どどおと波を鳴らしている。

温度が下がり始める。日没の時間までわずかだ。

こうなれば、引き返すことも出来そうにない。鼠色の雲と海の境界線の辺りで、薄くなっている雲間から、地平線に太陽の橙が沈み行くのが見えた。桔華の視界の中で、橙が濃藍に食われていく。橙がそれと気付かぬうちに、濃藍がゆるゆると犯していく。その身のすべてを濃藍に赦した橙が海の底深く陶酔の休息に付くと、深い藍が地上に降り始めた。翌朝には立場が逆転する夫婦のような空の駆け引きを眺めながら、桔華の体はずりとそこに落ちた。結び目がさかさまになった荷物が水溜りに浸った。

もう三日、何も食べていない。

水は、飲んだ。大湊を抜けたところ宇曾利というところがあって、小川が流れていた。手ですくってその水を飲んだが、鉄の味がした。海の水よりはマシだと思って、もう少し飲もうとしたが、体が受け付けずに吐き出してしまった。

体が重い。腹は、減っていないわけではないが、それよりも水が飲みたい。

初夏といえど、日の落ちたこの季節は肌寒い。ここが本州最北の半島であれば、尚のことだ。

桔華は、自分の呼吸が深くなっていくのが分かった。大事な発句帳を水没させるわけにはいかないが、一度力が抜けた体は桔華の言うことをきいてくれない。とうとう体を起こしていられなくなって、ぬかるんだ地面へその身を横たえてしまった。地面についた右肩から腰から着物が濡れ、その水温を感じた。体温の低下と共に、意識が朦朧としてくる。

だめかもしれない。

桔華はやり残したことや会いたかった人など二つ三つ思い浮かべたが、四つも思いだす前に考えることをやめた。

どうせ死ぬのだ。思いを巡らせたところでどうしようもない。

まあいい。それも人生だ。

最上桔華（1）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

最上桔華（1）

歌詠みの師である祖母、北条桜花の言いつけで、桔華は三年程前から全国各地を放浪している。生まれ育った京都を出たのは、桔華にとって初めてのことだった。

北条家は、元武家であった。桜花は、本名を廉という。文政十二年の生まれで、十五歳で北条家の嫡男、彦江に嫁いだ。彦江は二十歳のときに家督を継ぎ、武道はからきしだが書を好み、画を描いた。画号を「華王」と称した。

彦江は自らの屋敷の一室を同好の知人に開放した。多くは彦江と同様に画（主に文人画）を紙に起こしたりして

いたが、同時に国学に通じていたり、文楽の脚本を任されていたり、漢詩を読むものもいたりして、型枠に捕らわれない話が飛び交った。八畳二部屋の襖を取り払った彦江の「サロン」は、様々なジャンルの本が隅々に積み上げられ、彼らが書き散らした論文であるとか、画であるとか、そういう若者たちの好奇心が常に雑多と散らばっていた。廉は亭主の友人らに茶菓子を出したり、絵の具の色を作ったりして世話を焼いていたし、廉の父が朱子学の幕府御用役を務めていたから、時勢を鑑みんとする男たちの論戦にど真ん中から切り込んで論破したりした。おまけに器量もよかったから、彼らにえらく評判がいい。夫婦仲もよく、四男一女を生んだ。末の男の子と女の子は、五歳になる前に流行り病で死んだ。

先代桜花は、このサロンに顔を出している若い俳人の、兄という

人だった。彦江はこの若い俳人をひどく愛していて、野菜を貰えば
廉に家まで届けさせ、二日俳人の顔を見なければ、やはり廉に様子
を見に行かせた。兄弟の居ない彦江は、初めてできた弟のように、
若い俳人思っていたに違いない。廉も同じように考えていたから、
かれの屋敷に足繁く通いつめた。かれは公家の傍系の血筋を引く家
柄の次男で、嫡男として育てられた。その兄は生来病

弱で、1日のほとんどを床の上で過ごしていた。彼は三十路を目前
にしていたが、驚くほど肌が白い男で、女のように長い髪を後ろ手
束ね、その体を通う血液の脈動を肉眼で確認できるほど薄い皮膚が、
骨にひたりついているというふうな姿をしていた。

廉がはじめて兄と対面したのは、二人目の子の四十九日を終えた
ばかりの頃だった。先代は谷という姓に「桜花」の名を名乗ってい
た。

弟は時流にのって俳句を好んだが、兄はそれがほとんどかれのす
べてという一室で、色とりどりの和歌を詠んでいた。廉はこの兄が
三十二歳で他界するまで、かれに歌を学んだ。廉は学んだというよ
りも、春は梅、夏は菖蒲の話などして、かれの感性に自分の気持ち
を寄り添わせた。それが廉に自然に歌を詠ませた。兄は死ぬ前に「
桜花」の名を廉に譲る旨を弟に伝えた。廉は先代の死に立ち会わな
かった。夫彦江とともに弔問に訪れ、血の通わない桜花の頬に石楠
花の切り花を添えたとき、廉はようやく自分の気持ちに気がついた。
恋をしたのは生まれて初めてだった。

彦江は、幕軍として戊辰戦争に参加し、函館で死んだ。

二十五歳となった長男もまた、上野で彰義隊士として戦死した。

北条の家は、次男が継ぎ、三男を婿養子に出した。やがて新政府に武士の階級を剥奪されると、次男は秩禄処分で得た資金を元手に人に言われるままに土地を買い上げて不動産などを始めた。しかし上手く行かず、政府が奨励する台湾の殖産政策に乗る形で日本を離れた。次男はそこで、同じような理由で渡台していた日本人の華族の子女と結婚し、三男をもうけた。時勢が台湾から朝鮮半島へ関心が移ると時期を同じくして、北条一家は日本に帰国した。十年ほどの異国生活だった。明治も二十年を過ぎた頃には、北条の家はかつての勢いを完全に失っていた。没落武士は北条のほかにも履いて捨てるほど各地に溢れていて、かつての被支配階級から容赦なく冷笑された。

日本に戻ってくると、廉は自らの歌をまとめ、自費出版を始めた。これが、あたった。地元の新聞社が廉に月例選歌を任せると、新聞の発行部数が増えたりした。紙上で廉は「北条桜花」を名乗った。桜花はその原稿料で、北条の家をまかった。彼女はまた、八畳二部屋を開放して、桜花を慕う歌人たちの創作の場を提供した。北条の家は、いつかそうだったように若者の声が響き渡るようになった。

婿養子に出された廉の三男は、最上公爵家の長女を妻としている。

この夫婦には、女の子ばかり四人生まれた。

四姉妹の末っ子が、桔華である。三人の姉とは母親が違う。最上公爵の長女を母とするのが、三人の姉。桔華は最上の家に奉公していた若い女中に、廉の三男が生ませた娘だった。女中が亭主の子を身籠ったと知った最上家の長女は、その女を最上の家から追放した。

女中は、実家である萩の小さな農家で、桔華を生んだ。桔華は生まれてすぐ「菊」と名付けられた。

程なくして、女中はコロリで死んだ。菊は父親に引き取られることになった。

最上の使いに手を引かれ、桔華は雪深い地面に小さな足跡を残しながら山科までのみちを歩いていった。

頬がほんのりと赤く染まり、白い息が空気に滲んだ。今まで身につけたことも無いような綸子地の振袖に、朱色に染め抜かれた一目落ちの鹿の子絞り。梅や紅葉、竹などを染め抜いた丸帯に、絞りの帯揚げ。べっこうの髪留で髪を高く結い上げ、胸元には鶯の飾りの付いた箱せこ。若草色のコート。初めてのおしろいを頬にのせ、小さく紅を引いた。はらはらと粉雪が舞っていた。母が死に、年長いた祖父母にも「父無し子」と蔑まれ、子供心に途方に暮れていたところに、父を名乗る人が自分を引き取ると言ってきた。見知らぬ人見知らぬ土地。言いようの無い不安に、菊は手を引く最上の使いに顔を向けた。彼女は菊を省みることはなかった。飾り下駄が雪を踏みしめる音だけが白いみちに響いていた。桔華は視線を斜め前に落として、黙々と歩みを進めた。

塀が続いた。

しばらくして門が見えたが、その隣に小さく設えてある勝手口から敷地に入った。

雪を落とし、コートを脱ぐと、奥の座敷に通された。二十畳ほどもあるうかという部屋に菊を一人残して、「ここで待つように」と言い残し、使いの女は去ってしまった。菊は冷え切った両手に息を吹きかけ、ぎゅっと拳を握った。着物が皺にならないよう膝下を押さえながら、座敷の下手側に膝を折った。火鉢も無いので、慣れない一張羅に体を締め上げられている菊の体はすぐに冷えた。屋敷の中は物音一つしなかった。静かに降り積もる雪が、自らの存在を主張するために、すべての音を飲み込んで消してしまっているのかしらと菊は思った。

三十分も経ったころ、廊下のほうからすると足摺が聞こえて、菊は顔を上げた。

からりと障子が開いて、父という人が顔を出した。若い顔であったが鼻の下に髭を生やしていて、驚いたような、しかしその中に困惑とわずかな蔑みを含んだ顔を菊に向けた。菊は父の顔を初めて見た。お互いに言葉も無く、ただ漠然と不安や戸惑いといったものを素直に顔に出しているという点で、二人は間違いなく父子だった。

「話は聞いとりますね」

抑揚の無い女の声だった。最上公爵家の一人娘であり、今日から菊の義母となる女が、父の後ろから進み出た。

「あんたは今日から『桔華』を名乗りなさい。卑しくもこの最上の娘になるのですから相応の振る舞いを心得るよう」

義母は、最上の家に仕えながら亭主と不貞を働いた女の面影をこの五歳の娘に見出しているらしく、上から刺すような視線を菊に一つ浴びせると、くるりと踵を返して足早にその場を立ち去った。婿養子に迎えられている父は、妻に頭が上がない上に弁解の仕様も無く、「そういうことだ」と、娘の顔も見ずに自分に言い聞かせるように呟くと、それ以上桔華に言葉をかけることもせず、妻の後を追ったのだった。障子は開け放たれたまま、吹き込む雪が畳の端を白く染めた。どうやらここにも自分の居場所は無いうだと菊は思った。それは絶望では無くて、住むところと自分を取り巻く人間の顔が変わったというだけで、菊にとっては今までと何も変わらないの生活が続くのだというただそれだけの事実だった。

ともかく、この日より菊は「桔華」となった。

三人の姉たちは上から八重、玉津、朔子という。

八重とは十歳、玉津とは六歳年が離れていた。朔子とは生まれた年是一緒だが、数ヶ月彼女の方が早く生まれた。

八重は義母によく似ていた。自分が最上家の長女であることを何よりも誇りに思っていて、それが彼女の存在意義ですらあった。桔華が朝、箒で庭を掃いていると、長廊下を滑るように八重が渡ってくる。着物の折り目はいつも正しく、背中をすっと伸ばし、一文字に口元を結んでいる。桔華は箒を動かす手を止めて、八重に朝の挨拶をする。すると八重は桔華の前でぴたりと止まって、高い位置から桔華を見下ろし、たっぷりと間をおいて、

「ご苦労様です」

と愛想の無い声を掛ける。それは妹に向けられた労いではなく、使用人に掛けられるべき形式的な感情が内包されている。

次女の玉津は、面倒見よく、柔らかな雰囲気を持つ娘である。天気のいい昼は「ああ、今日はふわふわした雲が浮かんだるなあ。あてもあの雲のようにふわふわとお空に浮かべたらなあ」などと言いながら、縁側で体をゆらゆらさせたりしている。

「なあ、そう思わんかえ、桔華」

この次女は女学校での成績も飛びぬけて優れていて、最上の家の中でも桔華に比較的理解を示してくれた。こうしてたわいも無い話を投げかけているが、この娘の心は特に桔華に関心を向けているわけではない。「何事も長女を優先」する家への反発が、その小さな胸の底に渦巻いている。書を好み、漢詩を読み、器量も八重よりも優れている自負はある。だが玉津がその才能をどんなに周囲に認め

させようと、最上の期待が彼女に向けられることは無い。それが玉津の何よりのコンプレックスとなっている。

桔華が最上の家に来てから一年たったころ、父の本家である北条一家が台湾から帰国した。

彼らはほとんど一文無し状態で、北条家は最上家から生活費などの援助を受けることになった。

梅のつぼみに雪解けの滴が煌めく三月、北条家の当主であり、廉の次男である男は、最上の屋敷で自分の弟夫婦に頭を下げている。

桔華も、雰囲気で事情を理解している。八重が細い眉をいつもよりもさらに吊り上げて、「元士族ともあろうものが、人様に頭を下げるなんて」「追い返してしまいなさい」と言いながら、例の滑るような足運びで自室に引き上げていった。桔華はたすきがけで炊事場の上がり床をごしごしと拭いている。玉津は膝を抱えて桔華の様子などを眺めながらゆらゆらを体を揺らしていたが、目だけで姉の背中を追い、そしてこともなげに再び足元に視線を戻して、またゆらゆらと揺れ始めた。

「そういえば朔子、どこいったんやろ」

三女の朔子は、まるで掴むことのできない空気のように、ひとところに留まるということがない。

小さな白い顔に葡萄のような大きな黒い瞳がくると二つ付いていて、その瞳に何が写っているというのか、桔華をじっと見つめては、桔華がそれに気がついて朔子に顔を向けると、にっこりと笑ってくるりとその場を去っていく。同じ戊寅の生まれであるにもかかわらず、朔子と桔華にはお互いに重なり合うものが無い。その掴みどころの無さは実の姉にすら心の内を覗かせない、彼女の生まれ持

った神秘性に由来している。

その朔子が、台所の勝手口から姿を見せた。
左手で、自分と同じくらいの年端の、男の子の手を引いていた。

朔子は、その場で玉津と桔華の顔を交互に見て、そしてにっこりと笑った。

「北条さんとこの、古月や。仲良くしたって」

それが、桔華と古月の初めての対面だった。

北条古月は廉の次男の三男で、このとき八歳。桔華より二つ、年長である。

中国模様の紺の紬を身につけているが、その袖や裾はよく見ると擦り切れていて、着丈も成長期の彼には少し短くなっていた。ほとんど坊主に近い髪は短く切りそろえられていて、大きな目が恐れることも無く、ぎょろりと玉津と桔華を捉えた。

「お父はどこや^{とん}」

初対面の二人に挨拶をすることも無く、さらに自分の父が金の無心をしている家の人間であることを気に掛ける様子も無く、曇りの無い目できりりと見据えて、よく通る声でそう言った。

「うちの前で、『お父どこや』って大声を出していたから、連れてきたんよ」

「おらへんなら、探しに行く」

古月は朔子の手を払おうとした。朔子はそれを許さなかった。

「お待ちいな。玉津と桔華に挨拶しい？」

朔子が古月にそう促すと、古月はそれに抗うような目を向けて、そして奥の二人に頭だけで礼をした。それで古月は去ろうとしたが、納得のいいないらしい朔子が、促した視線のまま、古月を逃さない。

「子供の出る幕やあらしまへん。ここで大人しくしときいや」

玉津がそういうと、古月はかっと、大声を出した。

「お父がこんなことしはったら、ばあちゃんが肩身の狭い思いをす
るだけや。こないアホなこと、わいがやめさせちやる」

八歳の少年が、言うのである。

結局その後、古月は父と弟夫妻の会合に飛び込んで「わいが北条を養えるくらい働きますさかい、最上の家からの援助は不要や」とのたもうたが、聞き入れてもらえなかった。古月の後を追ってきた玉津や朔子に取り押さえられて、座敷から引きずり出された。朔子はどうにもこのことがおかしいらしく、始終笑っている。神妙な話をしていたはずの古月の父は恥を上塗りされて真っ青になっていたし、弟夫妻はこの台湾帰りの甥に呆れるやら豪胆に感心するやらで、金を無心される側の蟠りを少し軽くしたようだった。こんなことがあっても周囲から温かい目を持って迎えられる古月は、今後かれが生きていくうえで、生まれ持った天性ともいえるべき人徳をもって、かれと関わる人たちを惹きつけていった。

廉が「桜花」を名乗って歌壇をにぎわせ始めるには、もう少し時間が必要。

とにかくこのころは自作を捻り、選び抜き、分類し、そして歌論を述べ、それを書写している。自作の句の短冊をカードのようにして部屋中に広げて、歌論を書きかけた半紙や、庭の植物を写生したりしたものあたり狭しと広がっていた。

廉の長男は日雇いで大工の仕事に従事しており、昼間は家に居ない。嫁が家中のことをして、長男は旧制中学、次男と古月は尋常小学校に通っている。

古月は通学前と下校後に、東山にある豆腐屋の手伝いに行く。父の収入だけではまだ家族を養える状態ではなく、かといって、これ以上最上にも頭を下げられない。そういうことを強く思っているのは三男の古月だけであって、もと武家の子息である父も母も、そして古月の上の二人の兄も、生活の貧しさを自分の力で抜け出すという発想が無い。金などは足りなくなればどこからか支給されるものと思っているふしがある。

古月はそれがいやでたまらない。

自尊心を持ちつつも生活のために人に頭を下げる父をみて、古月は吐き気を催すほどの嫌悪感を覚えていた。自分はそんな男になりにたくない。早朝の刺すような大寒の中で、冷水に手をつつこんで大豆の粿殻をふるい落とす網をゆさゆさと揺すりながら、それでもあんな思いよりはマシだ、と古月は思っている。

十歳になる頃、桔華も最上の子女として女学校に通いながら、朝と夜の飯支度を手伝うようになった。

なので、下校時に通り道である豆腐屋で、一丁購入する。そこで店番をしているが、古月である。

「もう少ししたら、大豆をぎょうさん買うて、わいの店をもつんや」

かれの話によれば、この店は仕入れの効率がよくないのだという。

「大豆は年中使うねんけど、使う分しか問屋から卸されへん。腐るからや。だけど年中使うものなのに、少しづつ、そのときに一番安い問屋から仕入れんのは、賢いように見えて実はそうではおまへん。卸す問屋を一つに決めて、ぎょうさん仕入れさせる。数が多いから、安くしとくれと言えるんや。余った大豆は、醤油にする。醤油は作っておいても温度に気をつけて蔵で管理すれば長持ちするから、豆腐でも醤油でも儲けることが出来る。利益が二倍になる」

少年の心の中には、大豆をどう仕入れるかといった業者への指示や、作った醤油を保存するための蔵の構造、ものを運ぶ貿易船の航海の軌跡まで描かれている。古月の夢は、彼が尋常小学校を卒業するとほぼ同時に、実現した。しかし今はまだ、その夢を胸に秘めたまま、北条家の家計を支えるために冷水に手を突っ込む生活を続けなければならぬ。

「なあ桔華、すまんが、ちょっと待っててくれへんか」

たらいに二寸ばかりの豆腐を入れながら、古月は言った。

長い横日が指している。桔華は夕餉の支度の時間を頭の中で試算しながら、この時間までに帰れば大丈夫と、古月の帰りを待つことにした。

桔華は、東山にある北条家に連れてこられた。

北条家の塀越しに、何人もの若い声が聞こえてきた。日没までも幾時間も無い。

このころの廉は、地元新聞に掲載した歌の評判がよく、月一歌壇の選者なども勤めていた。先日、連載した歌論や和歌をまとめて本を出さないかと新聞社の文芸担当から持ちかけられ、その編集作業を行っている。

北条の屋敷は、住民が異国に渡っていたために、江戸以来の広大な屋敷が荒れ放題となっていたが、ここ一年くらい廉が安定した収入を得るようになって、最近ようやく雨漏りなどがしない程度の改築を行い、人並みの外見にはなった。それでも、爵位持ちの最上の家と比肩するような程度ではなく、廉は桔華たち四姉妹の祖母にあたるが、山科と東山というそう離れていないところに居を構えているにもかかわらず、正月を除いてほとんどお互いの家を行き来するということが無い。

「だから言うたやろ。金の貸し借りなんかするから、お互い気まずくなるんや」

北条の門の前で、敷地内に入るのをためらった桔華が「久しぶりだから」というのを聞くなり、古月は桔華から半ば奪うように豆腐の入ったたらいを預かる。「自分のばあちゃん家やろ。もっと孫の顔見せんと、年寄りから先に死ぬんやで！」そうして古月は玄関の正面に回らず、庭のほうへ回ったらしかった。見失ってはいけないと、桔華もその背中を追った。

廉の部屋は庭に向かって開け放たれていた。縁側には二人の男が腰掛けており、お互いに歌を詠みあっているようだった。一人は、庭の銀杏を丹念に眺めていて、時々何かを思い出したように帳面に書き付けている。部屋の中でゆったりと文机に向かって筆を動かしているのが廉。その後ろで、書き散らしたものをかき集めている若い女性が居る。同じように本などを並べているひとときわ若い少女が、玉津だった。

庭は、雑多としている。

六畳ほどの広さに、背の高い草が生い茂っていて、廉の部屋から見える唯一の木が銀杏の大木。ごつごつした木肌に緑の蔭が巻きついている。銀杏の実が地面に落ちているが、その付近には廉が山から取ってきたというカタクリやイチリンソウなどの山野草が不規則に植えられ、小さな花が寄り集まって一角をなしている。シダが大きな葉を右へ左へ主張していて、春になればその隙間からスイセンやタイツリソウが庭に色彩を与える。人工的な区画を一切捨てることなく、岩もそこに置きっぱなし、草もそこに生えっぱなし。廉はそのものもつ一番自然な形に、人間としてのあり方だとか、ものごとの趣といったものを見出している。

「帰りました」

古月が大きな声を上げると、縁側の二人がぱっと明るい表情をこちらに向けた。顔見知りらしい古月はその男に坊主頭をぐりぐりとこねられた。たらいから零れそうな豆腐を乱暴に（それはあくまで桔華から見た感じだが）そこに置くと、草履を後ろ足でほおって縁側に上がった。かと思うと、畳の縁を踏むことなく座敷に上がり、廉の前に正座すると、両手を揃え「ただいま帰りました」床に頭をつけた。

「おかえりなさい。桔華、よく来ました。さあこちらにおいで」

玉津がちらりとこちらを向いたが、ふいと振り返ると、また本などを手に取り始めた。桔華は祖母の前で正座をして、礼をした。

廉は自分の書き物などを一通り終わらせたところで桔華に体を向けた。御年六十になる廉は、小さな体に柔らかな微笑を湛えて桔華に相對する。

「見ての通りなのです。人手が足りない。手を貸してくれないか」

桜花先生、それでは私たちは物の数になっていないのですか！と縁側から声がして、二人は顔を見合わせてはははと笑いあっていた。廉はそちらにも笑みひとつを返して、再び桔華の顔を真正面から見た。桔華も廉の顔をこのようにじつりと眺めたのは初めてだった。最上の家でも父と義母は桔華にとっては逆らうことの出来ない絶対的な存在で、その母となるとまた、雲上のひとのような感さえる。

「そう構えないで。ほら古月、お茶でも用意して頂戴」と、廉は言った。古月は廉に一つ礼をして、部屋を出て行った。

桔華は近くに落ちている短冊を拾った。美濃瀧の若草の和紙に、廉の繊細で流麗な筆文字が躍る。

とつくにの御山のぼりて やまと路のわが夫の背つまや 追ふや追われぬ

前文には、「戊辰ノ役ニテ没セシ夫ヲ想ヒテ」とある。

廉は、自分の夫が戦争で死んだと知らせを受け、いてもたっても居られずに近くの山に登った。しかし祇園の鐘が鳴り響くばかりで亡き人を偲ぶ何かを見出すことは出来なかった。

それから何年も後に、廉は遠く台湾の地で、ふらりと近くの丘を訪れる。標高三百メートルもない低い山で、頂に足を踏み入れると、すっぱりと視界が広がった。

ああ、こうしてあの人も、私のことを思い出してくれたのだろうか。

夫の見えない背中を追っているのは自分だけだと思っていた。

遠く、函館の地で上陸してくる薩長軍を高地で見据えながら、かれも廉の面影を追っていたのかもしれない。

異国の地にあるという心境と、夫を亡くしてから過ぎた月日が、廉にこの歌を詠ませた。当時の撰者にその月の天位を授けられ、「瓦解ノ日ハトオクナリニケリ、然シ『やまと路』重シ」と評された。異国にあつて日本を思い「やまと」としたが、それは天平の時代に唐の国に渡った文人たちが表現して初めて成功するのであって、今の時代ではあまりに飾り気が過ぎる、というのだ。折りしもこの時期、中央では正岡子規が俳諧に「写実性」を見出していて、この地元紙の撰者もそれに傾倒しての評したのであろう。

「お前なら、『やまと』をどうする」

一通りの説明などをして、廉は桔華に問うた。桔華も、この歌が新聞に掲載されたものを読んでいて、その意図すべきところをすぐに理解した。確かに綺麗過ぎる、と桔華は思う。亡き人を偲ぶ思いをやまとくにの美しさになぞらえるのは、古今集の御世から行われていることだ。私たちが彼らの歌を詠むときに、古代のやまとくにの緑豊かな憧憬をその脳裏に美しく描きながら情景を読み取るので、嫌が応にも歌に受ける印象が、素材が素朴であってもきらびやかになる。「やまと」にはそんな危うさがある。この歌の主題は、追っ

ていたはずの亡き夫の背は、実は自分を追っていたかもしれない背だったのだ、と思い至る歌い手の気付きにある。ならばいっそ、それを歌の真中に据えればいい。

夫の背や 追うや追われぬとづくにの 御山のぼりて雁の音をきく

ふうむ、と相槌を打ったのは、縁側に座る二人の右側のほう。中背中肉、若いのに鼻の下に髭を蓄えている。

名を吉瀬、という。年は三十。京都帝大で法律を学んだ後、できて間もない地元の新聞社で記者になった。折りしもこの時期は初期議会開設に向けて、全国の壮士たちが大同団結運動などを盛り上げていたから、その方面に詳しい吉瀬は、遊軍のなかでも重宝がられた。

吉瀬の上司に当たる、編集局長の片山という男が廉の才能を見出した。吉瀬はいわば片山と廉のパイプ役などをこなしているうちに、自らも廉に発句の機智を請うようになった。その吉瀬が、桔華の発句に「ふうむ」という。

「雁は、大陸の風景に不似合いではないか。いかにも内地といった風だが」

雁という鳥が、朴訥な田園に広がる日本風景などを思い出すから、異国の地で高地に立ち、眼下に広がる風景が田園風景ではこの作者の描く風景になじまない、と吉瀬はいう。私ならば、といってすらすらと手持ちの帳面に何かを書き付け、廉はその風景をにこにこと眺めている。

とつくにや 遠くなりける君が背の 追ふや追はれぬ 大陸の風

会場が、沸いた。吉瀬はいたってまじめである。廉もこらえきれずに下を向いているし、桔華はこの年長の男の純情に、返すべき言葉を探して目を泳がせる。庭で銀杏をじっと見ている男も振り返り、嘲笑の視線を吉瀬に送る。このおところは、自分が一流の大学を出ているというのにそれを鼻にかけることも無く、素直に間違いを認めるから、誰にも愛されている。

「吉瀬はん、『異国の地』を引っ張る割には、大陸の認識にずれがあるやろ。作者がいたのは、満洲とちやいます、台湾よ」

玉津がその場のすべてひとの言葉を代弁した。吉瀬はああそうかと心の底から納得しているようで、自身は再び、廉の歌に自分なりの表現を練りこもうとしているようだ。向かいの男が、吉瀬に横槍を入れている。玉津が桔華の手の中にある短冊を覗き込んだ。ふうん、とひとつ呟いて、玉津が呟く。

君の背に 追ふや追はれぬ 在りし日の己が身返りて 鶯の鳴く

「ねえ桜花先生、作者は大切な人を失ってから多くの時間がたってしまったことを詠みたかったんよね。だったら、内地も台湾も関係あらへんやろ」

玉津は、女学校の授業で和歌を習って以来、祖母の元を出入りしている。この才女は古今集などを好んで読んでいるから、王朝文化

の流麗繊細で雅やかな作風を好む。

廉はそんな孫娘二人のやり取りを優しげな眼差しで見つめている。桔華、玉津に、吉瀬の歌を交えて、その批評会が始まった。盛り上がる縁側の後ろから、古月が茶を盆に載せてやってきた。廉は古月に視線をひとつ送ると、口元を綻ばせた。古月は自分の感情の照れを押し隠すようにむつりと口を一文字に結んでいる。

行き交う声の間から、桔華は廉と古月の様子を伺っていた。

なぜ自分がよばれたのかしら。

桔華はその理由も聞かせられぬまま、仲間と共に廉の下で歌の教養を受けることとなった。

頭上で若い女の声が聞こえている。

「あとどれくらいかの！」

「二十分！」

意識の遠くからひっぱり出されるように体中の感覚が蘇ってきた。昨日の冷え冷えとした空気ではなく、穏やかな日差しの暖かさを肌に感じていた。がたがたと体が揺れている。どうやら馬車の荷台に乗せられている。

ざざん、と海が鳴った。その瞬間に木々が晴れて、陽の光が差し込んできた。

「晴れてよかったの！」

「よかったです！」

さつきよりも鮮明に、女の言葉を聞いた。潮の香りがする。うっすらと目を開くと、遠ざかっていく風景の中に赤蝦夷松の街道の向こうに白い波の満ち引きが見えた。ウミネコの高い鳴き声が聞こえる。

がったん、と地面のでこぼこを車輪が乗り越えた。桔華は尻を強かに打ちつけ、「う」、と声を上げた。

「気がつきましたか」

見上げた蒼穹の中に、柔らかな瞳を細める若い女の顔がのぞいた。化粧気の無い顔、ほつれた黒い髪が潮風になびいている。懐っこい口元の右側に小さな笑窪があった。

話す声がよく聞こえない。女の好意は理解できたが、いまいち言葉を理解できず、桔華は朦朧とした表情を女に向けたままでいる。とりあえず助けてもらったらしいので、礼を言おうと桔華が口を開くと、それより先に女が顔を上げた。

「気がついたよ！」

「よかったです！」

女の呼びかけに、さつきと同じ調子で、御者の声が返ってくる。がらがらと馬車は進んでいる。話す声も聞こえないので自然と叫び声になる。

最上桔華（2）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

最上桔華（2）

川内村は、本州の北端、下北半島はまさかりの「刃」部分の中間地点に位置している。明治二十二年に桧川、宿野部、蠣崎ら三村と合併し、現在の川内村となった。人口は約四六〇〇。集落は海に沿うように四村、川内から山に向かって銀杏木、畑、安部城、湯野川の各集落が連なっている。古くは清和源氏の流れを汲む蠣崎氏がそこを根城にしていた。大地が畑作に適しておらず、飢饉が出れば多くの餓死者が出た。なので山に入ってはマタギが動物を仕留め、海へ出ては猟師がたくさんの方ラをとったりして生業とした。

半島の内陸には大量のヒバを保有している。集落の大部分は海に面しているから、古くから漁業や海運が盛んで、切り出した天然の材木を上方に送り出したりした。そんな地理的な要因もあって、青森の大きな商業都市である南部領八戸や津軽領弘前とはその文化の色合いが違う。かの町よりも、北廻船を通じて交易のあった上方や、アイヌ、蝦夷地といった遠方の文化が色濃く息づいている。

隣接している田名部には、明治維新の折に会津藩が移り住んで、斗南藩を名乗った。近年ではその斗南の子孫が川内流れてきているものもある。先祖以来川内に居住しているものの他にも、会津の血を引くもののほか、アイヌのマタギ、各地の商人の血縁をもつものたちが、ここに商圈を築いている。

女は、和泉晴子と名乗った。

ごとごとと馬車の荷台に揺られている。穏やかな日差しに、どこまでものんびりとした雲が、点々と快晴の空に広がっている。桔華は半分夢心地のまま、晴子の声を聞いている。

「早朝に田名部の宿を発ちまして、田野沢のお稲荷様の前で休憩をしようと思ったら、あなたが倒れていたのですよ。驚いて声を掛けたのですが、どんなに揺すっても反応が無いものだから、お医者様に看てもらわねばと思って連れてきたのよ。気がついてよかった」

おおよそ、こんなふうなことを言ったのだと思う。

半島独特の柔らかな訛りに、ざっくりと意図を解釈しているが、どうにも頭が回らない。うつらうつらと相槌を打っているうちに、晴子の自宅に着いたらしい。がたと荷台が止まると、晴子が元氣よく飛び降りた。

晴子の家は織物屋を営んでおり、中心商店街に面するように柵子が開いていた。荷車がその店子の前に到着したのはお昼の少し前で、手綱を引いていた男と一緒に重い荷物を降ろし、奥の部屋に運んだ。晴子は御者の男に「お昼を食べていきさい」と声を掛けたが、男は「次がありますんで！」と威勢のいい声を残し、馬に荷車を引かせて帰っていった。

桔華は体調が優れず、晴子の家に着いてもぐったりとしていた。店の上がり床に腰をかけ、梁に背を預けていると、そのすぐ奥の部屋で晴子はせっせと布団を敷いて、桔華の汚れた身包みを剥がすように取り上げて自分の襦袢を着せた。そして桔華を布団に押し込めると、「ちよつと出掛けてきますから」と言って、せわしく家を出て行った。

ここちちと時計の針の音が聞こえている。

昼過ぎなので、部屋に直接日の光が入ってこない。外よりも少しひんやりとした室内に、開け放たれた障子戸の周辺にだけ、やわく光が下りている。

寝床から中庭が見えて、そこには桔華の着物と雑記帳が三冊、竿に干してあった。庭に差し込む明るい陽に晒されて、ぽたぽたと雫を落としている。あと、柿の木があった。青い葉の下に、雀が二羽、さえずっている。

部屋の東側に、神棚があった。

天井から吊り下げているその神台に、御札が二枚とお神酒、徳利、そして二体のこけし。

晴子さんには、ご家族はいらっしゃるのかしら。

この家は、人の気配がしない。気のせいだろうか。思考をめぐらせる前に、茫洋となった。桔華は再び深い眠りに落ちた。そういえば布団で寝たのはいつぶりだろう。

まどろみの中に、一つ、黒い背中を見た。

その背中が何者なのか、自分では分かっているのに思い出せない。手を伸ばしているのに、届かない。自分では必死になってその背中に叫び、呼び止めているのに、背中に手が届くことは無い。それがこちらを振り返ることも無い。背中が桔華から遠ざかることも近づ

くこともせず、ただふわりと、海面に浮かぶ月のようにそこに揺らめいている。

流されるままに生きてきた。その何が悪かったのだと思う。

問いかけるもう一人の自分に、こう応える。「自惚れるな。お前は逃げていただけだ」

去来する大切なものたちを振り払うことが出来ない。置いてきたはずの過去を掘り返して、惨めな自分を哀れむ、そんな子供じみた考えを嘲笑しているもう一人の自分が、「私には、お前のように過ぎ去った何かを思い出している時間はないんだ」と切り捨てる。

「私はあなたのように強くは生きられないの」

大切なものすべてを手に入れようとして、そのうちの何か一つでも手に入れることが出来たのか、と彼女が問う。その瞬間に目の前の背中に、手が届いた。桔華がそれを手繰り寄せようとすると、その背中中は急に鮮明になった。身の毛もよだつ様な思いを実感として全身に巡らせているうちに、電気のように頭に血が上り、意識が一度途切れた。ああ、またここで目覚めるのだ、と桔華は思った。

ひん剥けそうなくらい、見開かれた二つの瞳があった。ゆっくりと瞼を上げた桔華は、その超至近距離の晴子から視線を背けることができず、かといって言葉も見つからず、そのまま濃密な数秒間を過ごした。

「ああよかった。お加減はどう？」

その大きくて黒い瞳が瞼に沈み、柔らかに細められた目に、例のえくぼが右頬にうかんだ。反射的に桔華は「水をください」と言った。晴子は台所から水桶と手杓を持ってきて、桔華に与えた。桔華は窒息しそうになりながら、その水をむさぼるように飲んだ。

まだ飲む？とばかりに晴子はにこにこ手杓を桔華に差し出した。桔華はそれを丁重に辞退し、大きく息を吸って、はいた。喉元から腹の奥に、そして臓器のひとつひとつに、きれいな水が浸透していくのが分かった。部屋の奥に、桔華の着物が折り目正しくたまれていて、その上に、ぱりぱりに乾いた雑記長が三冊、乗せられている。

「鉄の味がしない水を久しぶりに飲みました、助けていただいてありがとうございます」

「どうしてあんなところで倒れていたの？ご主人と喧嘩でもしたの」

晴子は、自分よりも随分若く見える。まだ二十歳を幾分か出たあたりだろう。その晴子の目には自分など、とうに亭主もこどももいる一端の母たる女に見えるのかもしれない。

事実、桔華は今年、二十七になる。女は十五歳を過ぎれば嫁に行くのが常。そういう意味では、晴子にも亭主がいてよさそうであるが、世も更け、時計の針は八時を過ぎているにも関わらず、その帰宅を待つという風でもない。

「なににせよ、お家の方に連絡をとらねばなりません。あなたのお名前と、お住まいを教えてくださいまし」

桔華は返答に窮している。家を出ざるを得ない状況になってしまったとはいえ、祖母には十年ばかり流れて来いと言われて京都を出

てきたし、仮に連絡を取るにしても山科から本州の北のはずれまで、
どうやっても迎えにこれるものではない。だがこのときも、桔華の
体調は優れない。すぐにここを出て旅を続けることも、心もとない。

「しばらくここにおいてはいただけませんか。動けるようになったら、お店などお手伝いいたしますから」

「ここにいるのは一向に構いません。だけど、あなたその体で、御家の方が心配しているでしょう。どこかの良家のお嬢様だとお見受けしますが、ちゃんとご家族とお話して、ゆっくり静養をとるのが一番ですよ」

晴子に他意はない。桔華は、良家などともないと言を横に振ったが、「江戸紫の美しい紋繻子地に糸の色を変えた丸の花刺繍。これだけ見事な帯を日常使いするなんて」と、織物を商う晴子は言った。当の桔華は、何も聞かされることなくこの帯を祖母より譲り受け、日々大切に使っていたのだった。いいものだとは思っていたが、旅も長くなるにしたがって、「良家の帯」もよく見ると折り目が擦り切れていたりしている。確かに、着物は漫遊のうちに帯より早く傷んで、少ない路銀を切り詰めながら継接ぎをしたりしている。これは、桔華の出自を判断する材料にはなりえない。

「ご心配には及びません、体のほうは、ちょっと休めばすぐによくなりますから」

「ほづないことへってるでね！ あんだ、腹ン中のわらすまで死なせてまるべや！」

その怒気に呼応するように、ぱあんと畳がなった。晴子は平手打ちした畳に右手をついたまま、己の逆立った感情を素直に体中から放出しているようで、桔華は今まで生きてきた中で、初めて現実

の人間に「お不動様」と形容できるものを見た。

まくし立てられた北国の訛りをゆっくりと咀嚼していくうちに、
ようやく一つの事実に辿り着く。

どうやら自分の腹の中には、新たな命が宿っているらしい――。

わたしの祖国（1）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog.fc2.com/>

わたしの祖国（1）

「絶対安静」を言い渡された。

「お食事は私が用意します。お風呂も、先生のお許しが出るまで、私が面倒を見させていただきます。とにかくあなたがするべきことは、何も考えずにゆっくり体を休めて、こどもを安心させること！そうすればその子はきっと元気に生まれてきてくれますから。そのように心得てくださいまし」

さっきまで穏やかな調子だった晴子が、畳み掛けるように言葉を並べ、そして詰め寄った。にべもなく桔華は「はい」と返事をしてしまう。自分よりも幾分も年下だろう晴子だが、桔華が返す言葉も無いほどに力をこめて、そう言い放った。「そういうわけだから、夜も長居をしてはいけない。早くお休みになって」と今度は桔華を寝かしつけようとする。されるがままに枕に頭を沈め、上掛けを首元まで上げられると、晴子はふわりと灯りを消した。

「おやすみなさいまし」

そういつて、晴子は静かに襖を閉めた。

夜闇が部屋に落ちると、庭からりりと虫の音が聞こえてきた。やがて弱くなり、重なるようにまた次の虫が鳴きだした。細い下弦、

庭の木、虫の音。

北国。とおい街。あの人。

こども。

はるこ。こけし。みおものわたし。

半分呆けた頭で、ぐるりと思考が巡っている。いくつもの点が現れるのに、その点が線を結ばない。結ばぬまま、ゆらりと靄に霞み、どろりと底知れぬ闇に沈む。

沈んだ闇の中から、溶岩のようにぐにやりと溶け出す。重い粘り気を伴って、桔華の闇を打ち破ろうとしてくる内側の力。その力が強く働いたびに桔華は幾度と無く悶え、そして苦しんできた。

国家。

祖国。

それは突如として現れた、大きな夢のような話だった。そこに描かれたものが壮大すぎて、地上から伸ばした手が届くことのない、どこか遠いところの話のように思っていた。

国家とはどんなものだろう。祖国とはなんだろう。その見果てぬ夢の答えを、桔華は未だ、見出せずにいる。

唯一つ分かっているのは、そんなものを大義名分にして、世界中が己が道を意固地になって貫こうとしている現実だ。その意固地につき合わされ、国土を蹂躪される隣人の都合など、彼らの眼中には無いのかもしれない。

それは桔華も同じだった。何も知らなければ、何もしなければ、こんなこと、お上がどうにでもしてくれるものなのだと思っていた。

決して忘れることの出来ないあの人の、この手の届くことの無い背中が見える。

凜としたその瞳も、精悍な体つきも、その瞼にくっきりと思い出すことが出来る。

あなたの力になりたいと思った。

だけど私には、あの人についていくことも、それを止めることもできなかった。

承俊。今どこに居るの。あなたは私を覚えていてくれる？

ねえ、あなたにこどもが出来たのよ。私とあなたのこどもなのよ。

あなたは喜んでくれるかしら。ねえどうして。

どうして私は、このことを心から嬉しく思っていないのだろう――
|。

京都を出てから約二年をかけて、浜松、小田原と太平洋に沿うように北上したあと、磐木から郡山に抜け、明治三十六年の初夏、桔華は仙台北下に辿り着いた。仙台の医学専門学校の近くにある宿を

取った晩のこと、昼間に見てきた青葉城の坂を、戦国の武将たちが駆け上がる様を思っ

もののふや 兜の月の 冴え渡る

と、雑記帳に書き付けて下の句を捻っているところに、下宿先の女将が飛びついた。彼女も素人ながら歌を詠むのだとかで、祖母、北条桜花のこともよく知っている、と言った。

「染み入るような寒い夜がいいわね、伊達公の凜々しさも忘れないで。『もののふ』では、ちょっと優しいのではないかしら」

女将は桜花の歌集雑誌「のはら」を愛読しているという。「のはら」は、桜花のサロンの集まる素人玄人の歌人たちの歌を集めた歌集で、半年に一度、ここ二年は三ヵ月に一度のペースで上梓されるようになった。発行部数は、約一万。当時、新聞「日本」の部数がそのくらいであるから、この数字は驚異的と言っている。

下宿一階にある共同の食堂には、入り口横の棚に創刊号から「のはら」が並んでいたし、「白樺」「アララギ」といった文壇の寵児がずらりと陳列してあった。その下宿では、多くの大陸からの留学生が医専に通うための仮の宿としていて、彼らが日本の雑誌を話題にしていたのを聞いて、女将も手に取り始めたのだという。今では彼らに負けないほど、女将自信も自らの句作に熱が入ってる。

桔華は桜花が自分の祖母だとは言わなかったが、自分も桜花に私淑している、と言った。すると女将は桔華に興味を持ったらしく、桔華が、知見を広めるために全国を旅して回る予定だと告げると、感慨深く二度頷いた。そうしてこの女将が桔華に宿への陳留を進めると、桔華も、当面の句作をここ杜の都に依ってみるのもよからう

と、仙台への滞在を決めたのであった。

女将は、女の身一つで各地を放浪する桔華の懷事情を理解して、「ここの御代はいいからね」と言っただけか、食事なども部屋まで運んでくれたり、布団を上げたりと世話を焼いてくれた。しかし、そのまま何もせずに厄介になるわけには行かないと、桔華も朝の炊き出しや、部屋掃除などし、少しずつ宿を手伝うようになった。その宿には女将の他には従業員が三人しかいなかった。全部で三十ある宿泊部屋のうちの、二十二部屋はちかくの医専に通う学生らが下宿していた。慢性的に人手が足りずに困っていたのだ、と、女将は桔華の手伝いを大層喜んでくれた。一ヶ月も経つころには、桔華はすっかりその宿の顔となっていたし、桔華もまた、その下宿に寝泊りしている学生たちの顔を見知るようになった。

多くは、清からの留学生だった。

中国は、列強による開国の波に晒されている。

十年前の日清戦争以後、国内の近代化を進めようとした光緒帝の親政が失敗、西太后の保守政権が再び実権を握った。国内を統べた大の西洋嫌いの彼女が、その広大な国土にゆるゆると近代設備を拵えているところに、義和団の蜂起という事件が起こった。急速に進む諸外国の土地侵略に反抗した義和団一派は、異国の教会や宣教師らを攻撃。しかし彼らは統一の指導部をもたなかったので、各地で独自に蜂起し、北京に向かって進軍を始めた。

西太后と清朝は、彼らを「義兵」と認めた。居留民保護を目的に、義和団の排除を求めた諸外国に対し、清朝は宣戦布告。しかし近代軍備を配した連合軍約二万のまゑに破れ、西太后は北京を脱出、列強は辛丑条約によって、中国大陆への進出の足がかりを得ることとなった。

このままでは、清国は列強の食い物にされてしまう。清国の多くの知識人はそのことに危機感を持ち、国の外へその答えを求めた。中でも日本という国は、アジアでもいち早く開国し、ここ数十年で目覚ましい発展を遂げており、西洋の書物なども多く訳されていたし、西洋人の教師も多かった。彼らの視線は、自然と日本へと向かった。

「孫中山の広州蜂起は時期尚早であったのだ。人心は未だ己がのみに向かいて、国家の民たる自覚無く、故に蜂起に賛同するもの少なく、革命を昇華せずして潰えてしまったのだ」

「拳匪の国内擾乱に際しては、それが、土地所有に関する民の身近な問題であったからこそ多くの賛同を得られたのだ。しかし、それを上手く扇動できない清国政府が舵取りを誤り、結果として西洋列強への門戸を開放することになってしまった」

ここにいる清国留学生の多くは、近くの医専に通っている。昼間は生理学、解剖学といった、人間の体の仕組みについて学んでいる学生達である。二十人いる学生の多くは、満州民族の辮髪を切り落として総髪となっているが、二、三人は、今でも剃り上げた頭に、細くて長い三つ編みを尻のところまで垂らしていた。

夜、下宿の食堂では、三人も集まれば、清国あるいはアジアの将来を憂う激論が飛び始め、やがてその人数が五人、六人と増えていった。

「ぱあん、金属の割れる音が食堂に響いた。激昂した留学生の一人が、机を叩く拍子に茶碗を割ってしまったらしい。女将も桔華も、ああまた始まったなという程度に思っている。桔華が「お代わりをお持ちします?」と聞けば、「いや、水をください」と彼は言った。激論には北京語の鋭い抑揚が行き交っているが、留学生たちは、女将や桔華には、少し慣れない日本語を、丁寧に使ってくれる。」

「ふざけるな貴様！それでは、わが清国が、列強の植民地となってもいいというのか！」

「そういうことを言っているのではない！日本を見てみる、自国の文化を残しつつ、西洋文化を享受することで、たった数十年で、アジアの宗主であった清国を打倒するまでに至ったのだ！光緒帝の改革むなしく、いつまでもあの西太后を戴いているから、こうして清国は、時代に立ち遅れてしまっている。いまこそ武力をもって彼女を廃し、真の民主国家を作りえるときではないのか！」

「なあ、お前はと思う、スンジョン！」

食堂の隅の座敷で、黙々と書物に目を通している青年がいる。彼はよほど目が悪いらしく、分厚いめがねをしているのに、さらに本に顔を近づけて、食い込むような勢いで文章を目で追っていた。

柳 承俊。

猫背のまま、ゆっくりと本から頭を上げたその顔には、投げかけられた問いに肯定とも否定ともいえぬ、厳しい色が浮かんでいる。

承俊は瓶底のような眼鏡を外すと、眉間に皺を寄せてその論議の輪を見やった。テーブルを囲んでいる清からの留学生たちは、五人机を挟んで承俊の目の前に座るもう一人の男が、ものさしのように伸びた背中のまま、書物から目を離さずに「国家論だ」と言った。

「ああ！」と承俊は大げさに頷くと、溢れんばかりの輝きを湛えた瞳を彼らに向けて、こう言った。

「やあ、この国はほんとうにすばらしい。この神経学書の和訳の正確なことといったら……！！漢訳でもここまで豊かに神経疾患の種類を表現することは難しだろう。先人は、どれほどの蛍雪に耐えたことだろう！！わたしはかつて無いほどに、感激で胸がいっぱいだ」

そういつて、承俊は三浦謹之助の著作を胸にしかと抱いた。教科書のような北京語ではあったが、桔華にも彼が日本を幾分か褒めたのだろうということは察しが付いた。桔華は、先ほどの割れた茶碗の欠片を拾いつつ、意味も分からぬ中国語の抑揚に耳を傾けている。この空気を読めないらしい男の注した油が、彼らの国家論とやらに火をつけたことは確かだった。

「何を言う！日本の文化など、もともと中国から取り入れたもの！そして今は西洋の猿真似をしているだけではないか！」

「冊封時代の名残をいつまでも捨てきれず、その猿真似すら出来ない我が祖国を恥とは思わぬのか！」

感動で胸がいっぱいらしい承俊を尻目に、今にも食器が宙を舞う勢いだったので、女将が「やるなら外でやりな！」と一喝した。彼らは抑えきれぬ感情をお互いに向けつつ、とりあえず女将に深く一礼をして、本当に外に出て行った。これもやはりいつものことである。女将は彼らを見送り、

「まあ、支那も大変だろうからね。気持ちとは分からも無いんだけど」

と呟いて、台所へ引き上げていった。桔華が茶碗の欠片を拾い集め、椅子を直して立ち上がると、座敷の二人はやはりさっきと同じ

ままで、一人はすました顔で背中をものさしにしていたし、承俊は相変わらず瓶底の眼鏡を書物ぎりぎりまで近づけて、虫のように文字を追っている。

ものさし背の男の名前は周一樹といい、字を才人^{ツアイレン}と言った。承俊と同じく、北京からの私費留学生である。年は、二人とも二十五歳。同じ部屋に寝起きしている。

この二人、いつも一緒にいるというのに、まるで正反対なので面白い。才人はその背が語るような生き方をしている。白い顔に短く刈った頭。若いながらに鼻の下に切りそろえられた髭。一文字に結ばれた口。座れば日本人も顔負けの見事な正座で、すらりと背が伸び、両手が軽く握られて腿の上ののっている。本を読むときもその状態のまま、視線だけを下げて読台に置かれたものを見やる。日本に来てから柔術を学びはじめたとかで、彼を取り巻く空気はそこだけぴりりと澄んでいて、本人も寡黙。一見ではとても近づきたい。

対する承俊は、穏やかな春の陽気のようにやわらかく、よく笑う。長い髪は切ったものの、切りっ放しのままゆるゆると波打つ黒い髪を、ざっくりと後ろで束ねている。着付けた支那服もどこかよれよれとしていて、よく転び、よく物を忘れる。そのたびに、才人が涼しい顔のまま床に転がった友人を助け起こし、部屋に忘れた筆箱をずっと差し出したりする。承俊が屈託無く「多謝」と言えば、才人は「別介意」と言ってすたすたと先に行ってしまったりする。それをあわてて追いかける承俊がまた後ろで転ぶ。同じことを繰り返す。

桔華は、薬箱を抱えて、宿の狭くて急な階段を上がっている。この薬箱が大きく重く、思うように前が見えない。挙句、夜である。先ほど桔華が使いから戻ると、闇灯の中に才人がいて、

「薬箱を探している」

と言った。何かと問えば、承俊が医専での解剖実習中に指を負傷し、まだ血が収まらないのだという。才人は日本語をまだ使いこなせていないというよりも、用件のみを簡潔に伝えるのが彼の話法のように、桔華が部屋まで持っていく旨を告げると、

「すまない」

と言って深く頭を下げた。このことを、桔華は特に気に留めることもなかったのだが、実は昼間、深い傷と知りながらも、承俊が日本人でないことを知って保険医が消毒液も包帯もくれなかったのだと桔華は後で知った。才人はこのとき、めいっばいの謝意をこめて、桔華に頭を下げたのだ。

ともかく。

包帯だけではなく薬箱そのものを持ってきて欲しいという才人の要望もあったので、両手で抱えるほどもある薬箱を携え、二階まで上がってきた桔華だが、どうにも襖を開けることが出来ない。この重さを一度床に置くことも躊躇われたため、部屋の前で右往左往している、内側からからりと襖が開いた。

部屋灯の中に、幾分か血の気の失せた承俊が、拵えられた敷布団の上でぐったりと横になっていた。

その力ない瞳の揺らめきが、桔華の顔を捉えていた。才人が頷いて桔華を部屋に招き入れた。瓶底の眼鏡は、いつもは承俊の枕元に広がったまま転がっているのに、今日は才人の小さな文机の上しんと収まっている。

わたしの祖国（2）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

わたしの祖国（2）

才人は長い指を藁箱に伸ばし、音も無くふたを開け、ガーゼと鉄製の鋏を取り出し、十センチ四方の正方形を三枚拵えた。それらを重ねて消毒液をたらし、染込ませ、ただ檻樓切れを巻いてあるだけの承俊の手を取ると、その檻樓を解いた。一瞬だが、桔華にもその傷口が見えた。親指の付け根から甲にかけて、ざっくりと一文字に割れていた。

血があふれ出るよりも早く、才人はさっきのガーゼで優しく傷口をなぞり、一枚目を捨てて出血する手首を上げ気味に握り、血の流れを一時的に止めて、残り二枚のガーゼをピンセットで器用に半分に折り、傷口に当てた。片方の手は承俊の手首を握ったまま。才人はするすると片手で包帯を巻きつける。

「終了」

なんだか桔華も胸をなでおろす。包帯に血はすぐに滲んでこなかった。才人が、余った包帯などを片付けようとするので、あわてて桔華も片付け始めた。

気がつくとき、承俊は青い顔を幾分か残したまま、眠ってしまったようだった。才人が承俊に布団を掛けてやった。長居をしては氣遣わせるだけだとおもって、桔華はその場を後にしようとした。

「等一下」

なんとなく呼び止められた気がして、桔華は振り返った。すると真直ぐこちらに目を向けている才人がいて、ものさしの入ったよう

な正座から、こちらに深くお辞儀をした。ああ、そうか。おそらく、彼が思うよりずっと、この人は彼のことを大切に思っているのね。

いいな、この二人の関係は。

桔華はそう胸に想起して、「お大事に」と声を掛け、部屋を後にした。

次の日、承俊は医専を休んだ。

朝食が終わり、がやがやと留学生たちが教科書などを包みにして、下宿を出て行く。ようやく静かになったかしらと桔華が食堂の椅子をテーブルに上げていると、才人が荷物を片手に一人で降りてきた。

「昨日は、ありがとう」

才人から声を掛けられるとは思わなかった桔華は、「いいえ」と戸惑い気味に返事をした。我ながらまずい反応だと思って背の高い才人を見上げるが、本人に動揺の色が無いことに桔華は少し、安心する。

「彼、調子よくないの？」

「大事を取らせたい。すまないが、今日一日様子を見ていてくれな
いか」

でなければまた一人でどこかにでかけていってしまうだろうから、と才人は付け加えた。それがなんだか面白くて、桔華は思わず、噴出した。

「かまいませんよ」

「重ね重ね、すまない」

才人は桔華の苦笑にもやはり表情を変えることなく、小さく頭を下げ、そして出かけていった。

まるで氣質が違うのに、なぜ一緒にいられるのだろうと不思議に思っていた。ふわふわと頼りない承俊が才人から離れられないのだろうと思っていたが、実際はどうやら逆のようだ。何の訳があつてか、しっかり者の才人は、あのふわふわした男をほおって置けないらしい。

桔華は承俊の部屋の前まで来ると、「お着替えをお持ちしました。開けますよ」と言って返事も待たずに襖を開けた。よく晴れた昼下がり。開け放たれた障子から、初秋のさわやかな空気が流れ込んでくる。

「え？」

「あ」

窓に飛び移ろうとする承俊。桔華はとっさにその腰に組み付いた。驚いた承俊が抵抗する。とりあえずさっきの才人の言葉が頭の中を巡っていて、桔華のほうも彼を逃すまじと必死。

承俊が怪我人であることも、桔華が女であることにも関わらず、

お互いを取っ組みあいをした挙句に、ようやく桔華は、承俊を床に組み伏せた。ばらばらと飛び散る、医専の教科書。どうやら本当に、この男は学校に行くつもりだったらしい。

才人が冗談を言うとは思えなかったが、本当に冗談を言っていたのではなかったようだった。

「何するんですか！わたしは学校に行きたいのです！」

「そんな青い顔して、学校行って何するんです！大人しくしていなさい！」

窓から脱出を試みる辺り、承俊は才人がここの従業員に言付けをするということが分かっていたのだろう。このやろう、確信犯か。

「学校に行きたい、わたしは、早く、医者になりたい」

桔華の腕の下にいる承俊は、例のまっすぐな瞳で桔華を見上げてくる。

つねづね不思議な男だ。この目を見ていると、どうしようもなく、彼の力になりたいと思うようになる。

とりあえず、外行きの格好の身包みを剥がして持ってきた新しい寝巻きに着替えさせ、登校することにまだ未練がありそうな承俊を布団に戻す。彼は案外、素直に従った。

「才人は、ちょっと過保護すぎます」

桔華は部屋に散らばった医学書などを取り上げている。承俊は布団から身を起こし、独り言のようにそう呟いた。

「そうかしら。彼のあなたを労わる気持ちは純粋なものよ。いい友

人を持ちましたね」

六畳ほどの畳部屋に、承俊と才人は寝起きしている。机を窓に向かって二つ並べていて、向かって右側が才人、左側が承俊のスペース。

才人の文机の上は綺麗に整頓されていて、布団もしっかり上げてある。書物も、押入れに背表紙を合わせて収納してある。承俊のほうはというと、読んだ本は読みっぱなし。筆を使えば使いっぱなし。それを、彼が学校へ行った後に毎日桔華が整頓してやるのだ。

「違うんです、彼はきつと、わたしの父に恩返しをしたいと思っています。だからこんなに私を気遣ってくれるのです」

桔華は本を拾う手を止めた。その感情の微妙な鈍りが、なぜだかとても気になった。

「どういうことです？」

承俊は手元を見つめながら、ときどき慣れない日本語でぽつぽつと語りだした。

私の父は、朝鮮の漢城で生まれました。もとより学問が好きで、もつと西洋のことを知りたいからと、鎖国を続ける祖国を出て、母と共に北京に移り住みました。そこで、才人の父親と出会いました。志を同じくする二人は、心腹の友となるのに多くの時間を要さなかった。まもなくして私や才人が生まれ、私たちは小さなきから多くの時間を共に過ごしてきました。

才人の父親は、科挙に合格した進士で、当時の光緒帝の近くで皇帝に西洋のことを教えていた知識人でした。皇帝は、旧弊に固執する清朝政府の政治姿勢を批判し、清という巨大な国を本当の意味で

近代化させねばならないと考えていた。しかしあるとき、光緒帝と行動を共にしていた急進派が、西太后を暗殺して改革を断行するという話が流れた。彼女は自分の義理の「息子」でもある光緒帝を追放し、再び清朝の実権を握ると、自分の暗殺を企てたとして、皇帝の近くに仕えていた多くの知識人を、

「処刑しました。その中に、才人の父親もいました」

光緒帝を擁する急進変法派を一掃した、西太后のクーデター。大陸で起こった「戊戌の政変」は、桔華も新聞でその概要を目にしていた。今から五年程前の話だ。

「西太后の怒りが、家族に及ぶことを恐れた私の父は、才人とその母を匿おうとしました。しかし、才人の母は北京を脱出する際、西太后の追っ手に見つかって殺されました。わたしたち家族は、才人とその妹とともに、奉天で暮らし始めました。才人は、『迷惑は掛けられない、自分で働く』と言ったのだけど、父は才人が、幼い頃から医学に関心があることを知っていた。だから彼をわたしと共に北京の大学堂に入学させました」

負い目を感じているのか。彼を包むその痛ましいほどの空気は、彼自身が自らに課した、家族への弔いのようなものなのかもしれない。

「清国への憤りを誰よりも感じているのは、才人のはず。でもそういうものに首を突っ込まないようにしているのは、自分の立場をわきまえているからなのかもしれないです。だけど、わたしは才人に、自分の思うように生きて欲しいです。自分の考えていることを、何でも話して欲しいです」

桔華は気がつく、いつも才人がそうするように、ちゃんと背を

伸ばして承俊に相對していた。

胸中に渦巻くものがある。書物の知識でしかない、朝鮮と清国。その国の土を踏みしめ、文化を享受し、政情に追われた人物が今、自分の目の前にいる。記事を追うだけで、その処刑された首謀者たちに家族がいるということに、思いが至らなかつた自分の心の目が、見開かれるような思いがする。

自分の生い立ちを不幸に思ったこともある。腹違いの子と最上の家には冷遇されても、自分には祖母がいたし、古月がいた。そう思えるようになったのは、つい最近のことだ。

「あなたは どうして、医者になりたいの」

承俊が顔を上げた。まだ少年のようなあどけなさの残る顔だ。

「助けたい人がいる」

あ、そうだ、と承俊は続けた。

「まだ、名前を聞いていません」

深く詮索されたくないのだろうか。「最上桔華です」と名乗ると、承俊は漢字の書き取りを知りたがった。

「中国では、男の人のような名前だ」

「そうなのですか？」

「大陸に縁のある人がいるのですか」

名前をつけてくれた祖母は、台湾で暮らしていたことがある、と桔華は言った。好！と承俊は笑った。

「玉のような美しい女の子は、神さまが深く愛されて、早く召し上げると聞いています。だから男の子のような名前をつけて、神さまに取られないようにするのだと。なるほど、納得しました」

彼は素でそんなことを言っているのだ。これをいちいち気にしていたら、おそらく心臓がいくつあっても足りやしない。

結局、承俊は医専から帰ってきた才人にこっぴどく嫌味を言われ、

「医者の不養生とはこういうことだ」

ととどめの一言を刺され、ひどく落ち込んでいる。その様子を見ていた桔華は、「ちよつと言いすぎでは？」と晩飯に一人で降りてきた才人に声を掛けると、

「もともと体も強いほうではない。なのに好奇心と感受性だけは人一倍ときている。このくらい言わねば本人のためにも、その回りのためにもならない」

と才人が言った。なるほどそのとおりだろう。

確かに、才人には承俊の父親に、医学を学ばせてもらっていると意識があるのかもしれない。しかしそればかりではなくて、幼い頃から兄のように自分を慕い、そして家族を殺したときも近くにいて自分を支えてくれた承俊のことを、才人は本当に、大切に思っているに違いない。

そう思うと、桔華はやはり、この二人のことがとても好きだ、と思うのだ。

明治三十七年が明けた。

日本は朝鮮半島の権益を巡り、北の大国ロシアとの交戦の機運を高めている。

十年前の日清戦争では、下関で陸奥宗光と李鴻章とのあいだで馬関条約が締結された。賠償金二億両を勝ち取ることは出来たが、獲得した澎湖諸島及び遼東半島は、ロシアをはじめとするフランス、ドイツの干渉により、清国に返還することとなった。

その遼東半島の旅順港に、ロシアが第一太平洋艦隊を常駐させている。日本の遼東半島返還後にロシアは清と約定を交わし、旅順・大連を清国から租借したのだ。

もし、朝鮮半島がロシアの支配下に落ちれば、続いて日本本土が次のロシアの標的になる可能性がある。日本が朝鮮に強引にてこ入れを始めたのには、そんな理由も考えられる。先の条約では、日本は清国に、朝鮮が独立国であることを認めさせている。井上馨を朝鮮の特命全権公使として送り込み、彼の元で内政改革を行うつもりだったのだが、閔妃を殺害された高宗は、ロシアに後方支援を求めた。そのためロシアは、朝鮮での多くの権益を認められることとなった。

朝鮮という国は、もともと清国の属国であった。十三世紀に始まる、中国を盟主とした巨大なアジアの冊封体制に内包される朝鮮王

国は、十年前の日清戦争で清国が日本に敗れると、その従属関係から独立し、高宗は「大韓帝国」の樹立を宣言、自らも皇帝を名乗った。

できたばかりの「大韓帝国」では、高宗による官僚制度の近代化が進められている。教育を浸透させ土地を測量して税制改革を行い、鉄道敷設の準備を始めた。近代的な軍隊の整備も始まった。

そこに、北京で義和団が大きな反乱を起こした。

連合軍の撤退後に、ロシアは満州全土を制圧した。度重なる本国の戦争のためにアジアに戦費をさけないイギリスは、度重なる満州からの撤兵要求に応じないロシアに危機感を募らせ、日本と同盟を結ぶことで、ロシアとの対決姿勢を鮮明にした。ここに「ロシア・朝鮮」と「イギリス・日本」の図式が生まれた。

日露戦争は、この年の二月に開戦となるのだが、外交ではその直前まで対露戦回避のための折衝が行われている。すなわち日本は、ロシアに、満州における權益を認める代わりとして、ロシアに日本の朝鮮における權益を認めて欲しい、という妥協案を、ロシア本国へ打診した。しかし、大韓帝国における利権を拡大しつつあった当時のロシアは、当然ながらその要求を受け入れることはしなかった。

小村寿太郎外相が、ロシアのローゼン駐日公使に国交断絶を宣言したのは、この年の二月六日のことである。

三月。仙台の春は、京都に比べれば待ち遠しいほど彼方に感じる。

桔華は前掛けにたすきがけの姿で、下宿の庭先を箒で掃いている。建物の影に小さく残る雪解けが、陽にあてられてきらきらとその儚い姿を主張していた。

つぼみの膨らみだした枝垂れ桜の枝に、ツグミが止まり、小首をかしげている。玄関先で、女将と留学生の声がした。医専を卒業する留学生たちがまた一人、生まれた国へ帰国していく。

「よくがんばったね。また日本へ遊びにおいで」

頭を下げた清国留学生の肩を、女将がぽんぽんと叩いた。始めは日本の文化に苦戦していた異国の若人たちも、四年も暮らしているうちに、友と連れ立って銭湯へ行き、朝食に味のりと納豆を必ず請うようになった。彼らの日本人に対する態度も、アジアの盟主国たる不遜なものから、次第に軟化していった。それは、女将の人柄によるものも大きい。彼女はそういうものには頓着せず、皆を平等に面倒を見た。

日本も中国も朝鮮もおなじあじあ　なんぞ討ったり討たれんか

紅玉

「紅玉」とは、女将の雅号である。いささか、まっすぐすぎる嫌いがあるが、この下宿を後にする留学生の全員に、自分のしたためた短冊を渡した。彼らはそれを受け取って、泣いた。彼らは今、日本人の多くが自分たちをどう思っているのかを知っていた。女将のような日本人がいることは、彼らに涙を流させるほど、強烈な出来

事だった。

明治もこのころになると、日本人のアジア諸国に対する優越意識というものが、国民の間にも浸透しつつあった。

桔華が才人と承俊の部屋をたずねると、承俊が難しい顔で『河北新報』を眺めていた。

「日朝、共同で半島の防衛方針定む」

才人はいない。承俊は桔華が襖を開けたことにも、気がついていないらしい。

日韓議定書の締結である。

日露戦争は、旅順港を巡る戦いであるともいえる。かの地に進軍させるため、帝国海軍は旅順港外のロシア艦隊を攻撃するところから始まった。陸軍は、白河川修大將率いる先発軍が釜山に上陸、半島を横断して、遼東半島を山手から攻略しようと進軍を開始している。

大韓帝国は、この両国の対立に際し、局外中立を宣言した。

だが日本は以上の理由により、朝鮮半島を南から北に横断しなければならぬ。そこで日本は、戦場へ軍事物資を輸送するための、通行権を大韓帝国に認めさせた。同時に、日本が第三国から韓国を保護することを名目に、日露戦争遂行に必要な土地や物資を供出することを規定。明治三十七（1904）年二月二十三日、この約定

は、日本の特命全権公使林權助、大韓帝国の外部大臣臨時署理陸軍参将李址鎔によって調印された。

『大日本帝国皇帝陛下の特命全権公使林權助及大韓帝国皇帝陛下の外部大臣臨時署理陸軍参将李址鎔は各相当の委任を受け左の條款を協定せり』

第一条 日韓両帝国間に恒久不易の親交を保持し東洋の平和を確立する為め大韓帝国政府は大日本帝国政府を確信し施設の改善に關し其忠告を容るる事

第二条 大日本帝国政府は大韓帝国の皇室を確實なる親誼を以て安全康寧ならしむる事

第三条 大日本帝国政府は大韓帝国の独立及領土保全を確實に保証する事

第四条 第三国の侵害に依り若くは内乱の為め大韓帝国の皇室の安寧或は領土の保全に危険ある場合は大日本帝国政府は速に臨機必要の措置を取るへし而して大韓帝国政府は右大日本帝国の行動を容易ならしむる為め十分便宜を与ふる事。大日本帝国政府は前項の目的を達する為め軍略上必要の地点を臨機収用することを得る事

第五条 両国政府は相互の承認を経すして後來本協約の趣意に違反すへき協約を第三国との間に訂立する事を得ざる事

第六条 本協約に關連する未悉の細条は大日本帝国代表者と大韓帝国外部大臣との間に臨機協定する事』

活版印刷された切れ切れの文字を追いながら、桔華は、「これは、日本にとっても朝鮮にとってもいい話ではないか」と思った。江華島以来不和の続いていた隣国と、「恒久不易の親交を保持し東洋の平和を確立する」とある。しかも第三条で、「大日本帝国政府は大韓帝国の独立と領土を確実に保障する」と謳っている。韓国は日本に比べれば軍の近代化に若干の立ち遅れがあるから、第四条の「軍

略上必要の地点を臨機収容することを得る」というのも、日本軍が半島で防衛体制を施行するには必要な条項だ。北からロシアが差し迫っている今まさに、それが必要なのではないか。

『同じ東洋の国である日本なら、分かってくれると思っていたのに』

承俊が珍しくハングルでそう呟いたので、桔華には彼が何を言っているのか分からなかった。「何？」と問えば、すぐ隣に桔華がいたことに今気がついたらしい承俊は、「なんでもない」といって新聞をくしゃっと奥に追いやった。

「なにかありましたか」

「いいえ、先ほど、劉世さんが女将に帰国の挨拶に来ていましたよ。あなたは行かなくてもいいの？」

承俊はああ！と声を上げて、机の上の瓶底眼鏡を取り上げると、襖を開けつつ眼鏡を装着しようとした。だが、襖は先に、外から開いた。よろめいた承俊は入っていた才人にぶつかった。

「ああ、お帰りなさい、才人」

才人は入ってくるなり携えてきた『時事新報』をビリビリと引き裂いた。後ろ手にその紙面を殴り捨て、自らの文机に音を立てて座り込んだ。桔華と承俊は、才人がこんなに感情をはっきりと表現したところを見たことが無く、しばらくあっけに取られていたが、下から先ほどの女将と留学生の声が聞こえ、玄関の開く音がしたので、承俊は我に返ると、「挨拶をします」とその場を後にした。

才人と承俊は、今年で医専三年目。次年度が最終年となる。

桔華は先ほどの承俊の読んでいた記事を思い出して、そのことかしらと破れたタブロイド紙面を覗いたが、確認できた限りでは朝鮮の話は見当たらない。ではいったい、才人は何にこんなに怒気を露にしているのだろう。しかしそれを聞くこともためらわれたのでとりあえず、才人が好んで読んでいる『中央公論』の最新刊の話でも振ろうと口を開けかけた。

「出かけてきます、夜までには戻ります」

相変わらず、その表情は晴れぬまま、桔華の横を通り過ぎていく才人。それを纏う空気が、桔華に彼を呼び止めさせなかった。

無残に左右に破られた紙面には、仁川沖でロシアの巡洋艦ヴァリヤーグと砲艦コレエツの二隻を沈めたという見出しが題字の横にあった。続いて仙台市政と、新聞小説。

とりあえず片付けようと手に取った紙面の裏、ひときわ目を引く五段抜き挿絵が目に入った。

斜め上からの俯瞰図。左手前方に馬上の將軍を先頭に、捧げ筒の日本兵が列を成して入場している。右手後方には、喜色を体いっばいに現したぼろ服をまとった民衆が、彼らの入城を心より祝福するように歓喜の声を上げている様。

『勇猛なる日本軍の勝利を喜ぶ支那人民』

理由は分からない。だが、心にざわめくものがある。

自国の軍隊が他国の民衆に歓迎されているのだ。何を疑問に思うというのだろうか。

恒久不易ノ親交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確立スル為……

得体の知れない寒気が背に走るのを、桔華は感じている。
どうして自分は、何も知らなかったんだろう。なぜ、疑問に思う
ことも無かったのだろう。どうして――。

わたしの祖国（3）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥灣を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog.fc2.com/>

わたしの祖国(3)

四月。新学期が始まり、新たな留学生たちが下宿にやってきた。始業式を経て、あちこちで桜の開花が囁かれ、人々の心もこの諸事始まりの月に臨んで、浮き立っている。

下宿の庭にも、小さな桜が一本植わっている。その細い枝の蕾が膨らみ始めた頃、桔華に桜花からのたよりが届いた。

その便りに、北条古月直筆の便箋が同封されていた。

「桔華へ 元気か？」

おれは今ロンドンにいる。この手紙は帰国するおれの知り合いに託して、桜花様からお前に届けてもらうよう言付けた。お前は相変わらず頑固で、桜花様以外の誰にも、今自分がどこに居るのか教えとらんらしいな。お前らしいというか、もう少し、人の手を借りるということ覚えてたほうがええんとちゃうか。歌を詠むのもいいけど、女一人で旅しとるお前を心配しとるこっちのこと考えることがあるなら、少しでも連絡をよこせ。

イギリスというのは欧米の中でも早くに産業革命を成し遂げた国だけあって、街の中に人々の知恵が溢れている。ショー・ウィンドウには痩身のマネキンが見事な絹ごしらえのワンピースを纏い、思いのポーズを取っておる。蒸気自動車が黒光りする体を街頭に表したときは、おれもはじめは驚いたものやが、今では街行く人のように、日常の一風景になってしまった。着るものにしても男は仕事に行くなら上下を真っ黒なスーツを仕立て、靴音高らかに颯爽と

風を切って歩いておる。どうしてそんなに胸を張って歩かんとならんのか、おれにははじめ分からなかったが、彼らは確固たる「自己」なるものを心に内包し、己の存在が世界に名だたる大英帝国を支えているっちゅう自負がある。今日本でそない振る舞いしようにも、商店街を横切ったところで近所の売文業者なぞに「西洋に被れて、古来の謙虚という美德を知らぬ」と叩かれるのが末。だけど日本もこういう連中の仲間入りをするなら、見栄えではなくて、国民一人ひとりの「確固たる自負」を己が内に自覚せねばならぬ。

欧米における日本の人気っちゅうもうんは、外聞するより酷いもんや。好き嫌いというより、日本ちゅう国を知らんといった方がええかもしれん。

分からなくも無い。やつらにとっちゃ、地球の反対側の小さな島国のことや。十年前に眠れる獅子を倒したことも、北京での東洋の憲兵としての働きも、象の足元のうごめく蟻のようにはしか見られておらへん。驚くほどに無関心や。わいが日本人と知ると、連中は「あの雪香という女は、どうやってモルガンの懷に取り入った？」と真顔で聞いてきよる。おれとの商談よりも、アメリカ人のモルガンという男に四万円も出させた日本の女というものがどういうものか、そっちのほうに興味があるようやわ。

けど、日本の輸出品は、欧州でも確かに大きな存在になってきている。特に綿製品の安さと品質の高さ、「MADE IN JAPAN」が一つの大きなステータスになりつつある。今は関税の障壁もあるから本国の製品とタイを張っていられるが、今後日本の国際的地位が上昇して、自由貿易を提唱するようになれば、国内産業に影響が出るのは間違い無い。せやから、少なからず日本の動きに注目している動きはある。昨年の同盟にも、協定という形で日本に一定の恩を売り、将来に布石を打ったのだろうということは明白やな。

内地から旅順までの軍事物資の海上輸送のすべては会社に任せて、

おれは単身でこちらに渡ってきたが、耕三郎に紹介してもらった久坂廣枝というのは、帝国陸軍将校らしからず口上の回る男で、よく笑い、よく怒り、そしてよく面倒を見てくれる。この男は、耕三郎と士官・陸大と同期だとかで、曰く「おもしろい男だ」ということだが果たしてその通りだと思う。普段は士官然として軍服に身を包み、主に英国士官との交流を主な任務としているということだが、自分の体の自由が利く限り、同じ日本人である自分の、販路拡大にその人脈を介して力を貸してくれる。

先日、その久坂を通じて、シフという男と知り合った。この男はフランクフルト生まれ。十八のときに渡米して、アメリカで銀行家として一財産を築いた後は、ロシアでユダヤ人コミュニティのためにユニオン・カレッジを創設したり、多額の慈善活動をしているということや。久坂が言うには、この男はロシア国内でもシオニストや革命分子に資金を流用しているとか。ユダヤ人を蔑視する社会にいい感情を抱いていないだろうことは、久坂の分析を待つまでも無く、事実やと思う。

久坂は、この男を日銀副總裁の高橋に会わせると言っておる。この副總裁さんは、ロシアとの戦争のための外積が上手く集まらんと苦勞しているようやったから、もしかしたらいいふうに転ぶかもしれないと思つとる。わいも出来ることをしようと思う。」

ここまで読み進めて、桔華は思わず噴出してしまう。

どういう心境の変化か、手紙では「おれ」と語っているのに、ここだけ一人称が「わい」となっている。

商売人といえど、決して饒舌ではないこの従兄弟が、必死になって机に向かうさまが目に見えるようだ。京都を出て三年。あのような別れ方をしてしまったにも関わらず、こうして臆面無く頼りを送ってくるところからして、なんとも彼らしい。

それに比べ、自分は相変わらず後ろを向いたままなのかもしれない。彼にはもう妻子がいて、そして国のために果たすべき役割がある。

自分はいつまでも過去に固執して、綺麗な思い出ばかりをいとおしむ様なことばかりしている気がする。古月のこの手紙に、あのとき聞けなかった一言が記されていることを、心のどこかで期待していたに違いなかった。

「そうや、篠が二人目を身籠った。七月に生まれる予定や。」

ゆゑからだいぶ年が空いてしもたな。今度は男の子や。間違いあらへん。

きつとおれはこのまま帰れないだろうから、桔華、お前、篠のそばにいてやってくれへんか。

篠もお前やったら安心して世話になれると言うとったからな。

では、達者で。古月」

七月か。古月とその妻、篠は今東京に居を構えている。篠に会うのも三年ぶりだ。長女、ゆゑの顔も久しく見ていないから、足を伸ばしてみようか。

「お手紙ですか？」

玄関でぼんやりと手紙を読んでいた桔華の後ろから、承俊が声を掛けた。後ろめたいことがあるわけではないが、くしゃりとその手紙を隠して、桔華も後ろを振り返った。

承俊が酒らしき一升瓶をかかえて、きょとんと桔華を見つめていた。才人がその後ろから重箱をかかえて現れた。

「お花見をしましょう、さあ、最上さんも手伝って！」

才人の持つ重箱の二倍はありそうなお重をかかえて、女将が桔華の横を通り抜けていった。

青葉城に桜の名所があるので下宿生を引き連れていこう、と言ったのは女将だったのだが、才人がそれに難色を示した。実は先日、他の清国留学生と日本人の花見客が、下宿近くで酔った挙句の乱闘騒ぎを起こしていたからだ。

「団体となると、人目に付きやすい。いらぬ騒ぎを起こしたくない」「そうやって縮こまってちゃあ、学校にだって通えやしないよ。気にすることは無い」

と、いう女将に才人は尚も食い下がった。話を聞いていると、どうやらそういう場に承俊を連れて行きたくない、というのが本音らしい。なるほど、承俊の好奇心をもってすれば、いつどこで酔った花見客の絡みの種にされるか分からない。

そういうわけで、花見の会場は下宿の敷地内となった。

東側が、宿兼下宿の建物、西側が女将の家族の住む建物となっていて、ほとんど住み込みで働いている桔華も、女将の居住する棟へはほとんど足を踏み入れたことが無い。細い廊下を渡っていくと日の光の入らない座敷が三つ並んでいて、女将は立て付けの悪い雨戸をがたがたと開けた。入ってきた日の光に、埃が無数に舞っていた。

女将と才人が二人掛りで廊下の雨戸を全開にすると、板塀の小さな中庭に梅の木が三本植えてあって、枝にぼんぼりのような花を揺らしていた。女将が手の埃をほろいながら自慢げに鼻を鳴らした。

「どうだい。立派な花見だろう？」

承俊が声を上げて、庭に駆け下りた。「女将さん、これがワビ、サビですね！」と声を上げ、女将は「そうさ！これが日本の春さ」とやはり誇らしげ。桔華が首を捻っていると、隣で才人が「違うと思う」とぼそりと呟いた。廊下を拭き、庭に敷物を広げ、お重を並べて花見の用意をしていると、どこからか話を聞いたらしい下宿の留学生たちがぼつぼつと集まり始めた。彼らもまた、この小さな庭の梅の花におおのの心を揺らしているらしい。

女将の乾杯で、宴会が始まった。

会場には十三、四人もいるだろうか。笑っているもの、黙々と酒を飲むもの（主に才人のことだが）、肩を組んで中国語で歌いだすもの、手拍子を打って踊りだすもの。承俊は踊っている連中のなかで一際ぶきつちよに手足を振って見せ、やがてひっくり返って聴衆を沸かせた。ずり落ちた眼鏡を直しつつ、体を起こしながら苦笑している。

ゆるゆると酒を飲んでいた才人が、女将と桔華に酒を注ぎに来た。

すでに手酌で出来上がっている女将が、上機嫌で受けた。先ほどまで飲んでいなかった桔華も、才人にお猪口を手渡され、なみなみとそれを受けた。

「日本での生活も残り一年ですね」

桔華は胸の奥にある一抹の惜寂に気がつく。それは承俊、才人、そして目の前にいる下宿生すべてに平等に向けられたものであると思う。

彼らは、「医学を学ぶ」という明確な目標を持って、異国の地へやってきた。ここにいる志を同じくする仲間とともに競い合い、語り合い、笑いあう姿は、桔華にはとても眩しく見える。自らが決めたこととは言えど、桔華は女一人で道中を旅している。師、桜花と手紙のやり取りがあるにせよ、道行くときはやはり、語りかけるべき隣人は無いのだ。

だからこそ、行く先々での出会いが、度重なるごとに重みを増してくる。たった一言、言葉を交わすことの、情の通い合うことの尊さよ。出会いがあり、そして別れを迎えるたびに胸の裂ける思いをしたこともあった。しかしそれがまた新たな出会いにつながり、また新たな情を通わせることになる。

才人は桔華の隣に腰掛け、ゆったりと杯を呷っている。女将は承俊たちに歓声をあげると、勢いその輪に加わり、一緒になって肩を組み、歌い始めた。桔華は小さな梅の花がはらりと風に舞うのを眺めながら、今のこの新緑に泉の湧く様な穏やかなこの風景に心安らかなひとときを感じていた。

「ねえ才人、承俊の言ってる、『助けたい人』って、誰のこと？」

才人は杯を口に運ぶ手を止めて、虚空を見た。おや、と桔華は思った。

「あれが、そんなことを言ったのか」

「聞いてはいけなかったかしら」

「いや」

そう言つて才人はぐつと杯を飲み干した。桔華が銚子を差し出すと、才人がそれを受けた。

「俺の妹だ」

そう言う才人の表情は冴えない。注がれた杯を口に運ばず、才人は腿の上に据え置いた。

「二十歳まで生きれないだろうと医者に言われている」

「いまお幾つなの」

聞いてしまつてから、桔華はしまったと思った。その年齢を聞いたところで、自分に出来ることは何も無い。むしろ、才人に心理的負担を強いるだけだ。

「今年、二十歳になる」

想定された返答だった。泡立った感情をどうしようも出来ないまま、桔華は思わず身を引いてしまった。

「昔、承俊が川で溺れた事があって」

大人も近づかない流れの速い川だった。ようよう川から引き上げられたが、承俊は容易に目を覚まさなかった。

「丸一日眠り続けて、ようやく目を覚まして、まず初めに妹の名を呼んだ」

『承俊、私はここにいるよ、しっかりして』

『花を』

「承俊は自分が気を失いながらも、手に握ったその花を決して離さなかった。その花は、花好きの妹がずっと見たいといっていた貴重な花だったらしい。承俊はその花を摘もうとして川に落した」

小さなその手が、必死に掴んだ小さな花。大切な何かのために懸命に振舞おうとするその姿は、年を重ねても曇ることが無い。彼は今もなお、才人の妹のことを大切に思っているのだろう。

「何の話？」

渦中の人物が、桔華の隣に位置取った。「何をしている承俊！まだ勝負は付いていないぞ！」と叫ばれ、「これを食べたらいくよ！」と返す。みたらしの櫛団子を一つ、口に運ぶと、才人が「お前が川でおぼれた話をしていたんだ」と言った。

承俊はほおばったまま大げさに驚いて見せて、一生懸命それを飲み込むと、取り繕うように桔華に向き直った。

「違うんだ、あのね、今は泳げるようになったんだ」

承俊が言うには、その当時はまだ水に顔をつけることも出来ないほど幼く、身長も大きくなかったから底に足が着かなかったんだ、

というようなことを言っていた。しかし話を聞いていると先ほどの才人の話よりも随分幼い頃の話をしているようだ。才人はそれに特に修正を加えることも無く、気がついた桔華も特に口を出すことなく、承俊の必死の抗弁を笑いをこらえつつ頷いている。

「桔華さん、何笑っているんですか」

とうとう承俊がむづくれてしまった。桔華は堪え切れない笑みをこぼしつつ、「ごめんなさい」と言った。才人は相変わらず、静かに酒を煽っている。

「日本語、ずいぶん上手くなりましたね」

「話逸らしましたよね」

「いえ、これは本当」

訝しい視線を送ってくる承俊。その彼の目と桔華の目が合う。どうしてだろう。友とその妹を大切にしようとするこの愚直な男のことを思うと、胸の奥がふわりと軽くなる。この柔らかな春の陽光の中に、幼き日の承俊と才人、そしてその妹の三人の戯れる姿を見たような気がした。しかしその木漏れ日の影に、逆らうことの出来ない確かな「別れ」が迫っている。目の前にいるこの純粋な男が、一つの命を背負い、海を越えてこの国へ医学を学びにきたのだということを、桔華は今一度思い返してみる。

――― 天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に いでし
月かも

「仲麻呂？」

「はい、日本の和歌を勉強しました。桔華さんは、和歌を詠まれる
そうで」

まだ修行中の身です、と桔華が謙遜すると、承俊は身を乗り出して
きた。

「阿倍仲麻呂は、中国でもとても有名で」

すると承俊は、記憶を一つずつ手繰るように、仲麻呂の長安までの
道のりや、唐の有名な詩人たちとの交流、玄宗皇帝のこと、長安
では晁衡を名乗ったこと、そして安祿山の乱に際しては日本への帰
国を認められなかった彼の生涯を語った。

「彼も祖国を思ったのかなあ」

「生まれた土地を思わぬものはいない」

才人が感想を述べた。もう三年も祖国を離れているのだ。同じ年
月を実家から離れて暮らしている桔華だが、海を越えて文化も言葉
も違う国に來ている彼らと、望郷の思いを等しく考えることは出来
ない、と思った。まして、仲麻呂の時代であれば尚更で、今よりも
航海術も交通機関も発達していないかの時代、日本と長安はそれこ
そ天と地ほども遠い場所であつたに違いない。

祖国、か。

日本から出たことのない桔華には、「祖国」という言葉は、帰る
べき場所という意味の「故郷」以外の意味を持ち得ない。自分が思
っている以上の言葉の重みに、承俊や才人と自分の決定的な距離を
感じている。今自分の目の前で仲麻呂を省みた承俊、先ほどから酒
をたしなんでいる才人、そして眼前のすべての留学生に、日本では

ない彼らの「祖国」での顔と、そこで営んでいた暮らしがある。

ふと、先日の記事を思い出す。日本は今、ロシアと交戦している。戦場の舞台は、他でもない、彼らの祖国の土地である。彼らは自分たち日本人を、その日本に留学している自分たちを、桔華が考える以上に複雑に思っているのかもしれない。

「桔華さん」

名前を呼ばれて、桔華は夢から引き戻された。「何」と聞けば、「仲麻呂と同時代の唐の詩人に、王維というひとがいます」と承俊。

君自故？來、

應知故？事。

來日綺窗前、

寒梅著花未。

（ジュンチーグウシアンライ）

「君は私の故郷から来たのだから、故郷の今を知っているはずだね」。

承俊がゆるりと語りだす。聞きなれた和音の音ではなく、漢詩の穏やかな抑揚が桔華の耳にも心地よい。

（インチーグウシャンシイ）

（ライリイチイチュアンチアン）

転部で声のトーンが上がり、空気の振動を伝わって聞くものの心をざわざわと揺さぶった。「私の家の窓辺の梅」を、どう結ぶのだろう。

（ハンメイ、チュオ、ホア、ウェイ）

包み込むように「ウェイ」を発音して、揺さぶった心に安堵をもたらす。「私の家の窓辺の梅は、もう咲いていただろうか」。ああそうか、彼は美しい故郷を思い出すのに、庭先の梅で十分だったんだ。

「きつとね、作者には故郷に恋人がいて」

ふと、そんなことを承俊が語りだした。才人はまた、ゆるりと杯を口元に運んだ。承俊は体を揺らしながら、ふわふわと言葉をつなげた。

「梅を見るたびに、彼女のことを思い出して、くじけそうになる自分を励ましていたんだ。旅先にも美しい梅の名所などあるけれど、その梅の咲き誇るところを眺めては、故郷にいる彼女の美しい姿を思い出し、でも心のどこかで会えない寂しさを募らせている」

愁眉。承俊には似合わないその陰りに、桔華は胸中のざわめきを覚えている。

『あなたにも、梅を眺めて思い出す人がいるの？』

ここまで出かかっている言葉を、桔華はついに飲み込んだ。代わりに「大陸の梅の花も、綺麗なのでしょうね」と言った。

「わたしは、日本に来て、本当によかったと思っています。この国はとても大きい。そりゃあ、国土の大きさは中国に及ぶべくもないけれど、そういう物質的なものではなくて、もっと、心の寛容さみ

たいなものを感じます。自分と違う何かを拒絶するのではなくて、それを価値観として受け入れる。それが自分の世界を広げることにもつながる。中国も韓国も日本にそれを学んで、きっと追いつく。だからその為に、私たちはもっともっと日本に学ばなければならぬんだ」

隣で、才人の口元が緩んだのが分かった。自分の名前を呼ばれたと、へべれけの女将がこちらに大声を一つよこしたが、「美人だと言ったのです！」と承俊が返してやると、まわりからどっ、と歓声が沸いた。承俊もそれを見て笑った。桔華はその横顔を眩しく見つめている。

「春陽を連れてきてあげたいな」

ふと漏らした承俊の一言が、桔華の心に小さなしこりを残す。

承俊、チュニャンって、才人の妹さんなのよね。その子のこと、大切に思っているのよね。川で溺れてまで、喜ばせてあげたかった大切な人。あなたはあと一年もしたら、祖国に帰ってしまう。そうしたらもう、私のことなんて忘れてしまうのかしら。

「ねえ承俊」

なんでしよう、と応えてくる承俊の無邪気な瞳。ぎゅっと心がつまり、苦しい。この瞳を日本という国が曇らせているような気がしてならない。世界の趨勢に遅れまいとする、国家の意思。自分ではどうしようもない巨大な何かが、自分と彼の間に立ちはだかっているような気がする。そんな不安を、あの日以来、胸に抱いていた。

「あなたの祖国は、どこ？」

承俊は一度、驚いたような顔をして、桔華の顔を見つめた。その後、ゆっくりと表情を緩め、不安を募らせる桔華の胸中を察するかのようにやわらかく微笑み、そして応えた。

「そんなの」

ふわりと花を舞い散らすつむじ風が立った。髪が靡き、桔華は顔の横のほつれ髪を軽く抑えた。

「いうまでもありません」

柔らかな春の風が吹いている。

彼の祖国の名前を、桔華はまだ、知らない。

陸奥湾を抱く街（1）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

陸奥湾を抱く街（1）

急に差し込んだ強い日差しに目が覚めた。

ガラガラガラと雨戸が開けられた。「ああ、起こしてしまいました？ おはようございます！」と、晴子の血色のいい顔があった。

「ああ、だめだめ、いま起こして上げますから」

桔華が起き上がろうとすると、あわてて晴子がそれを制した。晴子は桔華の隣に膝をつくと、桔華の背中に手を添えて、上体を抱え起こした。自覚症状としてはそのくらいは自分で出来ると思うのだけれど、晴子は「油断は禁物。無理をしては駄目よ」と釘を刺した。

「今、朝ごはんをお持ちしますから」

時計を見ると朝七時前。

開け放たれた中庭から、七月の心地よい風が吹き込んできた。

「いるかのお」

と玄関で声がした。年配の女性。桔華が声を掛けようかどうか迷っている、台所から晴子が、「はあい！」とワンテンポ遅い返事をした。どうやら朝刊が来たらしい。

和泉家に届く新聞は『東奥日報』である。

明治十年の北斗新聞に始まって、青森新聞、青森新報、と名称を変え、明治二十一年に『東奥日報』となった。青森の県紙。タブロイド版四頁で、五段に二十字。一面には青森県議會の様子や大陸での戦争の詳報が掲載されている。二面に生活情報、三面と四面は新聞広告と求人、葬儀広告。

東奥日報はこの年、日露の戦役に斉藤武男記者を従軍させている。斉藤は弘前に陸軍第八師団が設置されたときから担当していてその初代師団長立見尚文中将と親交が深く、出征の際もそれに従ってついていった。御年五十四と壮健ではなかったが、本人は「行きたい」と本社にがんとして譲らなかった。実際、彼の戦報は郷土部隊の動静を的確に伝え、新聞発行部数の増大につながっている。この当時の発行部数は四千部。大部分が青森市内で発行されて、川内には陸奥湾を横断して青森から船で運ばれてきた。

川内で新聞を扱っているのは、河野金右衛門という豆腐屋だった。この河野の家は代々大宅で、青森―川内―大湊を就航する定期船の船主などをやっていたから、東奥日報の本社から新聞の配達を依頼されている。朝五時前に青森を出航した船は、下北半島の左端、脇野沢村を経由して川内にいたる。そこで新聞を受け取り、購読者の自宅に新聞を届けた。

晴子の家には、河野金右衛門の妻が東奥日報を持ってくる。名前をたえと言って、えらく晴子をかわいがっている。

「晴ちゃん、来たよ」

どうやらここが配達の最後らしく、たえはそうして店のほうから晴子に声を掛けて、ちゃんとそこで待っている。その声を聞いた晴

子が、包丁を握る手を止めてぱたぱたと店のほうに出て行き、まだ半開きの扉をガラガラと開けた。「おはようございます!」「晴れたねえ」「よかったの!」といつもよりも甲高い晴子の元気な声が聞こえてくる。「今日もあつつくなるよお」「んだの」「いつもごくろうさまです!」という晴子の声で二人は別れたらしい。店の残りの雨戸を開けると、今日の商売が始まる。陳列した反物の上の埃除けの布を払うと、とりどりの鮮やかな布地が陽の光を浴びてきらきらと輝く。

「たえさんに筑前煮を頂いたから、これを朝餉にしましょう」

晴子は桔華に朝刊を手渡すと、そのまま台所に引っ込んだ。桔華は手伝うことを許されていないので、やはり床に入ったまま、東奥日報の一面を眺めている。

筑前煮と白いご飯に、ごぼう汁、そして白菜の漬物という朝食だった。お膳を前にして女二人で向かい合って食べる食事は、なんともくすぐったいような照れくさいような気持ちだったが、当の晴子は「こうして誰かと一緒に朝餉を食べるのも久しぶり」といつて終始にこにこしていた。煮物の蓮根は芯まで火が通っていて、旨い。白菜の甘辛さは白いご飯にとてもよく合った。

晴子は釣鐘の鍋から汁物をお椀にすくい、桔華に差し出した。醤油ベースの出汁に、ごぼうや人参、こおり豆腐などが入っている。湯気のぼっていて、一口すると胃に染込んだ。そういえば昨日も何も食べなかった。噛むたびにごぼうから出汁の味が染み出して、それらを噛み締めながら飲み込んだ。

「そうすると最上桔華さん、あなたはおばあさまの言いつけで、歌の研鑽を積むためにたった一人で日本全国を旅している?」

まだ具材を口の中に頬張っていたので、「そうだ」と首を縦に二回振った。

「そして、仙台で出会った男と恋に落ちて、その男と別れて、子どもを身ごもっていることも知らずにここまで流れてきた、と」

ずずつ、と汁を飲み込んで、気持ちも満足でいっぱいになった。

晴子が「お代わりありますよ」と言ったので、桔華はお椀を差し出した。二杯目をもやはり美味そうな湯気が上がっていた。

「ご迷惑をおかけします」

「それは気にしないでいいのよ。今は私一人だし。かえって世話を焼く人が居てくれたほうが私も楽しいわ」

晴子の旦那は和泉和葉という。

旧斗南藩士の次男坊で田名部に住んでいたが、晴子との結婚を機に川内に移り住んだ。

「今はね、戦争に行っているんですよ」

日露戦争である。今年二月、ロシアに宣戦布告した。

村でも何人かの男が徴発された。和葉は自ら志願して、青森の歩兵第五連隊に所属した。

「志願、ですか」

「ええ、お国の一大事に、自分だけ何もしないわけにはいかないからって。弘前の第8師団は、後備に配されて辞命を待っているそうだから、今はまだ戦場には出ていないそうよ。前線で戦ってくれている兵隊さんには申し訳ないけれど、このまま何事もなく、帰って来てくれればいいなと思うのだけれど」

晴子は自分の夫の戦場での様子を、新聞で見聞しているといった。実際、そのような理由で新聞を購読し始めた家が多くあると晴子はたえに聞いたという。桔華もちらりと承俊のことを思い出した。四月、まだ仙台にいた頃、留学生たちが意気を上げていたことを思い出す。『日本がロシアとの初戦に勝った！アジアの小国が欧米の大国を破った！』街道にばら撒かれる号外。国威高揚に熱狂する人々の明るい顔――。

「ごめんなさいね。銃後を守る務めの私が、こんなことを言っではいけないわね」

晴子が俯いた。そんなことはない、と桔華は言った。

「大切な人が無事に戻ってきて欲しいと願うのは自然なことです。大丈夫。日本は今、快進撃を続けているそうよ。私たちも頑張りますよ」

気休めでしかない、と桔華は思ったが、晴子はにっこりと笑ってくれた。本当は心配でたまらないのだ。その笑顔が桔華には辛かった。二人して手を合わせて「ごちそうさまでした」と言う。晴子がやはりにこにこしながら「ほんだの。私もがんばらねばの！」といいながら勢いよく腕まくりをして、二人分のお膳を下げた。

それから一週間ほど、桔華は床の中で過ごした。

起きるのは三度の飯時と風呂の時のみ。晴子がほぼ付きっ切りで桔華の世話を焼いた。

川内に唯一のひとという佐々木という医者に来て、「様態は落ち

着いたようだ」と言った。桔華が頭を下げるより早く、晴子が「ありがとうございます、ああ、よかった、本当に」と佐々木医師の手を取ってぶんぶんと振った。

晴子のこういう、人を拒まない雰囲気、町の人々の好感につながっているようだった。

実際、晴子の店には、絶えず人が足を運んだ。反物を買いに来るといふよりは、晴子と世間話をしに来る。

「晴子さん、昨日な、旦那が裏の八幡宮で酔っ払ってな、石段に頭をぶつけて血まみれになって帰ってきたの」

昨日見た変の形の雲のことでも、夫婦間の小さな諍いも、晴子に聞いてもらいたいと町のひとは思うのである。陳列棚の奥の、上がり場に腰掛けて、晴子もちつとも嫌な顔をせずに、「あらあ、まあまあ」と何度も深々と頷いている。

日が傾き、横日が差し込んでくる。

晴子の店は街道に面しているので、役場帰りの勤め人や、大工、畑帰りの男たちの、俯き加減の背中が往来する。

街の中心から内陸に向かう街道があって、巨大な銀杏の木を境に西向かうと、安倍城というところがあって、炭鉱がある。

この炭鉱は、江戸末期に発掘されて以来、尽きることなく炭を供給し続けている。夏も気温が上がらず、土地のやせた下北半島の西通り地区は農作に適さず、古来より狩猟と漁業とそれらを船の往来によって交易することで地域の経済を保ってきた。しかしこの炭鉱が発見されてから、石炭が主要な川内の産業になった。近隣の集落などから、三百人ほどが働きに来ている。

彼らの中にも、檜山や蠣崎から通っている連中が居て、十人くら

いの団体でがやがよと歩いてくる。煤だらけの顔に体格のいい偉丈夫が揃い踏んでいるので、その時刻の名物のようになっていた。

その偉丈夫の中に、体が一つ小さな、少年のような男が居る。

菊池兵衛という。年は三十になる。年齢よりもずっと幼い顔に肌は赤焼けていて、煤に塗れて顔はいつも黒く、ぼろぼろの股引を履いている。出身は畑という山奥だが、二十歳のときに海沿いの宿野部という地区の女と結婚して移り住んだ。子供も、居る。

「いるかの」

「はい」

兵衛はいつも、炭鉱作業の帰り道に、偉丈夫の一団から離れて、晴子の店に立ち寄る。

晴子もそれを分かって、濡らした手ぬぐいを用意している。「いるかの」とのんびりした声が聞こえると、「はい」と手ぬぐいを片手に店先へぱたぱたと掛けていく。

桔華は無粋と承知しつつ、この二人の会話に耳を敬っている。

「新聞見たかの」

「見ましたよ。川代さんとこのおじいさん、亡くなったって。通夜さいがねぼの」

「行ぐんだば、寄るして」

「したばって、その日牛滝に仕入れに行がねばならなくて。香典お願いするかの」

近隣住民の動静が大半である。

それにしても毎日である。炭鉱は日曜日が休みだから、午前で終わる土曜日にも、帰り際に晴子に顔を見せている。

とうとう、桔華は晴子に聞いてみた。

「あらいやだ、そんなんじゃないやありませんよ」

あの人懐こい笑顔で桔華に手を振りながら、晴子は言った。兵衛は和葉の友人で、彼の出征以降、自分を気に掛けてくれているのだ、と。

「そんなに落ち込んでいるかしらね、私」

あの人が目がそう言っているのよ、と晴子は俯いた。力無くうな垂れた彼女の首筋の健康そうな肌色が覗く。桔華は晴子の気持ちに よりそうようにその手を取り、「無理しないで」と言った。晴子はやはり例の力ない笑顔で、「ありがとう」と言った。桔華はそれ以上何も言わなかった。

陸奥湾を抱く街（2）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

陸奥湾を抱く街（2）

八月上旬。和泉家の裏山ではセミがじわじわと鳴いている。

時折、開け放した店の玄関から吹き込む風が風鈴を揺らす。体を起こすことを許された桔華は、晴子とともに店番をするようになった。

桔華さんが店にいてくれて助かるわあ、これで家中の大掃除が出来るわね、と晴子は奥でばたと作業をしている。桔華は、最上の家では掃除洗濯炊事をこなしていたため、得意分野なのであるが、血の疼くままに晴子に手伝いを願い出ると、「お店番、しっかりとお願いしますよ！」と笑顔で断られる。そういうことをもう一カ月も繰り返したので、座敷の奥からどたと聞こえる物音に少し気をやりつつ、桔華は店の上がり場に腰掛けて、ばたばたと団扇で扇いでいる。

上がり場に雑記帳を広げて、壁に背を預ける。打ち水、夏袴、うみねこ、海岸沿いの干し烏賊と、思いつく詞をつらつらと雑記帳に書き連ねた。店の影は外の日向とくつきりと明暗を分けており、道行く往来の人々の額に汗が滲んでいる。りりんと風鈴が鳴り、ぱらぱらと雑記帳の新しいページがめくられた。桔華は物憂げに外に顔を向けている。

「桔華さん、少し休憩しましょう」

晴子が剥いた桃を盆に乗せてきた。暑さと気だるさで食欲のない

桔華には、とても魅力的な白さと冷たさ、そしてやわらかさだった。

桃は、晴子の実家から送られてきたものだという。実家は三戸の名川の農家だと晴子は言った。

「ここは浜所ハマドコロでからっとしてるんだけど、京都の夏はきつともっと暑いでしょうね」

晴子も店の上がり場に腰掛けて桃をひとかけら、口に入れた。桔華は笑って頷いた。行く人がこちらに気がついて会釈し、通り過ぎた。晴子は大きく首を振って応え、桔華もそれに倣って頭を下げた。

「ああそうだ。私、明後日から二日ほど家を空けるんですよ。脇野沢に仕入れさ行かねばならなくて。お食事などは河野のたえさんをお願いしていきますから、お店番だけお願いしてもいいかしら」

「ええ、構いません。泊りがけなんですね」

「行くだけで半日掛かりますからね。あと、主人のご両親にもごあいさつしてこなければ」

晴子は感情を上下させることもなくそう言い、また一つ桃を口に運んだ。江戸時代でいう西廻りの航路は、京都から陸路、小浜に至り、輪島、佐渡、秋田、鰺ヶ沢、青森から脇野沢に寄港する。青森から太平洋を南下する東廻り航路が出る。瓦解を経て、明治の代に至っては、その航路を三井や三菱、そして北条の商船が引き継いでいた。

「北条？」

「ええ、そうです。大阪の間屋なんだけど、社長さんが京都の方だとかで、上方の方の品物が欲しいときはそちらにお願いするの。京

都の職人さんは、一見さんに品物を卸したりしないところも多いから、『北条』の顔の広さには本当に助かっているのよ」

古月のあの人懐こい顔を見るような思いがした。そういえば、篠の出産は七月だと言っていた。四月に仙台を出て以来、心身ともにばたばたしてしまい、顔を出すどころか、文も出せずにいる。

桔華は、自分の腹をさすった。まだ腹は膨らんできておらず、体がだるいと言う自覚症状以外は母親になると言う実感もない。旦那になる人間が近くにいて、こどもを授かったことをともに喜び合えば面持ちは違うのだろうかとちょっと考えてみたりしたけれど、いろいろ理由を考えあぐねなければ人一人を産むのだという自覚をもつこともままならない自分の母親としての甲斐性の無さに、ため息が出た。

こんな自分を、母親と呼べるのだろうか。

「こんな自分が、母親になるのかしらと考えていらっしやる？」

晴子は桔華の顔を覗きこんだ。桔華は言い当てられてどきまぎし、その顔色を見た晴子が「心配よねえ」と続けた。

「誰だって初めは不安なものよ。でも時がたつと、おなかの子供が語りかけてきてくれるの。『はじめましてお母さん。ぼくもこどもがはじめて不安です。だから一緒に頑張ろうね』って。それが聞こえた瞬間にね、ああそうよね、お互い初めてなのよね、でも私のほうが人間としては経験があるのだから、しっかり守ってあげなくちゃって自然に思えてくるの。母親としての自覚なんて、そんなだいたいそれたものではなくて、子を愛おしいと思う気持ち、自然とあなたを母親にしてくれるものよ」

だから心配しないで、と晴子は言った。晴子は辛巳の生まれなので桔華より三つ年下であるが、その語り口も物腰も、桔華のそれよりもずっと含蓄のあるもののように思えるのだ。一ヵ月ともに過ごしてきたが、晴子に子どもがいるという話を聞いたことが無い。母体に無理をかけまいと桔華を気遣う様子は、実家で見聞したものなのだろうと思っていたが、やはり核心を晴子に聞けないままにいる。

ごめんください、と尋ねてきたのは、三十歳をすぎたあたりの書生風の男だった。暑かったと見え、顎から首筋にかけて汗をかいており、開襟シャツの胸元がびっしりと濡れている。黒いスラックス、裸足に草履。首元をハンカチで拭うような素振りをし、晴子を見て頭を下げた。

「東奥日報の加藤といいます。最上桔華さんはご在宅でしょうか」
「最上は私ですが」

桔華が名乗り出る。晴子が先立ち、男から名刺を貰った。「あらまあ青森から。わざわざご苦労様です」と言って、男を奥の座敷に通す。桔華もそれに従った。晴子は麦茶を用意するといって台所に立ち、加藤を上座に座らせ、桔華は向かい合って下座に膝を折る。加藤は桔華にも名刺を渡す。『東奥日報社 新聞記者 加藤 国和』。

「実は、文芸欄を新設することになりました」

その選者を探しているのだと言う。新聞代の集金に河野宅を訪ねたところ、桔華の話を聞いた。それでこちらまで足を伸ばしたとのこと。

東奥日報は青森県内各地に配達されている。明治末期、遅くても

その日の午後までには当日の朝刊が配達されるよう手配されている。新聞の集金は各地の、本社から依頼されたものが行い、その委託先に、本社の社員がまとめて集金に出向く。

晴子が麦茶と羊羹を運んできた。「いやはや、ありがとうございます」
「とって加藤は麦茶に口をつけた。喉を鳴らすようにひと息で飲み干した。この炎天下を歩いてきたということだから、よほど水分が欲しかったのだろう。」

「正岡子規や石川啄木の流行もあって、昨今は短歌・俳句の創作人口が増えつつあります。当社でも、青森懸の文化水準向上の一翼を担うべく、文芸欄を新設することとなりました。学問とは本来、男のするものというような風潮もありましたが、今は国民が平等に文字を読み書きできることが求められる時代。しかしそうとはいっても、青森の農村部では、家の手伝いなどで学校に通えないものも少なくない。そういうものたちにも気軽に親しんでもらえるよう、選者は、やわらかな語り口のできる女性にお願いしたいと考えていたのです。最上先生、いかがですか」

「先生なんてとんでもない、私はまだ修行中の身でして」

「日本は、遠く平安の御世から女性が文学の先端を担ってきています。紫式部、和泉式部、もっと源泉をたどれば、古事記の語り口は稗田阿礼という女性だったという。最近でも与謝野晶子がなんとも艶かしい歌集を発表して話題となりました。あとは北条桜花」

晴子がこちらに目配せをしている。桔華は軽く咳払いをして加藤に向き直った。

「今、故あってこちらを仮の宿とさせていただいておりますが、いつまでこちらにいられるかわかりません。それでもよろしければ」
「もちろん構いません、それでは引き受けていただけるのですね」

いやよかった。青森に縁のある女流歌人というのはなかなか見つか
からなかったんですよ。加藤はほんと胸を撫で下ろしたようで、先
ほどまで緊張気味だった顔を綻ばせた。では、いただきますといっ
て羊羹を一口で口の中に押し込むと、まだ飲み込むより前に携えた
バッグから茶色い封筒を取り出して、桔華の前に出した。九月の上
旬に取りに来るので、それまでに天地人評価で五首ほど選び、それ
に評を添えて欲しいと告げると、それでは船の時間がありますので、
といってあわただしく去っていった。直ぐに立ち上がれない桔華に
代わり、晴子が玄関までお見送りをした。

「もちろん、無理をしてはいけませんよ」

戻ってきた晴子が桔華に釘を刺した。桔華は苦笑して頷いた。茶
封筒の中から、読者からの力作を取り出す。しばらく人の作品に触
れていなかったが、瑞々しい感性に自分の創作意欲が刺激され、歌
を詠みたい思いが込み上げてきた。

晴子が奥からどっさりと雑誌を持ってきた。彼女の腕に一抱えも
あるようなその分量は、「ホトトギス」「白樺」「明星」に「のは
ら」。その中には「一握の砂」「みだれ髪」などの歌集も混じって
いる。

「主人のもですが、参考になるかしら」

これだけの雑誌を目にするのは桔華も久しぶりだった。仙台の下
宿を出て以来、北上してくるにしたがって、貸本屋にも最新の雑誌
が無いことがほとんどだった。

「ご主人は、歌をお詠みになるのですか？」

「歌というよりも、学問が好きなのです。新聞も、主人が読んでい
たもののなのよ。なんでも知りたがりなの」

こうして、大量の雑誌と、選歌の仕事を桔華に残し、翌々日、晴子は供とともに仕入れに出かけていった。

桔華は店を開き、陳列物の埃を払うと、いつものように上がり場に腰掛け、たまに往来に目をやりつつ、雑誌と応募の句作を行ったり来たりしている。

陸奥湾を抱く街（3）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

陸奥湾を抱く街（3）

晴子のいない家の中はやけに広く、静寂が落ちている。

往来に目をやるも、心なしか人通りも少ないような気がする。照りつける太陽の強い日差しが行く人の額に汗を浮かばせている。

午前中はまず、よそ行きの単を頼まれていたお得意様が品物を引き取りに来了。彼女は上質な悠然に見事な錦仕立ての帯を締めて、鬘を仕立ててビロードの髪飾りを挿しており、凜と立ち振る舞うその姿に、町内の名士の奥方かしらと桔華は思った。

桔華は奥の座敷に奥方を上げた。仕立てた着物の袖口や裾の調子を見て欲しいと、晴子に言われていた。桔華が店側の引き戸を閉めて、彼女の着物を脱がせ、仕立てあがった新しい伽羅の着物に袖を通させた。肩口をそろえ、鏡台の前に立たせて袖を確かめた。親指の付け根のあたり。丁度いい。

続いて帯を締めずにおはしよりをつくり、裾を確認する。こちらにも問題ない。縫い口も見えぬように布地の裏側に細かく糸を取られている。桔華も自分の着物は自分で縫うが、ここまできれいに縫いこむことは出来ない。

「さすが晴子さんね、いい仕事をしてくれはる」

語尾の微妙なアクセントに桔華は気が付いた。聞くと、やはり彼女は地元の名士の奥方で、二十年前に舞鶴の商家から川内に嫁いできたのだという。晴子が川内に来たのは八年前。織物屋を始めた晴

子に、彼女が着物の修理を頼んだのが縁で、世話になるようになったのだそうだ。

「これ、晴子さんが仕立てたんですか？」

「あら、聞いていなかったの？ここは布地を売るだけではなくて、仕立てもしてくれるのよ」

驚いた。そういえば晴子は気が付けば裁縫などしていることがあったが、桔華の目の付くところではめったに仕事をしているところを見せないし、自分の仕事部屋に、桔華を近づけさせない。今朝方、頼まれごとの確認をするときでさえ、必要な最低限以外のことは話さず、一人で店番をすることがはじめての桔華に、分かりやすく仕事の手順などを手ほどいた。

奥方は満足した様子で試着を終え、桔華に頭を下げて帰宅の途に着いた。桔華も店先までお見送りをする。あれこれと思い巡らせる間も無く、今度は買い物帰りの近所のお母さんにつかまった。

「晴子ちゃん脇野沢さ行ったのえ！仕入れだの」

ええそうなんですよ、と桔華が応えると、母さんは日に焼けた顔にいったいの笑顔をつくって「大変だのこのあつっこい！」といてって大声で笑った。

「はあら、せえば川代さんのママあの葬式さあ行がねどこしてるんだ」

桔華は『川代』と『葬式』をようやく聞き取って、晴子が新聞の葬儀広告を切り取っていたのを思い出し、あれのことかと思いついた。

「知ってる人に、香典を預けると言っていましたよ！」

「んだのお。いっつもだば、脇野沢の仕入れさば、和葉さんが行ってるんだども、今だば兵隊さいつてらんだして、仕方ないべの」

意識をしているつもりは無いが、自然と話し声が大きくなる。桔華は母さんを「中にどうぞ」と勧めたが、「畑さ行くして！」と笑顔で断られた。母さんは「あんだこの人だの」と桔華に言い、「京都の三条です」と桔華が応えようと、「わらあは！」と言って大げさに驚き、失礼しました、と急に言葉の端を正して、やはり笑い、そして去っていった。

そうこうしているうちに、昼になった。昼ドンが鳴るよりも早く、河野たえが「いるかのお」と尋ねてきて、自宅で作ったらしいごぼうの炒め物と汁物を台所で温め始めた。手伝いたいと桔華が言えば、晴ちゃんに桔華のことを頼まれているから、とやんわりと断られた。

昼食は白米と豆腐の味噌汁、ごぼうとにんじんの炒め物ときゅうりの和え物だった。味噌汁は晴子の作るそれよりも、三倍近くも大きい豆腐がごろりと入っているものだった。

据え膳の前で手を合わせ、たえと二人でいただきますをする。はじめに口をつけた味噌汁が旨かった。にぼしのだしが効いており、味にメリハリがある。京都の薄口に慣れている桔華は、自分はこっちの赤味噌のほうが好みだな、とこちらに来てから気が付いた。

「おいしいです」

「本当？ありがとうございます」

たえは相変わらずにこにこしながら箸を動かしている。味噌汁の豆腐が大きいのは、たえの家が豆腐屋だからだろうか、と桔華は考えている。

「ああそうだたえさん、東奥日報から公募短歌の選者のお話を頂きました。おかげさまでお受けすることにしました。ご紹介いただきありがとうございます」

「あら、加藤さんもういらっしゃったの！よかったわねえ、本社のほうでも頼みにしていた中央の郷土人に断られたとかで、社告の期日まで時間が無いと泡を食っていたそうよ。桔華さんがいてくださってよかったわあ。顔なじみの方が紙面に名前が載るなんて、毎朝の楽しみも増えますね」

「私の祖母も、地元紙に歌が掲載されたところから始まっているんです。まさかこのようなご縁をいただけるとは思っておりませんでした」

「晴ちゃんがあなたを拾ってくれたからね、感謝しなくちゃ」

本当にそう思う。社の前で力尽きたあの日に、晴子が自分を見つけてくれなければ、もしかしたらそのままあそこで果てていたかもしれない。

「晴子さんて、子どもさんはいらっしゃるのですか」

ふと、たえの箸を動かす手が止まった。やはり触れてはいけなところなのだろうか。

「どうして？」

「見たところこの家に子どもさんはいないようなのですが、言葉の含蓄と言うか、私を気遣ってくださる行動の端々に、ご自信の経験を踏まえてらっしゃるのかなと思うところがあって」

たえは無言のまま食べ終わった食器を片付け始めた。桔華も急いでご飯を口に運び、自分の食器を下げようとしたが、台所から戻っ

てきたたえに「あなたはだめ、今お茶を持ってくるして」と、先ほ
どよりも強い口調で止められた。たえは食器を片付け、お茶を用意
して桔華の前に差し出すと、もう一度桔華の対面に座った。

「晴ちゃん、何も言っていないのね」

「私も、聞いてはいけないのかしらと思って、ずっと聞けずにいた
もので」

たえはずつ、と湯のみを口に運んだ。外からはじわじわと蟬の鳴
き声が聞こえている。

晴子は、三戸郡名川の農家に生まれた。

旧姓は梅内^{うめない}。十二人いる兄弟の、下から三番目だ。

名川は農家が多く、その中でも晴子の家は名川の大地主の家であ
ったが、ご一新以降は地租改正による税も重く、小作人からの納
税をできるだけ少なくしようと尽力しても、懸への納めものに苦勞
している。梅内の家には子どもが十二人も居り、上の子は分家して
家を出たり、女の子は中央へ奉公へ出したりしていたから、梅内の
家には長男と三男が農業を手伝い、晴子、あとは末の妹が二人、い
るばかりだった。

明治二十八年、近年の不作に畳み掛けるように大冷害が発生する。
太平洋から下北半島から八戸、久慈、宮古といった、太平洋に面す
る都市を掠るように吹きつける夏の冷風「やませ」がおこり、大飢
饉となった。青森だけでも数百という人が餓死した。梅内の家も、
蓄えた米や乾物を地元に開放したが、昨年からの清国との戦争のた
めに国からの取り立ても容赦なく、ただ人が優しいだけが取り柄の
晴子の父親は、梅内家の存続にかかわるところまで蓄財を身落ちさ

せてしまった。話し合いの結果、大部分の土地を売り払って借財を返し、家督を長男に譲渡。三男を出嫁ぎに、末の女の子二人も青森と八戸に奉公へ出し、晴子は父親の知り合いの息子と結婚し、家を出されることになった。晴子の父親が若い頃に奉公に出ていた田名部の元会津藩士の息子、それが和泉和葉だった。

会津和泉家は身分は御家人だが三十俵二人扶持程度で、会津の松平容大とともに斗南に転封されてからも、地元の子らに学問を教えながら貧しい生計を立てていた。和葉は十歳になるときに、田名部からさらに遠く、脇野沢村の千船という郷土の家に養子に出された。晴子の父親が若い頃に学びに来ていたのがこの和葉の父親の塾であった。それが縁で二人は結婚し、和葉とともに脇野沢の千船での生活が始まった。晴子が十五歳、和葉は二十二歳だった。

千船の家は脇野沢でも有数の名士で、川沿いには大きな自分の蔵を持っていたし、自分の船を持っていて、それを漁師に貸して富を築いていた。上方との交易にも携わっていて、元禄以来、村の出荷物を一手に引き受けて、かかる関税を収入にしたりしていた。現在の千船の当主夫婦には子どもが無く、養子の和葉が跡取りとして期待をされた。そこに晴子が嫁入りしてきた。翌年、晴子は第一子を生籠った。和葉をはじめ、千船の両親は大層喜んだ。しかし臨月を待たずして、晴子は子どもを流産してしまった。

「本当に仲のいいご夫婦なのよ。和葉さんがね、本当に晴ちゃんを大切にしているの。一人目がだめだったときにも、晴ちゃんが本当に落ち込んでしまって、会話も難しくなってしまったことがあったのね。和葉さんは、自分も漁師の仕事があるのに、家に帰れば、布団から起き上がれない晴ちゃんに寄り添って、大丈夫、大丈夫って声を掛けてあげていたのよ」

しかし、千船の両親は晴子に辛く当たった。

子どもを産めないばかりか、病気で床に臥せり、家の手伝いもできない嫁が来たと、近所に吹聴して回るようになった。晴子はまだ万全でない身体を無理に起こして家事の手伝いなどをし、両親のために懸命に尽くそうとした。ようやく身辺が落ち着いてきた頃、晴子は二人目を妊娠した。今度こそはと意気込む周囲の期待に反して、晴子は二人目の子どもも流してしまった。

「無理をしたのね。追い詰められた晴子ちゃんは、海に身を投げようとした。間一髪、和葉さんが引き止めたのだけど、千船の家では、晴子ちゃんを離縁するという話になったわ」

しかし、和葉はそれを許さなかった。自分は、一生を晴子とともに生きると決めて夫婦になった。彼女を家から出すのであれば、自分もこの千船を出て行く。

千船の両親と和葉はさんざん揉めた挙句、和葉は晴子を連れて千船の家を出ることになった。晴子は、世話になった両親を見捨てることはできないからと随分和葉を引き止めたが、和葉の心は揺るがなかった。明治二十九年、二人は脇野沢を出て、川内に移り住んだ。上方貿易の関係で幼い頃から和葉を見知っていた河野金衛門が住むところを世話し、資金を与えて、各地の布地を扱う織物屋を始めさせた。

「あれはね」と言って、神棚に並ぶ二つのこけしをたえは指示した。それは桔華がこの家に来たときから気になっていた、まあいい頭部に赤と黒の墨で顔を描かれた、こけしだった。

「二人が川内に移ってきて、このお店を始める前に、ゆっくり二人で旅にでも出て、温泉にでもいってらっしゃいって言って、そのと

きにおみやげで買って来たもののよ。津軽の大鰐温泉で買ってき
たものなのだから、古くは口減らしで殺した子どもを供養するた
めのよりしろなんですって。その帰りに、田名部の恐山に巡礼して、
イタコに口寄せをしてもらったら、生まれてくるはずだったのは男
の子と女の子だと言われたそうよ。それ以来晴子ちゃんはあるのこけ
しを自分の子どものように大事にしていって、毎朝手ぬぐいで拭いて
あげて、ご飯をとりかえてあげているの」

笑顔を絶やさないう晴子の健気で華奢な身体が桔華の中で揺らめい
ている。弱い自分を勇気付け、励ましてくれる晴子の半生を、いた
わしいなどと思う資格など桔華にはない。彼女はおそらくそれすら
も不幸と思わずに、その苦勞を誰のせいにすることも無く、何を恨
むのでなく、そのときに自分のできることを精一杯やろうとしてき
たのだろう。

「じゃあ、脇野沢のご両親にあいさつをしてくるというのは」
「はあら！そったご言っただの！」

たえは大きくため息をついた。自分が知っていたら止めていたの
に、とこぼした。

「脇野沢に商船が就航するときは、いつも和葉さんが仕入れに行っ
ていたんですよ。もちろん、脇野沢の村ではよく思われていませ
んから、お仕事で行くだけ。もう千船の家ともほとんど関わりは無い
はずですよ。でも晴ちゃんのことだから、向こうの両親とも上手く
やっていきたいと思っているのでしょね。わたしらに言えば反対
されることが分かっているから、何も言わずに行っただのね」

昨日、晴子と話をしているときにも、脇野沢の両親について、何
か感情を異にするということも無かった。本当に自然に、千船の両

親とも和解したいという思いでいるのだろう。胸が締め付けられるような思いがする。

たえはそろそろ午後の仕込が始まるから、と言って出て行つた。その背中を見送りながら桔華は思う。自分は、晴子と一ヵ月も一緒にいながら、彼女のことを何も知らないのだと。晴子はおそらく、桔華と桔華の腹の中にいる子どもを、桔華が思う以上に大切に思っているのだろう。自分が出来なかったことだからこそ、桔華には成し得てもらいたい、その為の手助けがしたい。今ならその気持ち、辛いほどに分かる気がする。

しかし同時に、桔華の胸中には疼くものがあり、それを払拭できずにいる。自分はこれからも歌道が続けるつもりだ。子連れで旅を続けられるのか。父無し子として生まれてくるこの子は幸せなのか。自分は母親として、この子を立派に育てることが出来るのか。子どもを待ち望んだはずの晴子ではなく、なぜ自分なのか――。

悶々と思考を巡らしながら、公募の歌を眺めている。午後は数人と挨拶程度の会話を交わした以外はお客も来なかった。上がり場に腰掛け、肩肘について歌を眺めつつ、ぼんやりと晴子のことを考えている。なんとなく注意散漫で、今日はもうやめようと上がり場に広げてある応募作と雑誌を片付け始めた。ふとした一句が目に残る。

阿子を抱き やはらかき肌 伝わりし 生きる鼓動の 音ぞ逞し

まだ若い母親の作だろうか。あたたかく柔らかで、儚い姿をした幼い我が子を抱くと、自分となんら変わらない命の鼓動を感じたのだ。ああこの子も、必死で生きようとしているのだ、そう作者は感

じたのだろう。その短歌に目を奪われながらも、無意識に腹に手を当てる。まだ何も感じない。しかし、この中で命は確実に息づいているのだ。桔華の迷いとは裏腹に、自分の中の小さな命は、必死で生きようとしているのかもしれない。

桔華の中に、この小さな奇跡をいとおしむ気持ちが生まれたことに気がつく。大切な人と、自分の子ども。自分の中の、もう一人の自分。それを守ってやれるのは自分だけなのだという使命感。幸福感。ゆるゆると打ち寄せる波が次第に大きくなり、これほどまでに大切なものがかつてあっただろうかというところにまで達する。しかしそれは一瞬で、同時に喪失に対する恐怖が助長する。生まれてこなかったらどうしよう。自分のせいでこの子を死なせてしまったら、どうしよう――。

「ごめんくださあい」

桔華ははっと我に返った。ほんのわずかな時間であったと思うが、大きな浮遊感と強烈な絶望感に感情が押し乱れ、気がつくと思息をしていた。ようやく意識を現実に戻して、桔華は声の主に向かって「はあい」と返事をした。

陸奥湾を抱く街（4）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

陸奥湾を抱く街（4）

声の主は菊池兵衛だった。

もうそんな時間かと桔華は時計を振り返り、下駄をつっかけて表に出ると、日焼けた顔が炭鉱の炭で真っ黒になった、あどけない顔が一つ、そこにあった。

「おかえりなさいまし、いま晴子さんからの頼まれものをお持ちしますから、どうぞ中へ」

兵衛は愛想いい顔で頭を下げると、背中の荷物を降ろし、店の中に入った。

桔華は冷たい麦茶と、晴子がいともそうするように水で濡らした手ぬぐいを持って、上がり場に腰掛けている兵衛の隣に座った。桔華が手ぬぐいを渡すと兵衛は照れくさそうにはにかみながら、礼を言い、顔と首、それから手と足の裏などを拭いた。よく日焼けした肌だったが、華奢な体つきである。晴子に妻子持ちといわれなければ、少年と見間違ふほど、歳を取らない顔をしていた。

「これ、晴子さんから川代のおじいさんのところのお香典です」

兵衛は「確かに受け取りました」と言っ、桔華から香典を受け取った。水引の下には「和泉 和葉」と流麗な文字。晴子の手によるものだ。

「先方にくれぐれもよろしくと申しておりました」

「ご丁寧にありがとうございます。川代のじいさまには、オラも和葉も、ずっぱど叱られたものでした」

脇野沢村のの小沢という地区に住んでいた兵衛は、幼い頃から身体が弱く、よく近所の子どもらに苛められていた。和葉は、脇野沢の尋常小学校に田名部から転校してきたばかりで友達も居らず、学級のなかでも身なりも小奇麗で本ばかり読んでいるような優等生。なかなか友達も出来なかった。

ある日、兵衛が浜で子どもら五、六人に囲まれ、木の棒で殴るだの蹴るだのされていると、そこに和葉が通りかかった。相変わらず本など読みながら歩いているので、兵衛らの取り巻きに気が付かなかったのか、その中の一人にぶつかってしまった。大将格は激怒した。和葉をやっちなえ、ということになった。

「本を置いてくる。待っていてくれ」

といって和葉は本当に本を置いてきた。本人はさあやれと声を上げるのだが、悪ガキ連中はどうにも納得がいけないというような顔で、それぞれ悪態をつきながら帰っていった。残された兵衛は何がなにやらわからないままぼかんとしていたし、和葉は「なんだ、やらないのか」とこちらも納得がいけないような有様であった。

お互いにはぐれものという共通項があったからだろうか、その日を境に二人で行動することが多くなった。和葉は田名部から来た『都会もの』であり、その読書量もあってものをよく知っていたが、なんでも自分の目で確かめないと気がすまない性分のもようだった。あるとき、近所でおっかないと評判の川代のオヤジが、どれだけおっかないのか確かめに行こうということになった。川代のオヤジは、その父親も祖父も漁師で、本人も十三歳になる頃から海に出て漁を手伝うようになった。そのころは一つの漁協を仕切るようになっていたから、歳の頃は五十を少し出たくらい、脂の乗り切った男盛りだった。三十年以上の長きにわたって陸奥湾に晒した肌は頭皮か

ら足の裏まで赤黒く日焼けており、愛飲した煙草のやにが白い歯に黄色くこびりついていた。

悪ガキ連中が、陸に干されているオヤジの舟を遊び場にしていたらしく、天地が割れんばかりの怒号で叱りつけられ、丁寧になれに大きな拳骨もいただいていた。それ以来、脇野沢の子どもたちの間では川代のオヤジはおっかないということで知れ広がった。子どもたちが喧嘩すると「したら、川代のオヤジさ言いつけろど！」という具合に。

怖いものとは知りながらも、怖いものを知らない和葉はどんどんとオヤジのいる小浜の浜辺へ向かう。兵衛は何度も、「やめようよ」と止めるのだけれど、和葉は「ならばおれ一人で行く」「オヤジがどんなものか確かめたら、お前にも知らせてやるから」と言って聞かない。和葉は言い出したならそれを曲げることも止めることもしない。転ぼうが邪魔が入ろうが真直ぐに突き進んで行って、後はなるようにしかならないのだ、と子どもながらにそう言っただけのけるようなところがあった。

浜辺には漁船や商船が船着場として利用している河口があつて、そこは大人の介添え無しで子どもだけでは近づいてはならないという事になっている。しかし、そこを通り抜けて船着場でオヤジが漁から帰ってくるのを待っていないと、今度はいつオヤジを捕まえられるか分からない。

「和葉ちゃん、ここは危ないよ、オヤジの家の近くで待ってようよ」

「いやだめだ。ここで捕まえないと、オヤジはいつも大人たちに囲まれていて話しかける機会が無くなってしまう」

すっかりその気の和葉に、取り付くしまも無い。兵衛はおっかないのと心細いので何度も心が折れそうになりながら、ただひたすら

に海を見据え、オヤジの舟の帰りをまつ、和葉の強い瞳をじっと見入っていた。

朝早くから栈橋で座り続けて半日もたったころ、オヤジの舟が帰ってきた。

和葉と兵衛は立ち上がった。船員たちが上陸の準備を始めている。オヤジは彼らに檣を飛ばしながら、栈橋の子ども二人に気が付いた。兵衛はオヤジの視線に気が付いた。しかしオヤジは視線を2人から外し、舟の作業に戻った。

やがてオヤジたちの舟は栈橋につけられ、今日の漁獲とともに男たちが舟を降り始めた。男たちは和葉と兵衛とすれ違いざまに「お迎えかい」 「滑るどう、気いつけよう」と声を掛けてくれた。和葉はそれに一顧だにせずにオヤジの行動から目を離さない。

男たちが陸に上がっても、オヤジは舟の中で作業をしていた。一人になったのを確認して、和葉と兵衛は船に近づく。兵衛が和葉の服をひっぱって、やっぱりやめようというのだけど、和葉はやはりそんなことはお構い無しに「川代のオヤジい！」と舟に向かって叫んだ。

オヤジは和葉の声を聞いてか聞かずか、船内での作業を一通り終えてからのっそりと栈橋に上がってきた。太陽を背に背負って大柄の身体をゆっさりと動かすその様は、兵衛がマタギの祖父から聞いた、森の主ともいう巨大なヒグマのようにも見えた。

「おめど、なあしてこったどこにいるんず」

「オヤジさ会いにきたして」

「この栈橋さばわらすだけで近づけばなんねって言われながったがして」

オヤジの細い目がぎらりとこちらを向いた。兵衛はいいようのない恐ろしさに駆られたが、和葉が何も言わずにオヤジを見上げていたので、彼にしがみついて辛うじてその場に踏みとどまった。

「聞こえながったが！こごさばわらすだけで来ればなんね！足場悪いして滑って海さおじれば、こごだば深度があるして、自分どだけだば上がれねのよ！わがんねえが！」

兵衛は縮み上がってしまった。オヤジの前に飛び出し、「すいませんもうしません」と三回もお辞儀をして、和葉を引っつかんで走り出した。気が付くと栈橋から遠く離れて、学校の近くまで来ていた。ようやく立ち止まって、二人で肩で息をした。

「今でも、あの時のじいさまの声を思い出すだけで、おっかなくて縮こまってしまいそうになるんですよ。でもこのときに和葉が言ったことが忘れられない。こいつは大物になるんだろうなって思ったのす」

——オヤジは間違ったこと、言ってながった。おらどが悪いごどしたがら、怒ったんだ。

「それからね、オラと和葉はオヤジのところに通うようになりました。ああもちろん、栈橋には近づかないようにして、浜辺からオヤジの帰りを待つんだけど。オヤジは寡黙で口下手でしたが、今日獲れた魚の種類だとか見分け方、いい釣り場の探し方だとか、海のことをさまざまと教えてくれました。そうしているうちに、オヤ

ジは天気がいい日を見計らって、オラと和葉を海へ連れ出してけだ。オヤジの息子ど仲間だぢが漕ぐ舟コさ乗ってせ、きらきらど光る陸奥湾さ出だのせ……」

兵衛はまるでそれが今、自分の目の前にあるように、あるがままにゆったりと語っている。穏やかな抑揚の下北の言葉が、兵衛の物語る「きらきらど光る陸奥湾」を、桔華の目の前にも提示してくれる。

刺すような太陽の日差しも心地いい。青く澄んだ海は時折白い波をひるがえして、小さな来客を歓迎してくれる。オヤジを船頭に、海の男たちが威勢のいい声を上げながら櫂を漕ぐ。海を行く船の先頭には少年が二人、船から身を乗り出している。

「陸奥湾はこの痩せた下北の大地にたくさん恵みをもたらしました。マグロにタラ、イワシ、ホタテ、昆布、ナマコ、それだけでないして、海の道を通って上方の物産やら蝦夷地の交易品がやってきた。下北の木材を切り出して、銭コ（ジェンコ）さもしてけだ。オヤジが海を教えてくれたから、オラも和葉も漁師さなった。何度か怖い目にもあったけど、オラは今でも、この内海が大好きなんだア、この真っ青な広がりを見ていると、海端さ生まれでいがったなど思ふんだ」

この朴訥な青年は、心の底から海を愛しているのだろう。現在は安部城で炭鉱掘りをしているが、心のどこかでまだ海に対する情熱を捨てきれずにいる。

「海には戻らないのですか」

「戻らないと思います。和葉が、もう海は嫌だって」

先ほどのたえの話を思い出した。晴子が海に身を投げようとした

話。

「そうですか」

「いやね、情けない話ではありません、友人が舟を降りるというから自分も降りただなんて。オウは、昔っから意気地が無いんです。何をするにも和葉の尻ばかり追いかけてきたというのに、あれが兵隊に行くと言ったときばかりはオウは行がれねって。晴子さん一人残して何が御国のためだって言っても、結局は自分が兵隊に行きたぐねがっただけのごどかと思うと、情けなくて情けなくて……」

「兵衛さんは、晴子さんのことを大切に思っているんじゃないのですね」

兵衛が驚いたように顔を上げた。

「と、と、とんでもねえす！オウさは妻も子どももいるして！ただ和葉が、兵隊さ行く前に、晴子さんのこと宜しく頼むってへったして、様子ツコば見に」

「晴子さんは、そうして気に掛けてくださる兵衛さんをとてもありがたいと思っていちゃいますよ」

桔華はそう言って微笑んで見せた。兵衛は照れながら頭をかいて、日に焼けた顔をくしゃりと綻ばせた。そうこうしているうちにたえがやってきて、「兵衛さん、今日の葬式さ行がないのえ！」といって尻を叩いた。兵衛は「桔華さん、このことは、誰さも言わないでけろ」とこっそりと耳打ちをして帰っていった。桔華は苦笑してその背中を見送り、たえが夕食の準備をしている間に、店を閉める準備を始めた。

祭りのあとに（1）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

祭りのあとに(1)

北条古月が結婚するという。

桔華は最上家の庭を掃除していた手を止めた。「そういえばさっき聞いたんやけど」という玉津の声に、大きく胸の底に響く、低く重い音を聞いていた。

尋常小学校を卒業した古月は、中学には行かずにそれまで働いていた豆腐屋に入り、主人より仕入れから豆腐作り工程の統括など任されるようになった。二年ほどで売り上げを五倍に拡大し、豆腐屋を会社にした。従業員を雇い入れ、職人のほかに、仕入れ担当と小売店への営業担当を分担し、自らもその先頭を切って京都のみならず大阪、名古屋、東京へと販路を拡大した。豆腐のみならず、醤油、大豆製品を手広く扱うようになり、古月が厳選した農家と専売契約を結ぶことによって開拓した物流ルートに、さらに自社モノ以外の配送物品を取り扱うようになった。

古月は、幼少の頃より世話になっていた豆腐屋の主人に並ならぬ恩を感じていて、そんなわけで自分はいつまでも「さらりいめん」のまま、主人を会社の社長に据えていたが、古月の才覚を認めた主人が彼を社長に推挙した。明治26年、古月十九歳の時だった。

社長となった古月は、自分無しでも機動するようになった会社を社員に任せて、大陸へと放浪の旅に出た。社長就任式を形ばかりで

も行いたいという前社長と社員に反し、「そんなもん必要あらへん」と初めからつっぱねていた古月は、その日の朝に社長室に「五年ばかり大陸に行ってくる」と置手紙を残して消えた。彼らしいといえれば彼らしい行動に前社長も幹部社員らもあきれるというよりもその行動力に感心する方が大きく、残された会社と社員はこれまでの通り、古月の敷いたレイルの上の陸蒸気を走らせ続けるだけの話だった。

そこで明らかになったのは彼の筆まめぶりだった。会社への指示はもちろん、大陸の情勢、上海租界での話、華僑とのやりとり、果ては広東で知り合った女を会社の若い社員に世話したりしもした。社長不在とはいえ、その姿勢は身体は大陸にありながら目は国内に向いているかのような先見ぶりで、現地社員がその場で解決しようとする問題を古月は異国にしながら指示を飛ばし、結果的に解決したりすることもあった。折りしも、大陸では日清戦争が起こっている。社員が止めるのも聞かず、古月は単身、平壤に渡り、帝国陸軍と行動をとりにした。

「おもしろい男と出会った」

と古月が桔華への私信に書き綴ってきたのは、ちょうどその頃で、清国軍との戦いは朝鮮半島から清国牛荘へ移ろうとしている時だった。

「陸軍の士官で将校、名前は舎人耕三郎。年は一つ上。士官学校を卒業して間もなく、こちらの部隊を任されたらしい。おれはどうにも軍隊というものが嫌いで、当然軍人というものには偏見を持っていたわけだが、どういうわけかこの男は、おれの興味を強く引いた。まず驚くほどに人間嫌いだ。おれは先日大阪で紡績会社の蒸気が動かすでかい機械機というものを見てきたが、あれは昼も夜も関係

なく、悲しいも辛いも腹が減ったということもなく働き続ける。そうか、これからの日本にはこういう機動力が必要なのかとおもったが、舎人耕三郎という男は人間を蒸気で動かす感情の無い機械にしたらこうなるだろうと考えている。百人ほどの小隊を規律よくまとめ、無茶句茶な上官の命令を自分を介して程よく緩衝し、軍全体のバランスや小隊の果たすべき役割のようなものを弁えて動く。組織の歯車としては完璧だが人間味としては驚くほど冷え切った男で、感情を感じさせない表情のまま、必要以外の言葉を話すことも無い。それが士官というものかとも思ったが、別隊の話を聞けば必ずしもそうとは言えぬようだから、舎人耕三郎がその人格として他人との交流を自ら好まざることとは特筆できると思う」

桔華は便箋の三枚目を捲る。

「おれは大陸をふらふらとしているから、軍の連中には近頃流行りの大陸浪人だということとで通用している。大陸浪人っちゅうもんは、自らは愛国者を名乗りながら清国内部のさまざまな勢力と結びつこうとしている連中。一緒にされては困ると思うのだが、この戦争には連中がたくさん関わっておる。清国を内部から揺さぶったり、機密事項を日本軍に持ち込んでるのは奴等や。軍も身分不明の怪しい連中と心の中では蔑みながらも、おいしいとこだけは手中に入れようとする。まあそんなこともあって、身分不明なおれも、軍の周りをうろうろしても何も言われへんから、おれも連中を気に入らんとばかりも言ってられへん。おいしいとこだけいただこうっちゅうのは、俺にも言えることやからな。

話を戻す。舎人耕三郎は俺が寄宿している部隊の部隊長や。初めは士官がこんな若くて大丈夫なのかと訝ったもんやったが、平壤から行軍中の小競り合い、丹東と歴戦を従軍して奴の指揮官ぶりを見てきたが、それは先ほど書いたとおりや。天性の指揮官というものかもしれない。どんな天才でも、人気というものが無ければ政治家

にはなれへんように、この男はその会話数の少なさからは考えられないような人望を持っておる。帝国陸軍少尉舎人耕三郎に部下がついてくるんやない、奴と寝食を共にし、奴の下で死線を潜った連中が、人間として奴を慕っているんや。当然といえば当然やな。兵士の多くは東北で田端を耕していたような非職業軍人。軍紀なんてあってないようなもんや。それを統率しているのがおれと年端も変わらんような青年や。

おれが連中と行動するようになったのは、軍とつながりを持ちたかったからや。開戦前、世界はこの戦争、清国の圧勝やと思っておった。しかしふたを開けてみたらどうやら風は、連中が思いもよらなかったほうに吹き始めているらしい。幕末以来の不平等条約も、この一戦を機に日本にいい方にもっていけるだろう。そうすれば日本企業は世界への販路も開ける。開けたはいいが、各国についてもなければ話にならない。そこでてつとり早く、世界各地に武官を配している軍人とお近づきになろうというわけや。軍は武器物資輸送という面でも、国内では計り知れないクライアントになる。どっちに転んでも商人にとって損は無い」

朝鮮半島の帰属問題に正面から名乗りを上げた日本は、戦争のほとんど最初から最後まで、清軍を圧倒した。明治維新以来近代化を進めた日本軍と、西洋嫌いの西太后が日本との戦争に及んでも国内の軍勢力強化に傾注しなかったツケは、戦果に如実に反映されるという皮肉だった。

平壤での大きな一戦を追え、いよいよ清国本土に向かう。日本軍は長い隊列をぶら下げながら街道を北に向かっていった。兵站は軍夫による人足、食料などの一部は現地で調達をしていたが、古月が従軍する部隊では、秋の収穫に精を出す農民に手を貸し、畑の冬ごしらえなどしてやりながら食料を分けてもらうことがあった。徴兵された日本兵・軍夫の多くは地方の農民が多かったことも幸いした。同じ東洋人とはいえ、内乱に緩衝してきた日本の軍隊にいい感情な

どもっているはずの無い半島の現地人は、わずかながらでもそうして彼らと共に汗を流すことによって、日本人に対する感情を和らげたようだった。

鴨緑江を渡るというところでちらほらと雪が舞いだした。河の向こうには清の大軍が控えているという情報もあったから、今夜は河を一望できる高台に露営することとなった。

高台から大陸と朝鮮半島を分かť鴨緑江を見下ろすと、河向かいの一角に明るい陣地がある。おそらくあれが日本軍を迎え撃つ清国軍なのだろう。今年二月の開戦以後、近代化に立ち遅れた清国軍の無残な惨敗振りは外聞するのみでなく平壤以降その目に見ることもあったが、敗因はそれのみではなく、軍を率いる指揮官の配慮の無さにも起因するのだろうと古月は思った。

古月は兵士ではないので行動を厳しく規制されることは無い。しかし従軍記者や浪人ら非兵士の一団と主な行動を共にしていた。古月が野営に戻ると、飯盒に麦飯と沢庵、梅干が支給された。古月はそれらをかきこみ、腹に収めた。

「いよいよですな」

「明朝、鴨緑江を渡るとか。清国も本土に足を掛けられるんだ、今までのように日本軍を見つけるたびに遁走していたのでは、逃げ帰ったところでおっかない皇太后さまにお首をばっさりですよ」

場に笑いが起こった。しかしここにいる誰もが、言いようの無い不安を抱いている。自分たちには武器などの支給・また携帯を許されていない。激戦になれば、後配備とはいえ命の保障は無い。まして保障される立場でもない。

「北条さん、あんたどうするんだ」

「どうって、明日もお付き合いますよ」

「なにもここで命を捨てることは無い。国に会社や家族を残してきているのでしよう。興味本位で首を突っ込むにしては、あんた失うものが多すぎるよ」

古月に話してきたのは、都新聞の三田という記者だった。体のわりに声の小さい男で、面と向かって話しているのに、三田の声はすべて土に吸い取られているのではないかと思ってしまう。しかし人への気遣いというものに恐ろしく細かく配慮できる人間で、話をしているうちに、こちらが話したいと思うようになり、気がつけば三田は相手から知りえた情報を文章に起こしている。そういう意味で三田は根っからの新聞屋なのだろう。事実彼の書く従軍記事に、古月も何度も涙している。

「お気遣いどうも。せやかてわいは妻子もおらんし、会社は社長がおらんともようよう動いとる。問題あらへんよ」

三田は諦めとも善意とも言えない落胆の表情を浮かべて、例のぼそぼそとした声で古月に訴えてきた。

「あんたまだ若いんだ。日本はこれから世界に向かって政治のみならず経済、文化、あらゆる門戸を開いていくでしょう。維新後の西洋の猿真似や、列強のいいようにしたがつてきた不平等条約から開放された、我々の意思による本当の維新です。この戦争には勝つでしょう。しかし勝った後に国民が残らないんじゃないじゃあ、意味が無い。あんたのその行動力は、必ずや日本の力になる。ここで死んでむげに国力を減らしてはいけないよ。どうかね」

三田の言っている事に間違いはあるまい。その場にいるものの中にも感慨深げに頷くものもいた。古月はうんざりとした。国家とか

日本とか、そういうものを声高に叫び、そういうもので自分らをひとくくりにしようとする知識人の高揚ぶりには、ついていけないのだ。

そんな途方もないものを語る前に、自分の目の前のたった一人をあんたらは救えるのか。

古月は、そう考えている。「小学校しか出とらんわいにはよう分かりますせんわ。根っから商人やさかいな」と言い放って、呼び止める三田の声を背中で聞きながら、古月はその野営を後にした。

「大きな交戦の前夜だというのに、おれはすっかり気持ちが悪えてしまった。外に出たときはもう一面が白く染まっていて、樹も草も無いのっぺらぼうの原野が一面塗りたくったような白さというような有様だった。野営のところどころはまだ明かりがついておった。消灯は2100。おれが勢い、外に出てきてしまったのは夜の八時を少し過ぎたぐらいの頃やった」

見張りの年若い兵に「お疲れイ」と声を掛けたところで反応は無かった。特段意中にすることなく、古月は人目の無いところを探して小用をするつもりだった。外套一枚では寒さが骨の髄まで浸透してくる。決まりは悪いが、戻ってさっさと寝てしまえば、さっきの連中とも顔をあわせなくてもよい。

商売。本当にそうだろうか。会社の利益のために、自分は明日、自分の命を危険に晒してまで戦場にあらんとするのだろうか。

同行したところでどうとなる。兵力の一端を担うわけでもない自分を、どこの将校が面倒見てくれるというのだ。放尿した呆け頭になんやりとそんなことが浮かんだが、それ以上考えたところで最善の方法など思いつくはずも無かった。古月はいつも、自分がこれだ

と決めたことを貫くことで結果を出してきた。行動する前からその根拠など考えたことも無かったが、そのときはなぜかよく見知る一人の女の顔が脳裏を過ぎった。その瞬間に古月は「あっ」と口にして、頭を抱えた。

そうか、そういうことやったんか。

女の顔はいつも不安げに俯いていた。学校帰りに古月のところに豆腐を買いに来ては、その睫を少しだけ上向かせて、儂げに笑う。瞳に込められた鈍い光は、本当は最上のどの姉らにも決して劣らない器量と、そして明晰さを物語っていた。だから古月は彼女を、祖母、桜花に言って聞かせたのだ。

桔華は、おもしろい女やよ。

便箋は八枚目に入っている。

桔華は刮目しつつ、彼の筆跡を追っている。なぜ自分の名前が出てきたのか。これはつまり、古月は何を言いたいのか。

小さな胸が脈打つ鼓動を伝えてくる。便箋を持つ手が震える。

「急に目の前が開けたような妙な陽気と、湧き上がる溶岩のような衝動。今にも踊りだしたいような叫びたいような妙な心境になり、粉雪舞う中に男一人が闇の中でただひたすらに狂人だった。人氣が無いことをいいことにおれは何度も何度もお前のことを頭の中に描きながら、交わした言葉の一つ一つを、その挙動の一投足を、そして首筋に覗く白い肌を夢想しては身震いをしておった。わかるか桔華。おれは自分という存在の、本当に生きる意味を見つけた。そしてそれが、どんなに喜ばしくて、素晴らしいものか!!」

狂乱した男の歓喜に水を刺したのが、例の若い将校だった。人目

も無いを大の男が手足を振って夜空に吼えているところを、嘲笑することも無く、ただ石のようにその様子を見ていたということが、当人にとって最も屈辱ともいえる応対ではなかったか。古月は体中が火照っているものが急に醒めていくのを感じながら、若い将校の拳動に耳目を動かした。かれは古月の存在に気がつき、ちよつと視線を彼に投げただけで、ふいと古月の横を通り過ぎようとした。

「ゆ、雪になりはりましたなあ！」

このままではいられない、いや何にあわてる必要は無かったのかもしれないが、古月はこの場を取り繕わなければならないような気がして、将校の背中に声を投げた。

「清国側も、いつ河を越えられるかとやきもきしている頃やろうなあ！」

古月の乾いた笑いが夜空に木霊した。将校はちらりと振り返っただけで、後はすぐに進行方向に振り返り、すたすたを歩みを進めた。ここまですれば、古月も引き下がるわけには行かない。すぐにその若い将校の後を追って、「舍人中尉殿、わい、あんたと話をしてみたいと思ってましたのん」と強引に食いついた。

舍人耕三郎は、古月を振り返ることすらしなかった。

ただ暗闇が落ちる山道に、耕三郎の地面を踏みしめる音だけが響いていた。

引っ込みの付かない古月は、関西人なら適当に返してくるはずの人間同士の他愛の無いやりとりですら興味を示さないこの若い将校——それは彼が「軍人」という特権階級であるということも含めて——の背中にあらん限りのこの場における古月への気遣い、非礼といったものに対する非難を浴びせたい衝動を必死に押し込めて、前

を歩く耕三郎の足音を頼りに駆け上がった。視界が開けると、日本側の軍営地を左翼に、先ほどまで眺めていた鴨緑江を挟んだ清国軍の宿营地とは「反対側」を見渡せる崖に出た。

「さんざ、月の光りよる夜で、雲ひとつ無い夜空にはその濃藍の布地に無数の針穴を開けたような鋭い星たちが散らばっておった。わいと耕三郎が山道を抜けた先は宿营地も無いので、夜空ばかりが舞台の主役を張り合っておる。おれは先ほどの羞恥心や耕三郎のこともすっかり忘れて、その空を見上げてばかりおった。上を見上げれば無数の星、下を見れば際限を知らない山肌。果てしなく人間の作りよる『もの』の無い世界を、おれはその時はじめて眼前にしておった」

「挟まれたな」

耕三郎がポツリと言った。山道を抜けると月を真上に迎えたので、耕三郎の筋の通った高い鼻がくつきりと見えた。

「なんやて」

「今夜中に決着をつけねばなるまい。おい、貴様——」

そのときはじめて耕三郎は古月の顔を正面から捉えた。古月も、この若い将校とこのように間近で顔を合わせたのははじめてだった。揺ぎ無い耕三郎の視線が古月を捉えると、普段物怖じしない古月ですら、このときばかりは心臓が大きく打つのを自覚した。

「自信、自負、そういうもんやない。おれの知っている軍人がよく張る虚勢でもない。あれはあの男が持つ人間の、もっと本質的な、根っこのところが持っている強さとでもいうのだろうか。とにかく、その瞳には、見るものを屈服させる何かが潜んでおった。おれは、

普段ならそういうものには、特に反発して食いかかるところなのだが、その時ばかりはどういうわけか、素直にはい、と返事をしてしまったんや」

「上官と話をつけてくる。この暗闇ではもう一度ここに戻るのは至難であるから、貴様がここで待て。連中に動きがあったら、この小銃を空に向けて二秒間隔で二発撃て。三十分以内で戻る」

「ま、待ちいや、挟まれたって、敵軍がこの、原野のどこにいるっていうんや。清国軍の宿营地なら、さっき川の対岸に赤々と見えつつたぞ」

耕三郎は腰元から自分の短銃の弾をばらばらと抜き、2つだけ弾込めしたものを古月に手渡した。古月はその手を掴み返して耕三郎の行く手を制した。彼は表情を変えなかった。

耕三郎は例の見るものをねじ伏せるような視線を古月に向け続けていた。耕三郎の反応を待つ古月も黙り込んだ。耕三郎は古月の手を払いのけることも無く、やはりじつと古月を見据えていた。

そのとき、微かだが地の唸るような音がした。それは地割れのようなくぐもった音で、古月の脳の深いところにずしんと響くような感覚だった。

「馬の蹄の音だ。数は約五百。華北一帯を縄張りとしている匪賊の一団だ」

「わいは戦は『どしろうと』やが、日本軍はその兵の数が二万と聞いておる。舎人少尉、匪賊やろうがもの数の数やあらへんと違いますか？」

「連中は真っ向から我々とやりあっても勝ち目が無いことを弁えている。故に、今夜中に奇襲を掛けるか、清国との戦闘中に後配備の手薄なところを狙って攻撃を仕掛ける可能性がある。交戦が始まれば兵力が前線にある以上、後方守備は至極、難しい」

「清国軍も考えおったな。前線にあれだけの大兵力をちらつかせて、本命はこっちか」

「連中が清国軍に加担しているとは考えにくい。目的はこの戦場に散らばる武器弾薬、食料と考えるのが妥当だろう。いずれにしろ、自軍の末端配備は指揮官の目が直接届きにくい分慎重に取り計らう必要がある。理解してもらえただろうか」

「帝国陸軍における上官の命令は絶対や。連中が火に飛び込めといえ、従卒は死んでも火に飛び込まなければならん。だが、先頭の真っ最中に、彼らの見えぬ先で背中から攻撃されたら。『火に飛び込め』という掛け声の聞こえぬ先で後方がばらばらと崩れだしたら。流れる水を食い止めることが出来ないように軍の部隊がぼろぼろと崩れていく。耕三郎はそういうことを、軍人でもないおれに必要最低限の言葉のみを簡潔にまとめてそうのたまった。頭でどうこう考えるより早く、おれの理性が『こいつの言うことに従え』といううったんや。

おれは短く『分かった』と言った。耕三郎は『直ぐに奇襲ということは無いと判断するが、身の危険を感じたら直ぐにこの場を離れる』と言い残し、陸軍の黒い外套を翻して走り去りおった。いまい思ひ返してみれば、そんな重篤な危機が迫りつつある状況に、軍属でもない商人が一人、日本軍二万の命を背合わせたんやから、たまったものではない。だがそのときのおれは、そんな重責の自覚は露も無く、今夜のおれは本当についている、とあいも変わらず心の中で咆哮していた。桔華と、耕三郎。おれの中でこんなにも大きく、そしておそらく今後も互いに影響しあうであろうお前や耕三郎という存在の放つ強烈な光を真っ向からぶつけられて、おれの行く先が強引に開かれたようなそんな感覚やった。

話したいことがある。桔華、今おまえに、会いたい。」

祭りのあとに(2) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog.fc2.com/>

祭りのあとに(2)

京都は祇園祭の最中である。

トントンチキチキ囃子が鳴り、とりどりの山鉾が路地に並ぶ。

古月との約束は21時。祇園街裏手の、小さなお茶屋の一室であった。

桔華が暖簾をくぐると、顔を出した女将が無愛想に桔華を一瞥して、「ほな、こちらへ」と促した。外の喧騒が別世界のように感ぜられるほど、小さな扉の内側は暗く、茶屋には別の客はないのか、もしくは気づかないほど静まっていた。

狭く急な階段を上り、通された一室はやはりこじんまりとした四畳半。暗がりに落ちた間接照明は美濃和紙の漉きがふんわりと浮かんでいて、時より吹き込む障子窓の隙間から吹き込む風に揺らめいていた。

女将は相変わらず澄ました顔で頭を下げて、部屋を辞した。一人残された桔華は手持ち無沙汰気に障子戸に体を預けるようにして腰を下ろし、わずかに開いた隙間から外界を眺めた。

会いたい、桔華。

手紙にそう書いて寄越したのが半年前。あれからかれを取り巻く環境は一変した。日清戦争は日本の勝利に終わった。多くの先見者が予測したとおり日本と列強各国による不平等条約の改正が行われ、国中が「一等国」という自覚の高揚に沸いた。

終戦とほぼ時を同じくして古月は会社組織を物資輸送、物流、生産工場の三部門に分割し、それらの持ち株会社、統括として「北条」グループを構築した。戦中、軍事特需による物流ルートを拡大、勢いを持ちつつあった。しかし終戦による軍事物資の需要低下によって生産工場で不渡りを出してしまった。支店拡大や新しい工場に多大な投資を行った後の決算で発覚し、会社は銀行から融資を受けることが出来なくなった。それ以来古月は資金繰りに東奔西走し、北条グループでは大規模な人員削減や会社予算の削減を行ったと地元紙が伝えていた。

あれほど頻繁に届いていた古月からの手紙が途絶えたのもその頃だった。最上家の家事をしながら北条の家で桜花の助手も相変わらずこなしていたものの、北条の家中でも現在古月がどこで何をしているのか知る者は居なかった。そもそも古月は北条の家のものを会社に関わらせることはなかったし、古月が早くから自立したのも、自ら稼いだ金で生活するという意識に乏しい家の人間への反発心があったからに他ならない。それを理解しているのは祖母の桜花ただ一人で、北条の家はこの時点で、桜花の歌人としての名声に多くの部分を頼り切っているという状態だった。

そして、今朝である。古月が結婚するという話を、桔華は姉、玉津の口より聞かされた。相手は寛永の頃より続く京都老舗呉服店「居ず奈」の娘、篠。今年22に成る古月に、篠は16。桔華よりも4つほど年下となる。

話をつけたのは古月の父親ということだった。昼行灯といえ息子の一大事に、彼なりに知恵を働かせた結果らしい。当然のように古月は反発したらしいが、篠が嫁入りすることで得られる支度金で、不渡りの一切の始末をつけろと紋切られてしまった。相手の家もそれを承知で、この縁談を受けたということだった。多くの社員、そしてその家族を養う立場である古月に、選択の余地は無かった。

古月の結婚の話聞いてより、桔華は心が半分どこかにいつてしまったような心持でいた。掃除をする手にも力が入らない。桔華に語って聞かせた古月自身のその心のうちを何度も胸のうちに反芻しながら、この半年を過ごしてきた。ほんの幼馴染であつた古月の、あの人を拒まない笑顔を脳裏に描いて、その細くがっしりとした胸に抱かれる日を夢想して、いつしか自分はおれにこんなにも慰められていたのだと気が付いた。そのおれが、見知らぬ誰かと結婚する。一度もおれの口から自分への気持ちを聞くこともせず、始まらぬうちに終わってしまう。びしょぬれた着物をぶらさげて途方に暮れた子どものように、時折身震いをするような絶望に襲われつつ、桔華は日がな虚ろな時間を過ごしていた。

夕刻、桜花の元での助手を終えて帰宅する途上、北条の社員という男が最上家の前で右往左往していた。桔華が声を掛けると、「最上桔華様でいらっしゃいますか」という。桔華がそうだと返事をすると、男は社長からの預かりものだと言って桔華に箱菓子の包みを手渡し、用があるからを足早に去っていった。風呂敷に包まれたそれはイギリス土産のマドレーヌで、結び目に『桔華へ』と書かれた小さな紙切れが挟まれていた。

『今夜二一時 祇園下ル六辻二番町「ミノヤ」デ待ツ 古月』

大通りから小さな路地に入ったこみちに面している茶屋の出窓からは、大通りの賑々しさと対照的な小路の暗がりをはっきりと見て取れた。22時を回る頃になっても桔華の視線の先を大山車を通り、

太鼓の音、若衆の掛け声とともに歓声が沸く。一方で、祭りで逢い引いたらしい男女が、身を寄せ合いながら小路の暗がりに消えていく。

この祭りを契機に見知った仲なのだろうか。もしかしたら今夜限りかもしれない縁を、彼らは今宵、如何様にして紡ぐのだろうか。

それを見送って、どうして自分は来てしまったのだろうかと自問してみる。古月の手紙は、自分への熱情を押し隠すことなく伝えてきたとはいえ、当の桔華はそれを古月本人の口から聞かされたわけではない。かれの書き送ってきたものを、自分は自分の都合のいいように解釈をして、えもいえぬ夢想などをして、自分を慰めていただけに過ぎないのかもしれない。

廊下にあるらしい時計が22時を告げた。今朝方から地に叩きつけられるような絶望にさいなまれ、夕方に差し伸べられた不意な希望に桔華の感情は押し乱れ、もはや疲れ切っているようだった。時計の音に転寝を覚醒させられて、桔華はあらためて懐中時計を取り出し、そして小さくため息をついた。何を期待していたのだろう。思えば最上の家でも妾腹の自分は、器量が特別よいわけでも聡明というわけでもない自分が、古月より好意を寄せられることがあるうはずも無かった。すべて妄想の中の話だったのだ。

桔華はストールを掴むなり立ち上がった。勢い襖を開けようと手を掛けるところで、襖のほうが先に開いた。

古月が肩で息をしていた。驚いた桔華がその場を動けずにいると、少し息を整えた古月が桔華の顔を覗きこんでにと笑った。

「よかった、待っていてくれたんやな」

相変わらず桔華は返す言葉が見つからない。これも自分の妄想の

中の出来事なのだろうか、そんなことを考えるより早く、「めっちゃ走ったわあ、今夜も暑いのう」などと言いながら古月は部屋に入り、襖を閉めた。かれは勝手に窓際に陣取ると、帽子と着ていたスーツの上着を脱ぎ、シャツのボタンをいくつか外した。桔華は古月の上着と帽子を受け取ると、それを立屏風へ掛け置いた。

「お疲れ様です」

「祇園さんやなあ。今夜のことが無ければ、お前と山鉾、見に行きたかったんや」

桔華は、古月に体面するように膝を折っているが、どうにもかれの顔を見ることが出来ない。古月も相変わらず手扇のまま、視線は大通りの山車に向けているようだった。

「嫁さんに会ってきたんよ」

「『居ず奈』の篠さんですね」

「ええ子やった。しかし、わいにはちよっと、若すぎるんやないか。こないな根無し草、篠さんがかわいそうや」

桔華は微笑した。まるで他人事だ。あいかわらず自分に頓着しない2こ上の従兄弟が、桔華にはたまらなく愛しかった。

女将が水と酒を持ってきた。古月が昇りがけに声を掛けてきたらしい。控えめな声で「失礼します」と聞こえて、相変わらず愛想も無く去っていった。「無粋はしない」とその顔に書いてあった。

古月が水を一気に飲み干すのを待って、桔華は銚子をかれに勧めた。グラスを杯に持ち替えた古月はそれを受け、ひとのみで干した。

「一年ぶりか」

「そうですね」

「変わりはあらへんか」

「変わりありません」

「そうか、そら、ええことやな」

半分夢心地でかれの声を聞きながら、「らしくない」古月とのな
んともいえぬ微妙な距離が、以前とは異なることをもどかしく思っ
ていた。

自己慢心かもしれない。そう思う気持ちが半分。幼い頃より、貧
しい北条の家計を支えるべく一人、豆腐屋で懸命に働く古月を覚え
ている。かれのあどけない笑顔も、裏表の無いその言動も、いつし
か心の支えとして桔華の目に映っていたのだった。それをおのずと
胸に抱くより早く、かれが自分に向けた気持ちを明かしてくれた。
己が誰かに必要とされることのこの満たされた気持ちを、幸せとい
わず何とよぼう。この打ち寄せる穏やかな波間のような至福感を、
桔華は今、この瞬間まで覚えたことは無かったのだ。

銚子を差し出した桔華の細い腕を、古月が掴む。二人が視線を合
わせるより早く、桔華は古月に腕を引かれ、銚子が音を立てて床に
転がった。背中に回された腕はガラスでも抱くように柔らかく、そ
して恐れるようにそっと触れた。古月のワイシャツの上に耳をつけ
る格好で桔華は彼の心音を聞いた。遠くでは微かに、祇園のお囃子
が鳴っていた。

「いいわけ、いろいろ考えたんや。せやけど、なんにも思いつかへ
んかった。あのな、おれは、お前のことを考えていると、心がふわ
っと、軽くなるんよ。耕三郎に出会ったあの夜、お前がふとおれの
目の前に現れて、悲しげな顔で、笑うたんや。おれはな、このこと
が、どんなに幸せで、どんなに大切なものなのか、あの時ようやく
分かった。なあ桔華、おれはいつだって、お前のことを考えている
んだよ。お前に触れたい、この腕に抱きたい。ああ、どうしたらお
前に分かってもらえるやろか。おれは今、どうしようもなく幸せな
んやということを」

桔華の髪に触れる手が、優しく撫ぜながらも次第に力が入っていく。息も出来ないような鼓動の高鳴りと古月の強い抱擁に桔華は身も心も窒息してしまいそうな心地だった。

「桔華」

桔華は返事をしなかった。

「なあ、桔華」

嗚咽を飲み込むことで、桔華はかれへのさまざまな責めの言葉を飲み込もうとした。飲み込めば飲み込むほど、ぼろぼろと涙が溢れてきた。

二人の影が、鷹揚の伸縮を遂げるうちに、一つとなった。

遠くで、トントンチキチキと、祇園囃子が聞こえている――。

祭りのあとに(3) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog.fc2.com/>

祭りのあとに(3)

翌月、北条古月は葦屋篠と結婚した。

結納を身内で済ませ、披露宴は執り行わない。古月と篠は礼装に身を固め、双方のごく身近な親類に取り囲まれながら、互いに杯を交わす。

しゃんと伸びた古月の紋付袴姿を、桔華は座敷の下手から眺めていた。

長い睫毛、細い腕。

数日前に確かに手の届く場所にあったその背中。

篠の白い手が、白無垢の袖口からのぞき、古月から杯を受け取った。

鈴の鳴るようなしなやかさで、篠は杯を口元に運んだ。

麗しい人だ、と桔華は思った。

会社再建に奔走せねばならぬ古月は、篠を北条の本家に残し、相

変わらず国内国外を駆け回っている。

桔華の方も桜花の発句の手伝いなどしていたし、母屋に篠ひとりが寝食をともにし始めたという以外は、大きな変化もない。

17歳になったばかりの篠は、まだ少女のような無縫さを残していて、白い肌に薄つきの化粧がまだその肌になじんでいないのか、妙な艶めかしさになっている。

口数も少なく、いつもうつむき加減に肩をすぼめている。良家の箱入り娘であつたはずの篠は、慣れない細腕の袖をたすぎがけて、朝早くから夜遅くまで炊事、家事、そして桜花の元を訪れる門下生たちへのもてなしなどを懸命にこなしていた。古月を知る古い門人たちに「あれにはもったいない器量やな」とからかわれて、顔を真っ赤にしておずおずと退席する篠。彼らは桜花にぴしゃりとたしなめられるのが常であつた。

そんな篠は、桔華にだけはよく懐いた。

「桔華姉さん」

ともすると消え入りそうな儚い少女の声が、ぴりりと桔華の呵責を刺激する。少女は葡萄のような漆黒の瞳を桔華に向けていて、桔華の視線に己へ関心を認めると、人知れず胸をなでおろしたような安堵の色を浮かべる。

「桜花様に竜胆の蒔絵の入った筆入れを持つよう言われたのですが、どこにあるのか教えていただけませんか」

触れれば音を立てて割れてしまうのではないかと思うほどに健気な少女。頼るものもない心細さの中に打ち震えるその姿にかつての自分を投影した自覚はなかったが、桔華はいつか、北条の家の中でも篠を自分に近い身内のようにいとしく感じるようになって

いった。

方々との折衝でほとんど家にいない古月だったが、三カ月一度ほどの頻度で京都に帰っていた。

休暇というよりも、いわば「質」として興入れた豪商『居ず奈』の一人娘をいつまでもほおっておくなどという——つまりは早く世継ぎを成せという——両親や義理の両親からの催促もあって、さすがの古月もそれを無下にできないというふうなものであった。彼が京都に帰ってくるというときには、古月は必ず、本家に帰るという時宜よりも早く、桔華に連絡を寄越してくる。そして古月は狂うばかりに桔華を抱き、そして桔華もまたそれを望んだ。かれの迸るような熱情はやがて桔華に罪の意識すら薄れさせ、古月もまた、何知らぬ顔で篠との順風な夫婦生活を世間に呈していた。そうして二人の不義が誰に見咎められこともないまま、一年の月日が流れた。

その春、篠は第一子となる長女を生んだ。

名前をゆゑ。安らかな寝顔をたたえて眠る小さなゆゑを抱く篠の顔は、いつのまにか少女のそれから大人のものへと変化していた。ずっと軋み音を響かせていた北条家の久しぶりの朗報に、周囲は沸いた。

「中国語で『月』。おれの名前からとったんよ。仮名にしたのは、女の子らしゅうやわらかい印象にしたほうがええっちゅう篠の意見や」

桜花のサロンで顔なじみにそう吹聴している古月の顔は、桔華の知るどのかれよりも眩しく、そしてそれは桔華の心に大きく響いていた。

大人びた篠。その成長ぶりは、この一年身近にいた桔華が一番理

解しており、なにより望まれた長女の誕生は心から嬉しかった。

篠の知らない古月の顔。

古月の知らない篠の顔。

そして、桔華の知らない二人の顔――。

收拾のつかない心境を押し隠そうとする桔華の背中を冷たい視線で見つめる、一つの影がある。

最上朔子。桔華と年の変わらない、腹違いの姉である。

明治34年、晩秋。

障子戸の外は未明からちらほらと雪が降り始めたようで、しんと暗闇が落ちていた。

桔華は隣で寝息を立てている古月を起こさぬよう、そっと身を起こして着物を羽織った。障子戸に手をかければ、夜分の熱情をはらんだ四畳半に細い空気が流れ込んだ。

かれとの逢瀬は、祇園社の夜から絶えることなく、あれから三年が経過しようとしている。

相変わらずあちこちに飛びまわっている古月は、実家への帰京の知らせよりも1日早く、こうして桔華にたよりを寄こしてくる。そしてこの祇園裏地の小さな茶屋で、人知れず互いの心身を交わらせ、翌朝には何知らぬ顔で従兄妹に戻る。桔華はこの逢瀬の度に、最上

に見止められることが無いよう、夜半過ぎに家を出、そうして家の者が起きだす前に帰宅して朝餉の支度をする。今日もそのつもりで、太陽が地平線に顔を出すよりも少し早いこの時間に起きだしている。

古月の妻である篠や最上、北条、桜花にも、当然この関係は他言していかないのであるが、桔華は、いつかはこの関係を終わらせなければならぬのだということ、そしてそれは自分が古月に言いださねばならぬのだろうということを強く自覚するようになっていた。幼いころより知る愛しい人。最上の四姉妹の中で腹違いの身である桔華と、傾いた北条家を必死で支え抜いてきた末弟の古月。家内に身寄りのない二人が、自然と心を寄せあつて触れあいたいという気持ちは、誰にも咎めることのできない節理であつたろう。せめて、近いところで血がつながっていないければよかったのか。古月が、会社再建のために嫁をとらねばよかったのか。邂逅する思考に反抗するように、それは否、と桔華は結論付ける。

守りたいものがある、それを大切にしているあなたのことが、愛しいの。

差し込む朝日が細く、床の間に落ち始める。桔華は古月の着物を胸に抱き、強く握りしめる。

「そないなもん大切にせんと、眼の前におれはしゃんと居るやないか」

ほとんど囁くような声に、桔華が振り向くよりも早く、古月が後ろから桔華の肩を抱いた。肩筋から耳の後ろまでをかれの吐息がなぞり、桔華はひとつ、身震いをした。上着を身につけていない古月の上半身の熱が、襦袢の背中から伝わってくる。桔華は軽く抵抗したが、こうなつてはいつものこと、かれの気が済むまで解放しては

もらえない。

「せめて、上着だけでも」

「かまへん。このままがええよ」

桔華の肩を抱いたまま、古月はぴったりと顔を桔華の肩に預けて、小さくゆらゆらと揺れ始める。小さな子供のように、甘えている。まるで鼻歌でも歌いだすかのように、かれの穏やかな心情が桔華にも伝わってくる。

ふと、古月が顔を上げた。拘束から解放された桔華はかれに、上着を掛けてやった。

「どうしたん」

古月は桔華の顔を見据えて、不安げな声を上げた。

「そろそろ帰らねば。夜が明けてしまいます」

「そうやない。お前、何を考えとるん」

「今朝の朝食の事」

「桔華」

普段は他人の都合などお構いなしに突き進んでいくかれが、こういうときだけは察しがいい。桔華はちよつと困った顔をしてはにかんで見せた。胸の内で「いつかは言わねばならぬこと」を反芻しながら、今はまだその時ではないという声を聞いた。三年前から、こうしていつも桔華に囁きかける本性の声。

「あいしてる」

「ありがとうございます」

「なあ桔華、おれはお前だけを愛しているよ。誰と結婚しても、ど

こにいても、何をしていても、お前のことがいちばんなんよ。お前も、おれにようしてくれる。会いたいうことにも、こうして応えてくれる。でも、おれはまだ、たった一言を聞いていない。その一言が聞けないばかりに、こうして手の届く場所にお前が居っても、心の蔵を今にも握りつぶしてしまいうな、そんな不安定な気持ちになるんよ」

あどけない少女の顔をした篠の姿が脳裏に浮かぶ。

その背が振り向き、腕に赤ん坊を抱いたその「少女」の顔は、慈悲を帯びた母親のそれとなっていた。

無邪気に慕ってくれる可愛い妹。寄せられる信頼は、自分が古月に寄せていたような、そんな安堵をもたらしてくれるのだ。

「今日も、応えてもらえんね」

桔華はその言葉を聞かぬふりをして、身支度をし、部屋を出て小雪舞う小さな玄関をくぐった。

差し込む太陽の光に、人影を見た。

辺りに降りた静けさは、まるで彼女の息づかいを消すためのものだったのか。桔華は、息を呑んだまま金縛りにあったような心地でいた。

「……朔子」

それは姉の朔子だった。彼女は桔華の姿を見止めるなりふ、と少し顎を上げて、その小さな唇をわずかに開いた。

背中でガラガラと音がした。古月だった。

はっとして桔華が振り返ると、そこは先ほどの静かな朝の粉雪があるだけだった。

「桔華？」

古月の訝しむ声に、桔華は何でもないと応えるのが精一杯だった。桔華の胸は、音を立てて鼓動している。確かに、そこに姉、朔子がいた。

――哀れな女。

小さく開いた彼女の唇は、桔華にそう告げていた。

体の中のすべての力が抜けるような感覚だった。そこからどうやって最上の家まで戻ったのか、桔華はよく、覚えていない。

事が表に出たのは、古月が上海に旅立ってから三日後のことだった。

祭りのあとに（4）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

祭りのあとに(4)

古月への気持ちを確認して以来、桜花の下で心情を短歌にかたち作る作業を手習いながら徐々にその創作の才覚を現しつつあった桔華は、すでに何度か、桜花の主宰する同人「のほら」に歌を掲載させている。次女の玉津は昨年他家に嫁入りし、月に数度、北条の桜花のサロンを訪れるだけであつたが、もとよりの才女はその才能をおしみなく作品に投影させていて、玉津と桔華の二人は、近代の女流歌人名手と謳われる最上桜花門下にあつてその名を文壇に響かせつつあつた。

朔子を見た朝より、桔華の心地がすでにそのことを想定しているからか、最上の家の中にいることもできないので、大方の家事などを済ませた後は何かと用事を見つけて外に出ていた。食事の際に顔を合わせる時なども、――それは桔華の心の在り処にも多分に関わっているのであるが――義母と長姉、八重に射るような視線を感じて顔を上げることができない。何をいまさら怖気づいているのか、こうなることはいずれ分かっていたのだと自分に言い聞かせるよりも、早々に食事を済ませた兩人が早々に席を立ていく。八重の夫は最上の家に婿入りしているが早朝に仕事に出るのでほとんど顔を合わせることもなく、また父も、妻と長女の顔を伺いつつ、背中を追うようにそそくさと去っていく。

朔子は、三か月前に嫁いだ先を飛び出して急に家に戻ってきたかと思えば、今度は東京の銀行マンと一緒に住むことになったとかで数日前に最上の実家に顔を見せてから、また家を出て行った。三日前に見たのは本当に朔子本人だったのか、今ではそれに確証を持てぬほどにぼんやりと霞んでいて、しかしその熱を孕んだ思考が、じ

わりと桔華を追い詰めている。桔華はそれを朔子に問うこともできずにいた。

晩秋の雪である。

朝から深々と降り続いていた細雪は、紅葉の落ち切っていない京都の町を一面に白く染めていた。今年初の根雪になると、桔華は渡りの雨戸を閉めながら、いつもより早い冬支度の段取りをおもった。

「桔華」

声の主は八重だった。針金の入ったような背中をぴんと伸ばし、少し顎を上げて人を見下げる彼女の姿はいつものまま。傍流の血筋を決して認めようとせず、彼女にとって桔華はあくまで他人でありながら、桔華には自分を最上の長姉として認めさせようというその意気。

そのときが来たのだ、と桔華は存外冷静に受け止めていた。

奥の座敷には義母のみが坐していて、桔華を先導した八重が障子戸を閉めてそこに膝を折った。義母は桔華の姿を見るなりまるで汚らわしいものでもみるように一瞥すると大きく息を吸い、そして桔華から目を外しつつ、大きく肩を揺さぶった。ロウソクろうそくの灯りだけが部屋をゆらゆらと照らしていて、義母や八重の表情はよく見えなかった。自分は彼女たちにどんな化け物に映っているのだろうか。そんな自分の容貌をこの暗がりの中でさんざ彼女らに見せることができないのは小気味よいことだと思った。

たつぷりと桔華を凝視したあと、ようやく義母は口を開いて「母親が母親なら、子も子やわ」と吐き捨てるように言った。八重の気配は動かない。桔華も反論することもせず、黙ってその声を聞いていた。

「よりにもよって、古月と通じるなんて。あきれてものもいえへんわ」

そうではない、古月だからこそ通じあえたのだ。そう頭の中で反芻し、これまでのかれとの時間を思い返していた。

かれは従兄妹である前に、自分にとって一人の男だった。兄であり、大切な友人であった。しかし古月が所帯を持った以上、かれを男であると認識することがもはや許されないものであることも自明であった。分かっている、この三年、二人だけの甘い陶醉に逆らうことができなかったのだ。

義母は己が思いつく限りの罵倒を桔華に浴びせ、その意気に自分で窒息しそうになり、大きくまた息を吸い込んで、今度は桔華の母の話をはじめた。最上家の女中であった桔華の母もまた、義母の夫である最上の女中を誑かしたのだと義母は言った。桔華は自分の生みの母のことはもうほとんど覚えてはいなかったが、義母の怒号を上る空で聞きながら、そういうことなのだろうと思った。母は、美しい人だったのだ。使い、使われる関係でありながら、父に自分を女として認めさせるほど、美しい人であったのだ。

自分は古月にとって、そういう女でありえたのだろうか。なぜ、自分だったのだろうか。そうして三日前のかれの不安げな顔を思い出して、胸が締め付けられる思いに駆られた。なぜかれに应えてあげられないのだろう。ならばなぜ、かれの求めに应じてしまったのだろう。いずれも中途半端な覚悟でしかなかったのだという自分の不甲斐なさを改めて思い返しながら、それが却ってかれを傷つける

結果になっているのだということを深く悔恨した。義母の罵声よりよっぽど辛かった。

古月が内外で名を上げるにつれて、北条と最上の立場は以前とは逆のものになりつつあった。北条は最上より借り入れた借金を返済し、反面最上は父の会社経営がひっ迫しており、八重の夫が家をなんとか保っている状態という有様だった。しかしこの義母は、ありし日の自尊心を捨て切れずに、こうしていつまでも執拗に対面にこだわっている。夫が家を支えている自負から八重はその発言力を増し、玉津と朔子は、長姉が探してきた良家に嫁がされた。才がありながら義母や八重に認められないというコンプレックスを抱いていた玉津は、嫁入り後に最上の家には音信を寄こさなくなっていた。家の中では桔華に比較的理解のあった玉津がこの場にいないのは、むしろ不幸の中の幸いであつたのかもしれない。

「ご近所中の評判になって、最上はいいもの笑いの種。古月は今や、大きな会社の社長はなんやから、こんなところで傷モノのするわけにはあきまへん。あんたには、この家から出て行ってもらいます。二度と最上や北条に姿を見せんといてや。早よ消えや桔華。早う！早う！！」

義母がヒステリックに声を張り上げると、八重が後ろから荷物を投げよこした。数着の着物や化粧品などの、最小限の桔華の荷物だった。母の部屋であつたという桔華が使用していた部屋も、今はもう人の宿る部屋の有様ではないのだろうかと思った。

桔華は正座のまま義母に一礼すると、荷物を抱えて立ち上がった。もとより、言い逃れなどするつもりはなかった。朔子の姿を見止めたあの日から、こうなるであろうことは覚悟していたのだ。

桔華は再び八重に従った。そういえばと思って八重に声をかけた。

「朔子はいないのですか」

「もうあんたには関係あらへんやろ」

「このことは、朔子が申し出たのではないのですか」

「お母さんが言うたやろ。このことはもう近所では周知。朔子が知っていても不思議ではあらへんけど、あいにく何日も姿を見ておらへんし」

朔子が義母に告げたのだと思っていた。しかし、あの朔子が近所に吹聴して回る姿も考えられなかった。

ならばどこから漏れ出たのだろう。そんなことはもはや、桔華にとってはどうでもいい話だった。

「ほな、さよなら」

八重は20年ほどを共にした妹に暇乞いをすることもなく、玄関先であっさりと踵を返した。

桔華は低い勝手口の扉をくぐった。顔を上げると隣家の馴染みの顔を見かけたが、その顔は桔華から顔を背けるとそそくさとその場を立ち去って行った。

すっかり日の落ちた道は白く染まっており、また黒い空からはぼたんのような雪がばらばらと降っている。

ここにはもう、自分の居場所はないのだということとようやく自覚しながら、そういえば頼るべきところの一つも持っていないのだということにようやく思い至り、途方に暮れてしまった。

目指す先のない桔華は、降り止む気配のない雪をぼんやりと見上げながら、その場に座り込み、やがて眠気に襲われた。

ひどく疲れた。だけどようやく終わったんだ。

ここで死ぬか。まあいい。それも人生だ。

「桔華姉さん？」

上着もなく、降り積もる雪を払いのけることも忘れ、いつしか意識すら薄らいでいるところへ、桔華の真上から細い糸の様な声がおりました。

篠だった。

桔華は声を出すこともできずに篠の顔を見上げた。振る雪に黒い和傘をさして、幼いゆゑの手を引いてきたようだった。篠は白い地面に膝をつく、桔華を抱き起こし、その体に降り積もった雪を払った。そうして、桔華の頬に触れるとその冷たさに驚いたように身震いをして、立ち上がろうとした。

最上の人間を呼ぼうということらしいことを察した桔華は、ようやく篠の袖を引き、小さく首を振った。それみた篠は状況を理解したのか、ゆゑに傘を預けると桔華の腕を自分の方に回して抱き起こす。

「ゆゑ、先に行って桜花様にお湯を用意してもらって。それから替えの着物。くれぐれも桜花様以外の北条の人に見つかってははいけません。さあ、行きなさい」

ゆゑは小さな体いっぱいに頷いて、くるりと向きを変えて走り出した。

篠は桔華の体を引きずるようにして、雪の中を歩きだした。

北条の屋敷の裏口から入り、正面を経ないで桜花の部屋に回った。夜半九時を過ぎているので屋敷の中はひっそりとしており、桔華の来訪に気がついたふうもない。この屋敷には篠とゆゑ、そして祖母である桜花の他に、桜花の二男夫妻とその息子、つまり古月の次兄が暮らしているが、桜花の母屋は二男夫婦とは棟を別にしていて、こちらがわには古月と篠、そしてゆゑの世帯が暮らしている。といっても、古月は結婚してからもほとんど家にはおらず、篠が桜花の身の回りの世話を行的いて、別棟の本家とはほとんど生活を異にしている。

それにしても、いまや北条家の稼ぎ頭となっている古月と桔華の不義の話題が、かれらの蚊帳の外にあるわけがない。最上の義母や八重は「近所の評判になっている」と言っていたし、ならば北条の家が知らないはずもない。無論、桜花や篠が知らないわけではないのだが、それならばなぜ、と桔華は考えている。その小さい体で必死に桔華を桜花の母屋まで運び、ゆゑが先立って桜花に用意させた手ぬぐいをお湯でしぼり、冷え切った桔華の腕を、首を、体を、丁寧に拭いてくれた。部屋の中は灯芯のろうそくが揺らめいている。その暗がりに、篠の小さな丸い顔だけが、ぼんやりと浮かんでいた。

「最上の家も酷いですね、外套も持たせずに追い出すなんて」

篠の細い手から、体温以上の熱が伝わってくるような、そんな感じだった。外はまだ雪が降り続けているのかもしれない。音もない薄暗闇の部屋に、女が二人。男の妻と、その情婦。桔華は篠になんと言って切り出せばいいのか、奥歯を噛み切りそうな面持ちで言葉を探していた。最上の家を追い出され、雪の中立ちすくむ桔華に、声をかける隣人はいなかった。唯一手を引いてくれたのは、愛した

人の妻、そして大切な妹だった。

「姉さん？」

桔華の体が小刻みに震えていること、そして？がれた腕を握り返す手に力が入り始めたことに気がついた篠は、そうしていつものなにも変わらない、穏やかな顔を桔華に向けていた。桔華は何も言えぬまま、ぼろぼろと泣きだした。泣きだした自分にも腹立たしかった。言い訳の一つでも漏らせばいい、そうすれば、自分は篠にとって、最低な女として認識されるのに。

わかっていて、出来なかった。古月との思い出に蹴りをつけることも、篠に憎まれて生きること、今の桔華には決断できなかった。篠はしばらく桔華を見つめていたが、少しだけさみしそうな顔をした後に、やはりふわりと笑った。

「姉さん、私は、姉さんに感謝してるんです。三年前にここに嫁いできて、家事も、妻としての務めも、お付き合いも何も知らない私に、姉さんはたくさんのお事を教えて下さった。頼るべき人も見当たらない中で、姉さんは私に目をかけてくださいました。ですから私は、姉さんのことがとても大好きですし、どんなに素敵な方なのか、誰よりも存じ上げているつもりです。古月さんが、他の誰でも無い姉さんを選んだこと、私にはよく分かるのです」

篠は震える桔華の手を、両手でそっと包んだ。

「幼い頃より、古月さんも桔華さんもそれぞれのお立場で御苦労を重ねてこられました。そうして、その御苦労を、お互いがいちばん近いところで見えてきた。お互いがいちばんの理解者であり、そうしていつの日にか、かけがえのないものと思うようになった。それは人間の感情として当然のこと。それを誰が、見咎めることがありま

しょう。」

「篠さん、私は――」

「言わないで」

桔華の言葉をさえぎるように、篠は懇願のまなざしを桔華に向けてそう言った。

「後悔しないで。古月さんのお気持ちに偽りがなかったこと、貴方がいちばんご存じのはず。誰に何と言われようとも、決してご自分の気持ちを恥じないでください。今の古月さんを支えているのは、貴方から愛されているという自負なのです。どうかそれを、忘れないで」

そう言って、篠は少し小首をかしげて桔華を覗きこんだ。篠の目は本気だった。桔華を責めるでもなく、夫を咎めるでもなく、ただ眼前の事実が運命だったのだと、そう言って見せた。

古月への募る気持ちを誰に咎められようとも構わない。謗られても、辱められても、かれと深く理解し合えた自分を後悔しない。ただこの儚げな妹が、そのことによって傷つくことが桔華には耐えられなかった。いっそ篠に、足腰が立たなくなるまで罵られたらよかったのに。そうすれば後腐れなくここを出て、生きるも死ぬも己の思うがままにできたのに。なのに篠はこの雪の中、身寄りのない桔華を拾い、こうしてあたたかく迎えてくれる。夫を支える妻として、そして姉を慕う妹として、かれらが何を望み、そうしてこれから大事を成すために何が必要なのかを提示してくれる。

腕を伝う篠のひんやりとした手の柔らかさを感じながら、桔華は「いけない」と思った。いけない。このまま古月と関係が続けては

いけない。かれはこれから家族のために、会社のために、そしてこの日本のために、大きなことを成すのだろう。自分がその足枷になつてはいけない。篠が許してくれたとしても、自分がこれ以上、古月に関わってはいけない。

皮肉だった。篠の優しさが、却って桔華にそのことを強く自覚させた。桔華が顔を上げると、それを察したらしい篠が不安げな目を上げた。「行かないでください、姉さん」と篠は言った。

「京都を出なさい、桔華」

すでに夢の中にいるゆゑを背負って、祖母の桜花が部屋に顔を見せた。桔華は涙をぬぐい、姿勢を正して、桜花に深く一礼をした。

「桜花様、それはあまりにも」

「篠さん、あなたは黙っていなさい」

桜花はそうぴしゃりというと、ゆゑを起こさないように畳に降りし、自分の上着をかけてやった。そうして自分の書棚から京縮緬の雑記帳を取り出すと、筆をとり、すらすらと書きつけ、桔華の眼の前に差し出した。

「篠さんが何と言おうとも、貴方は人として生きる上で、許されない過ちを犯しました。それは、感情の面で純粹な想いとされるのだとしても、人間社会というコミュニティの中で生きるものには決して越えてはならない一線だった。分かりますね」

桔華は頷いた。無論だ。

「しかしだからこそ、あなたは何事に変えても大切にしなければならぬ想いを知った。この世の中の多くの女性が自分の望む道を歩

むこともできぬまま、妙齡になり親の決めた相手と結婚し、家に入り家を守り、子を産み、育て、そして死んでいく。桔華、あなたはそれに捉われることなく生きなさい。たくさんものを見て、多くの事を感じて、そうしてそれを大切になさい。あなたが信じた道を貫きなさい」

桜花はまっすぐに桔華を見据えて、澀みなくそう言った。桔華は静かに頷いて差し出された雑記帳を手にとった。そこにはひとつ、歌が書き記されていた。

——秋雅　咲き狂いにし　世の果ての　いざ立ち行かん　桜花
往生

「あなたの帰る場所ならここにある。祖母がこうして待っていてあげますから、いつでも帰っていらっしゃい。ねえ、篠さん」

篠は鼻を吸り、無言で頷いた。そうして桔華は、まだ夜も明けきらぬうちに北条の屋敷を辞した。

明治三十四年、晩秋。

こうして桔華は、女の身一つを携え全国放浪の旅に出た。

祭りのあとに(5) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

祭りのあとに(5)

いつのまにかうとうとしていたらしい。

桔華は、首の違和感に引き起こされるように眼を覚ました。雨戸に肩を預けるようにしてうたた寝をしていたため、身重の体重を預けられた肩がばきばきとなりそうだった。

玄関先から晴子の元気な声が聞こえる。「はい、これ、お願いね。よろしく願います!」

ようやく意識を覚醒させ、そちらに意識を向けると、今度は甲高い笛の音とともに子どもたちの元気な声が聞こえてきた。

やーれっさやれさ。やーれっさやれさ。

しゃんしゃんと鈴の音がして、太鼓の音が重なる。

店先で子供たちが舞を報じているらしい。桔華は身を乗り出してそれらを眺めた。商売繁盛を祈念したあと、ぱらりと米が撒かれた。子供たちの元気なあいさつの後、「やーれっさやれさ」の声が遠くになった。

「あら桔華さん。起きていらっしやったのなら、子供たちの『あい

さつまわり』を見せてあげたかったわ」

時節は九月二週。昨日から川内八幡社の例大祭である。普段仕事に熱心な街の衆も、明日までの三日間は襦袢に法被姿で神輿を引き、夜中まで街を練り歩く。

桔華が店先の縁側に腰を下ろすと、晴子が台所からお茶と砂糖菓子を持ってやってくる。今日は深夜まで山車が運行されるとかで、このまま店を閉めずに、のんびりを眺めているというのが晴子の提案だった。

八月を過ぎると桔華の容体は安定してきた。町医者にも少しであれば動いてもいいというお墨付きをもらい、「晴子さんに感謝することだね」と桔華に言った。桔華の腹は少し膨らんできたが着物の上からではまだ見分けがつかない。子供の鼓動を感じることもあるからと医者は言ったが、それも今のところ、まだ経験が無い。

京都の盆地の蒸し暑さを知っている桔華にとって、川内の夏はကာッととしていて過ごしやすかった。それでなくとも、晴子にむやみに出歩くなと厳命されている桔華は、風通しのよい屋内で大半を過ごしていたし、正面に見える陸奥湾から絶えず潮風が吹きこんできた。店と中庭の雨戸を開け放てば風が通り抜けるにちょうど良く、夏の日差しが照りつける様子を日陰で穏やかに眺めているうちに、暦の上は立秋を越え、処暑を過ぎた。

満州の荒野では日露両国の攻防が続いている。

三月までに清国旅順港では日本海軍による二度の閉塞作戦が行われたが失敗に終わった。国威が勢いを取り戻したのはその閉塞作戦が「失敗」として情報されず、部下を探して爆発に巻き込まれ戦死した、“杉野はいづこ”の広瀬大尉の武勇談であり、五月の鴨緑江での陸軍の勝利であった。緒戦の一勝といえど大国ロシアを相手に

「対等に」戦争という殺し合いをしているというよりもむしろ、40年前までは恐怖の対象でしかなかった諸外国と「対等に」渡り合えるだけの武力と国力を日本は持ちえたのだという、「気持ち」なのだとは思っていた。そこには、兵士ひとりの死という現実ではなく、血税をもって贖われた武器弾薬の漏音でもなく、ただ一等国民としての優越感のみがこうして国中を席卷しており、またそれらを顧みる己は恐らく、新聞雑誌で言うところの「国力減退の一助たる諸勢力」とでも形容されるのだろうか。近く、陸海軍合同による旅順総攻撃が実施されるという新聞記事を眺めながら、ぼんやりと仙台での出来事が頭をよぎるより前に、「初代左團次が亡くなったそうよ!『勸進帳』見てみたかったわあ」と晴子の声が飛んだ。

そういえば京都にいた時に一度だけ、九代目団十郎の『三人吉三廓初買』を見たことを思い出して、たいして印象に残らなかった舞台よりも鮮明に、祖母、桜花の横で鼻ちょうちんを膨らませていた古月の横顔が蘇ったのだった。ふわりと明るい気分になり、読んでいた新聞を折りたたんでそばに置くと、ピーひゃららと囃子の音がまた近くなった。そうしてまた、遠くなった。

陽が落ちる。潮風が肌を掠めると、かすかに寒気を伴った。晴子はそれを当然のように見こして、「冷えてはいけないわ」といって緋の羽織を桔華の肩にかけた。桔華が「ちよつと若すぎやしませんか」と苦笑すると「あらあ、女子はいつまでも若くありたいもの。そうでしょう?」と真顔で返された。桔華はやはり苦笑した。

折られた新聞の片隅に、桔華の選による地元青森の作家らによる秀作が並ぶ。毎週日曜日、タブロイド紙の四面、全面広告の最上段が第二文芸欄。一面には政府広報と最近は満州の時局、青森の市政、そして郷土作家佐藤紅緑による新聞小説、その挿絵。

桔華の選と短評は「女流歌人」の話題性も相まって評判は上々、

撰者の名は「菊」と名乗った。これは、短歌の師でもある桜花がつけてくれたものだった。桔華は父方の最上に引き取られる前の名前を菊といったが、当人はそれをとうの昔に忘れており、「それではあなたは今しばらく『菊』を名乗りなさい」と桜花に言われた時も、師が桜なら弟子は菊。皇室の花名をもらうにはいささか役不足の感があるけれどと思った程度で、後々になってようやくそれを思い出したという有様であった。当の桜花はそれを見越したうえで桔華に「菊」名を授けており、彼女の同人誌「のほら」で名を挙げている桔華の姉、玉津は、「清梅」という名を世間に通じていたのだった。当の玉津は「そんな置屋の娘みたいな名前は嫌、それよりも『桜花』の名前が欲しい」と例の無邪気さで宣ったというが、果たして桜花も例の如くにここにこしながら「嫌です、私の名前が無くなってしまいます」と答えたのだそうで、玉津の方も躍起になって名実ともに『桜花』を継ぐべく研鑽を重ねていると、当の桜花からの手紙に記されていた。

街道に面している和泉家の店先を、部落や船仲間たちの山車が流れていく。

山車は桔華が京都で見知っている、祇園会の大山車によく似ている。四つ車の上に金欄の幕が張られ、見上げる上に稚児と囃子方が数人いる。川内の山車には大漁旗や帝国旗なども掲げられ、京都のものより一回り小さく、また数も多くはないが確かに似ている。

やーれっさやれさ。

やーれっさやれさ。

「この囲み幕と見返りはね、京都の間屋から買い入れているんです。例大祭は寛永のころからあったと聞いているから、きっと上方の商人さんから、祇園のお祭りのことを聞いたのではないかしら。そうして、見様見真似で山車などこさえているうちに、青森や弘前のよ

うなねぶた人形でなくて、こういう高台のお山車になったのね」

陽が落ちると、先導する囃子方の提灯や山車の町内会協賛の札に灯りが張られ、一台、また一台と山車が過ぎて行った。山車を引く男衆の日焼けた赤い顔や鼻筋に赤い墨を入れた子供たちが、威勢のいい声を残していった。

「驚いた。まるで祇園さんのお祭りのよう」

「嬉しい。川内の人はね、この例大祭を本当に楽しみにしているのよ。そうしてこのお祭りが終わると、長い冬が来るの。だから、その前の景気づけみたいなのなのよ」

晴子はそう言って、笑った。いつものあの、見るものの心を穏やかにするあの顔だった。

「晴子さん」

「なあに？」

「聞いてもいいですか、お子さんのこと」

囃子の音は遠ざかりつつあり、りいりいと虫の声が聞こえていた。今夜は満月。店の軒先の祭りのあとの静けさを、月明かりが照らしている。

「たえさんから聞いたのね」

そう言って晴子はやはり笑った。

いつからかその顔を、桔華は「悲しい」と思うようになっていた。

「辛かったわ。自分が死ぬよりもずっとずっと辛かった。何よりも、彼らを産んであげられない自分を許せなかった。和葉さんの子を産

めない自分が憎かった。でもね、ある時思ったの。彼らは人間としてこの世に生れ出ることは無かったけれど、その魂は私と和葉さんの間に確かに産まれたわ。二人いるのよ。お兄ちゃんと、妹なの」

『辛かった』という晴子の言葉は、脇野沢での周囲からの風当たりなどではなくて、自分自身に向けられたものであった。自分が死ぬよりもつらい体験がどんなものか、今の桔華には想像もつかなかった。生まれた母が死んだときのことは、よく覚えていない。父や義母も、どこか親子以上の隔たりを感じているし、桜花も、年をとればいつかその日を迎える番になるだけだ。もし明日、古月や篠が死んでしまったら。そう思って、ようやく少し実感がわいた。胸の底がひゅうと冷たくなるような感じ。

ならばそれが腹の子ならば。ぼんやりと感情にもやがかり、消えた。俊承ならば？胸の奥で桔華は必至で首を振る。そんなの考えたくない。現実にあるからこそ、考えられない。

晴子はそんな桔華の心情を察してか、桔華の手をとり、それを腹にあてがった。晴子の手のぬくもりと、腹の子の鼓動が重なった。桔華はあつ、と思った。

「動いた」

「私にも伝わったわ。初めて？」

桔華は何も言えなくなつて、目を見張るようにして晴子に顔を向けた。晴子はやはり優しく微笑んで「元気そうね」と言った。そうして二、三度、桔華の腹を撫でた。

「生きている。それだけで十分じゃない、他に何を望むというの？」

晴子は穏やかな顔をしていたが、その言葉が桔華にはあまりに重く、そして鋭く突き刺さる思いだった。流されるままに生き、窮地

で人に助けられ、愛する人がいて、守りたいものがあつた。そうして今、貫くべき道――歌を見つけた。どうしてこれが報われない人生といえよう。何が疲れただ。何が人生だ。自分はいつも諦めてばかりで、そうして誰かの手が差し伸べられるのを待っていただけではないか。

「ねえ晴子さん、もし和葉さんが浮気したら、あなた、どうしますか」

不意に投げられた問いかけに晴子はあつと言って驚いて、「いやあねえ、あの人そんなに器用な人じゃないから」と前置きをして、こう言った。

「夫婦だもの。結婚するということはお互いがお互いの唯一のパートナーだという約束をするわけだから、それを破ったことに対してまず聞きますわ。そうして、それが単なる浮気心なのか、それとも私ではないその女性を人生のパートナーとして本当に愛しているのか、それを見極める。前者ならそれを含めて彼なのだから受け止めてあげるのが妻としての役目。後者ならばわたしは身を引くわ。かりそめであるなら、共に長い人生を送る意味がまるでないのだから」

「単なる浮気心なのか本物の愛か、それが分かる？」

「分かるわ。あの人のことだもの」

晴子はそう言って桔華の顔を見はしたが、それ以上深く追求することは無かった。古月とのことは、晴子には話していない。祖母が同じ従兄なのだという話をしたが、今の問いかけが果たして晴子に何を感じさせたのか、桔華に推し量るすべはなかった。ただ、篠があのとき自分を庇ったのは、晴子のいう「それを含めてかれのすべ

てを受け入れる」という意思表示だったのだろうか。篠は古月の一番が桔華であるといった。それを知って尚、篠は別れ話を切り出さなかったとすれば、悠長な男女の感情にされるがままに過ごしてきた古月や桔華より、自分の興入れが何を意味するのかを自覚し、かつ彼の妻たらしとする桔華より5つも年下の彼女が、冷静に現実を見つめていたのだということになる。

篠の事はとても大切に思っていた。儂げな彼女は、桔華にとって妹であり、自分が守ってやるべき相手でもあった。

それを裏切って尚、妹は姉を庇ったのだ。夫と姉がどういう人生を歩み、惹かれあったのかを死ぬような思いで理解し、そうして古月の本質を知っていたからこそ桔華を引きとめたのだ。もし桔華から古月に別れを切り出せば、かれはその感情を引きづり、仕事や家庭にも影響を及ぼすのだろう。何百という社員を預かる社長だからこそ、個人の損得でものを考えてはいけない。だから何事もなくいままでのように暮らすためには、現状を維持することが最も望まれることであると。

愚かなのは自分だった。大切に思ってきた妹は、自分よりも遥かに立派な女性であり、妻であり、母であった。

桔華は消え入りたいほど打ちのめされていた。それすら自覚することもなく、いままでのうのうと生きてきたのかと。古月への気持ちを買けと、舌を噛み切るような思いで宣った篠をまたしても裏切り、また流されるままに守りたいものと出会ってしまった。腹の中にいる子どもは、自分が母親である限り、父親を知ることとは無いのだろうと桔華は思う。いちばん大切な人は古月。それ以外にはありえないから。絶対に、あり得ないから。

——わたしは、桔華さんが好きです。

俊承の逞しい顔がこちらを見ていた。出会った当初の、純粹で優しいだけの彼ではない、民族の使命を自覚した、一人の男の顔だった。

もう何年も昔、遙か長い年月がたったようにも思う。

しかし実際、それはわずか四カ月前の話。

目を閉じ、俯いていた桔華は腹の底の鼓動を感じつつ顔を上げた。ほかでもない晴子に聞いてもらいたい、そしてこれはおそらく、桔華の人生で初めて己が選択した道なのだということを、確かめたかった。

「この子の父親の名前は柳俊承^{ユ・スンジョン}、朝鮮半島出身の北京からの留学生でした」

訥々と語り始めた桔華の顔を見つめて、晴子はじっと、桔華の話す言葉の一つ一つを噛みしめているようだった。

「どうしようもない力が、名も無き多くの市民の命を奪い、そうしてそれに呼応するように立ち上がった若者たちがいます。晴子さん、聞いてください。私は、彼らの力になりたいと思った。そうしてそれは、今私が生きるための、とても大切なものになりつつあるのです」

祭りの囃子と男衆の声が、遠くなりつつある。

思えばあの夜も満月だった。

月明かりの下に女が二人。夜風が過ぎ、庭の薄がさらさらと鳴っている。

裏切りの祖国（1）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

裏切りの祖国（1）

才人が仙台拘置所に抑留されているという連絡が桔華たちの下宿に入ったのは、五月をわずかに数日過ぎたばかりの、夜半過ぎのことだった。

春以降は夕食にも顔を出さなくなっていた才人であったが、女将には「同郷の友がこちらにきているから、彼らと昔話などをしているのだ」と話していたという。最近は夕飯時の清国出身医専生の数が少

なくなつたと桔華は思っていたが、朝食までには戻ってくるし、特段意中にはしていなかった。ただ、俊承は夕食時にはとくにむづくれたような顔をしていて、

「どうしてわたしを連れて行ってくれないんだろう」

とでも言いたげな不機嫌な表情を常にしていた。しかし朝などにはきちんと才人と向き合って飯を口に運んでいたから、本人に聞いたのだとしてもおそらく、もっともらしい回答を持って俊承を宥めたに違いない。夜になるとやはり俊承はむっつりとした顔を食堂にぶら下げてやってくる。そんなことが一カ月ほども続いた、そんな時であった。

「とにかく話を聞いてこなければならぬから、桔華さん留守番を

よろしくね」

日付が変わる時間帯、五月の仙台はまだ冷え込む。女将は出がけにコートを桔華から受け取り、玄関に手をかけた。すると後ろから声が飛んだ。

「才人が逮捕されたというのは、本当ですか」

俊承だった。普段の穏やかな声ではあったが、それに加えて人を引きとめるだけの気迫というものが混じっている、とそのとき桔華は思った。

「まだ未確定よ。李君が警察に連行されている一団の中に才人がいると言っていたの。いつもより帰りも遅いみたいだし、とにかく行ってみるわ」

そういつて玄関を半分開きかけたところで、また俊承が声をかけた。

「女将さんはここにいてください。心当たりがあるのでわたしが行きます。そして、もし警察がここに来て何か聞いても、女将さんはわたしたち留学生の下宿を提供しているだけで、何の関係もないのだと言ってください。では行ってきます」

俊承は女将が止めるのも聞かず、女将を押しつけて玄関を出た。

桔華は女将に念を押して、とっさに俊承の後を追った。

夜風が肌にやけに冷たかった。

桔華にも心当たりはあった。

先日、日本軍の満州侵攻の記事。

三月には旅順港の閉塞作戦に失敗した日本軍であったが、黒木大將率いる第一軍と白河川大將率いる第四軍の挟み撃ちにあったロシア軍は、緒戦に敗北を喫している。先日の記事は作戦に勝利した日本軍が長城を越えて清国領土に進軍しているというもの。その傍らにいたのが、平服の清国人。無邪気に旗を振っている。

桔華は日本語を話す日本人であり、領土の小さな島国である日本が、大国ロシアと対等に戦争をしているのだという一国民としての自覚がないのだといえバウソになる。日本軍の優勢が伝えられる度に仙台の城下町に号外が舞い、各所で歓声が上がった。当然、桔華もそれに同調した。「国家」や「帝国主義」なんて言葉はよくわからないけれど、自分の属する国の軍が、戦いを有利に進めているのだ。悪く思う理由もない。

しかし先日、日本軍快進撃の記事に難色を示した俊承と才人を目の当たりにして、これはそんなに単純な問題ではなかったのだと思いなおすようになった。戦っているのは日本とロシアという国であっても、主戦場は朝鮮半島であり、清国領土内である。しかも両軍はその領土をさも自らの利権であるかのごとくに緒戦の勝利とともに領有し、記者に自国軍の勝利を寿がせる写真を撮らせた。清国民は自ら銃剣を以て戦うこともなく、列強に食い物にされている事実をこれほどまでに痛快にあらわしたものはないだろう。

当然、清国民である才人はそれを自覚した。だからこそあれほどまでに怒ったのだ。もし北京にいるままであれば、西太后の息のかかった官吏に、事実誤認の情報を流され、世界的立場から俯瞰した清国というものを知ることは無かったであろう。それに、大の西洋

嫌いである西太后は、北京市内の「新聞」の発行を認めていない。清国内にあっては一般国民が国内外の出来事を知る術などたかが知れていた。

才人は普段、物静かで感情を表に出すことは少ないが、日々報道される新聞記事を読み、明確な外交方針もないままに次々と欧米に不平等な条約を結ばされ、領土を分割されていく「祖国」を憂いていたであろうことは明白だった。ならば最近の夜の行動も察しが付く。憂国の同郷らと日夜論議を交わしていたのかもしれない。折しも、桔華も先日、一時清国公使館に拘留され、清朝打倒活動の必要上「1870年11月、ハワイのマウイ島生まれ」扱いでアメリカ国籍を取得した孫中山の新聞記事を目にしたばかりだった。

ようやく拘置所にたどり着いた桔華は、俊承と看守のやり取りが飛び合うのを聞いた。

「ここに周一樹がいるのは確かなのですね！」

「刑が確定するまで、面会は出来ん！」

「才人が何をしたっていうんですか！」

「貴様、奴らの仲間か」

俊承も自分の素性を明かしたのだと桔華は判断した。今日日本国内の空気は、半島出身者への民族的優越感が広がりつつある。

桔華は今にも掴みあいが始まりそうな二人の間に割り入って、俊承を背中で制し、できるだけ感情を抑えて看守に対面した。

「わたしは、かれらの日本での世話を申しついているものです。

北京にいるご家族への連絡等もごきますから、まずは当人と話をさせていただけませんか」

看守は桔華の顔を何やら検分するように眺めていたが、桔華の方が先に「最上桔華と申します。生まれは京都、今は職を得て仙台に」と言った。看守の方はどうやら桔華のいうことには嘘偽りはない――彼女が日本人であると納得したようだったが、もう一度ふんと鼻を鳴らして、再び怒声を荒げた。

「できぬといったら出来ぬのだ！貴様が奴らの仲間でない証拠がどこにある」

「大切な仲間です！幼いころから共に育ってきた兄弟です。才人が人を傷つけるようなことをしないことはわたしが一番知っています！」

桔華の肩越しに身を乗り出してきた俊承をさらに抑えるように、桔華は続ける。

「では、どうすれば本人と対話ができますか」

「刑が確定してからだ」

「かれはどんな罪を犯したのです」

看守はふんと鼻を鳴らし、少し身を引いた。

「街宣騒擾、及び讒謗律条例違反容疑だ」

がいせんそうじょう、ざんぼうりつ。桔華は自分の記憶の中の法

律の知識をようやく引き出しているその時、俊承が後ろで声をあげた。

「その通り、日本は多くの先進国がそうであるように、立派な法治国家です。ならば『疑わしきは罰せず』。違いますか」

看守はちよつとあっけにとられたようであったが、我に返るとまた顔をしかめ、「貴様ら、いいかげんにせんと連中と連座させるぞ」と身を乗り出してきた。

「何の騒ぎだ」

若い将校だった。看守はその姿を確認するなり、直立不動に敬礼を掲げ、「お勤め、ご苦勞様であります！」と齒切れよく宣った。

将校は踵をそろえ、返礼する。四〇歳を過ぎているだろう下腹の出張っている看守よりも随分若く、桔華はもしかしたら自分よりも若いのではないかと思ったほどだった。

「先日の清朝革命派による騒擾事件の犯人を連行しましたところ、その仲間を名乗る二人が容疑者の一人に面会を求めてきているのであります」

「清国人か」

「それが……」

将校は軍帽を脱ぐと桔華と俊承に歩み寄り、まずは小さく一礼した。

「わたしは帝国陸軍仙台第四連隊付補佐官黒澤修吾中尉。東北憲兵

隊司令部長が任務に付き不在のため、代理でこちらの官舎を預かっている。用件はなにか」

桔華は軍人というものに抱いていた偏見を随分改めた。見ず知らずの自分たちに、まずは自らの正体を明かし、こちらの要件を改めてくれた。この人になら話を通じるのではないかと思った。

「大切な友人がここに連れてこられたと聞き、居てもたってもいられずにこちらまで参りました。かれが法を犯すようなことをするとは思えません。ですからまずはかれに、何があつたのか聞くべきだと思います」

俊承は黒澤にまっすぐと相對し、そう言った。感情をぶつけ合っていた先ほどとは違う落ち着きだった。どうやら俊承も、この黒澤という若い将校と話をしてみようという気になったらしかった。

「憲兵隊は、無実の人間を連行することはない。貴様の言う友人が本当に何もしていないのなら、ここにくる理由は無い」

「それを確かめます。才人に」

黒澤は俊承の顔をじつと見つめていた。そうしてふと視線を桔華にそらして「あなたは」と言った。

「日本人のようですが、貴様は」

俊承は少し躊躇い、しかし表情を引き締めて言った。

「清国人です」

桔華はあつ、と思った。その問いかけは、俊承にはあまりに無情だと思った。

「そうか」

黒澤は是とも非ともいえないような間の後にそう、無感情に返事をし、官舎に振り返った。

「『疑わしきは罰せず』だったな。なるほど、一理ある。憲兵隊の判断が間違っているとは思えないが、それならば本人に確認してみるといい」

黒澤は看守に声をかけ、官舎に向かって歩き出した。

コンクリートの床に、軍靴の音が甲高く響いた。

俊承の顔を見るより早く、桔華は黒澤のあとを追う。俊承もそれに続いた。

「桔華さん、なぜ来たんです」

ずんずんと進む桔華に、俊承が後ろからそつと声をかけた。

「ほおっておけないからに決まっていますでしょう。あなたこそ、才人にあってそれからどうするか考えているのですか。黒澤という軍人のいうとおり、何もしていない異国の留学生に憲兵が手を出すとは思えませんよ」

桔華は心の中で必死になってこの状況の打開策を練り始めていた。まずは才人本人の口から事情を聞くこと。彼が自らの無実を訴えるのなら、桔華は全面的にそれを支援するつもりだった。たとえば北条や桜花の名前を出してでも助け出す。しかし問題は、才人が自らの罪を認めた場合だ。

「……おそらく才人は、清国革命派と同調して、新聞や出版物などの言論機関を通して国内改革の必要性を申し述べたのだと思います。確かにそれ自体は日本の法律に違反するものではありませんが、十年前の日清事変以降、清国と日本は形上国交があることになっていますから、清国の改革を叫ぶ分子をほおっておくわけにはいかない。そしてその革命派は、アメリカの孫中山が東京にいる若い連中を支持して、一大勢力を作ろうとしています。帝国政府は、北京からならかの助力を請われているはずです」

「つまり、才人は日本にとっては無害ではあるけれど、清国内では危険人物にあたるから、それを国外にいるうちにどうにかしてしまおうという力が働いているということ？」

「おそらく。そして、日本に無害というのは、今のうちだけです。日露戦が落ちついたころ、昨今の列強の領土分割に反対する、何らかの民族運動が大陸を席卷するでしょうから、かの国にとって日本が列強の一部とも看做されかねない」

「どっちにしろ、革命派とやらは日本にとっては都合の悪い存在ということね」

俊承は答えなかった。いつになく神妙な顔をして、何かを考え込んでいるようだった。

俊承にとって日本は敵なのだろうか。ならば日本人である自分は――？ 桔華はそれを聞いてみたいような気がしたが、その場では押し黙ることにした。それよりもまず、才人に事情を聴くことが先決だ。

桔華と俊承は小さな子部屋で待たされた。看守が才人を連れてくるとかで、黒澤も部屋にある質素な椅子に腰を下ろした。将校と空間を共にするのは桔華にとっても初めての経験で、なんだか落ち着かないような気もしたが、俊承は大人しく椅子に収まって神秘的顔をしていたし、黒澤も腕を組んで目を閉じたので、桔華も意識して心を静め、俊承の対面に座った。小さな机に椅子が3つ。机は立てつけが悪いようで体重をかけると、ぎしっとゆがんだ。

一秒がこんなに長く感じたことは無いと思った。向かいに座っている黒澤も俊承も、お互いの思索の中に入り込んでいるようで、桔華が声をかけられるような雰囲気ではなかった。とにかく自分も、才人がこんなところに拘留されているのは何かお間違いだと思っていたかったし、実際そうであるのだと信じたかった。先ほどの俊承とのやりとりや、先日の才人の苛立った様子、この前の花見のことなどを思い出すうちにどうにも感情に収まりがつかなくなってきた。そうしてがばっと顔を挙げた時に、看守が両手に拘束具をつけた才人を連れて部屋に入ってきた。

がたっと椅子を倒して立ち上がる俊承。桔華も声をかけようかと立ち上がったが、俊承に先んじることはできないと思いとどまった。才人は2人を見ても大して感情を現さず、いつもの静けさを纏ったままだった。いつものままのかれが、先に口を開いた。

「干什？来了（何しに来た）」

「那是正是是？？的台？，？做什？的！（それはこっちの台詞だ、お前こそ何をやったんだ）」

普段、桔華の前で漢語を話すことのない二人が、臆面もなく自分の祖国の言葉で話し始めた。黒澤は後ろで黙って聞いているようだった。看守は言葉を理解できないようだ

った。桔華は、二人のやり取りの雰囲気から、事情を察しようと神経を集中させる。

「？于？？系没有（お前には関係ない）」

「不可能？系没有！有什？，女主人先生也担心着。什？？儿？。？情况，返回（関係無いわけがない！何があった、女将さんも心配している。何かの間違いなのだろう。事情を話して、帰ろう）」

そうまくしたてた俊承をじっと見つめて、才人はやはり静かに言った。

「假如先解放同志。我？只叙述了理想。国家？覆的意思等没有（ならば先に同志を解放しろ。われわれは理想を述べたのみ。国家転覆の意思などない）」

俊承が言葉に詰まった。芳しくない回答を得たのか、と桔華の心がざわついた。

「いったい、何を話している！」

看守がいら立ちげにそう吐き捨てた。俊承は不安そうな顔を看守に向けたが、才人は黙って下を向いた。

そのとき、黒澤が静かに立ち上がった。

「山井、例のものを持ってきてくれ」

看守は敬礼を返すと足早にその場を立ち去った。黒澤は俊承に肩を並べ、才人に相対した。

「？个男人？了？的事是重要的朋友。？？来？？个男人不是朋友是不是（この男は貴様のことを大切な仲間だと言った。お前にとってこの男は仲間ではないのか）」

黒澤は流暢な漢語で才人にそう問うた。才人はそれが随分と意外だったようで、黒澤の顔を見、そうして少し視線をはずして「那……（それは）」と言葉を濁した。

「朝？人没有清国的革命？系。是不是那？的事？（清国内の革命に半島出身者は関係無い。そういうことか）」

俊承が凍りついた。

黒澤が才人に何を問うたのか、桔華にも察しがついた。

才人は黒澤をずっと見つめていたが、ふと瞼を伏せ、そうして静かに続けた。

「不同。作？是？？那？，考？清和朝？？在，把内政改？，与？外国只是？等的交？在有必要？了的力量的点，一？志向的？西。没向同志引？是俊承，我的个人的理由（違う。仮にそうだととして、清と朝鮮は今、内政を改め、諸外国と対等に渡り合うだけのための力を必要とする点で、志を同じにするものと考えている。俊承を同志に誘わなかったのは、俺の個人的な理由だ）」

看守が戻ってきた。その手には三日前の河北新報。

黒澤はそれを受け取り、手早く街頭のページを開くと、それを才人に差し出した。

「これは、貴様が書いたものだな」

俊承と桔華が記事を覗き込む。そこには『眠れる獅子の黄昏』と題された才人の署名記事が掲載されていた。

我が清国は、夏王朝よりはるか四千年にわたる長き歴史を持ち、その連綿たる歴史の中、秦始皇より「皇帝」と「人民」の明確な区別の下、多民族国家として成立してきた。しかるに昨今の諸外国の発展や著しく、長く「皇帝」として崇め奉られる立場にあった者に対等な外交という選択肢がない。今こそ英仏に倣い、広く国政を人民に開放し、真の民主国家となるべき時だ。

要約すればこのようなものだった。

「まったくもって、けしからん」

発行した新聞社の連中も同罪だ、と看守は腕を組んで鼻息を荒げた。紙面を手俊承はそれを何度も何度も読み返しているようだった。才人は目を閉じて俯いているし、黒澤はそんな才人の様子を伺っているようにも見えた。しかし、と桔華は思う。

「黒澤中尉、これは今の北京政府を直接非難したものではありませんね。読み方によっては、『国力を上げるために、議会を開設し、広く人民の意見を聞いて世界の情勢を顧みよう』という意味では。それは清国にとってもいいことのような気がします。国家転覆とす

ぐには結び付かないと思うのですが」

黒澤は桔華に視線をやる。彼が口を開くよりも先に、看守が怒鳴った。

「馬鹿もの！こんなものも分らないのか！民主制とはすなわち、帝国政府への明確なる批判！シナの政府のみならず、こやつ、我が帝国政府まで否定しおったのだぞ！」

耳が裂けるかと思うほど大声でどなられて、桔華はちよつと身震いをした。俊承は相変わらず紙面をぼんやりと眺めている。

「間違いないな」

「間違いありません。しかし、わたしは祖国のこれからを考え、そうして世界の先例を鑑みてこの結論に至ったのです。北京であろうが漢城だろうが、施政者が自らの利権保持を優先し、人民の国益を損ねるようであれば、武力革命も辞さない考えです。わたしはそれを間違っているとは思わない」

才人は射るような視線を見る者にさし向けながら、そう日本語で答えた。看守がいきり立ち、黒澤がそれを宥めた。

桔華は、胸の底がざわざわとした。才人が間違ったことを言っているとは思えなかった。暴力に賛同はできないけれども、看守の言うとおり、民主国家は政府や皇室の影響力を弱めてしまう装置なのだと教えられてきたし、その認識がおかしいと感じたことがいままでなかった。しかしもし、人民を先導すべき「政府」が、間違った方向に進んだとしたら。いや、すでにもうなにかがおかしくなっていて、「上に従っていれば何も間違うことは無い」「それが正義だ」と、わたしたち国民が思いこんでいるのだとしたら。

桔華は、背筋に何か寒いものが走るのを感じた。才人が破り捨てたあの日本軍の行軍記事を見たあのときと同じように。

「そういうことだ。従ってこの男を釈放することはできない」

「待ってください！ですから、意見を申し述べただけで何も本当に蜂起しようとしたわけでは」

桔華が黒澤に食って掛ろうとしたところに、俊承がぽつりと才人の名前を呼んだ。

「？、什？是个人的理由？（ねえ、個人的な理由って、なに？）」

俊承の視線は紙面に落ちたままだった。黒澤の胸倉を掴んだままの桔華は、黒澤に通訳しろと目で訴える。しかしかれも、才人の答えに意識を向けているようだった。

「春陽」

俊承は初めて顔を上げた。黒澤は相変わらずこちらを見てはくれなかったが、桔華は確かに「チュニャン」という名前を聞いた。

「そっか、わかった」

才人は桔華を呼んだ。看守は俊承から新聞を奪い取るとそうそうに去れとのたまっていた。黒澤に反応を伺えば、その眼が二人の対話を肯首していた。

「わたしに何かあったら、部屋の引き出しの右下、エンゲルス全集の裏表紙に挟んである手紙を、俊承に渡してください。でも、それ

までは決して、あの男には見せないでください」

「わかりました。拘留、長くなりそうならいろいろ差し入れますから」

「ありがとうございます。いつも、ご心配をおかけしてすみません」

看守は時計を見るなり「時間だ」といって才人を再び促し、向きかえって黒澤に敬礼し、部屋を出て言った。部屋には、何やら不安げな顔をした俊承と、相変わらずむっつきりとして表情を崩さない黒澤と、結局才人に何をしてやることもできなかった桔華、三人の重苦しい空気だけが残された。

「一週間後、春日宮殿下の行幸がある。おそらくそれまではここに留めておくことになるだろう」

「皇室の御行幸？」

「先日、満州で『黒擲隊』の部隊長として戦死された少将閣下のご出身が、仙台でな。戦時下故、陛下が帝都を離れるわけにはいかなことから、代わりに弟君というわけだ」

「もうひとつ。あなたはどうして、わたしたちと才人を会わせてくれたのです」

ふと、俊承が顔を上げた。黒澤は相変わらず無愛想な顔をしているが、桔華には聞き取れないような小さな声で、ぽつりと言った。

「我的妻子是中国人……（俺の妻は、中国人なんだ）」

裏切りの祖国（2）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog135.fc2.com/>

裏切りの祖国（2）

一週間はあっという間に過ぎた。

桔華はふと、発句のために向かっていた筆を止めた。夜半過ぎ。俊承が帰ってきたらしい。

才人との面会の後、俊承と留学生仲間たちは、彼とそれに連座したもののたちの釈放を求め、方々へと走りまわっているようだった。「ようだった」というのは、彼らが日本人に対する感情に濁りを持ち始めているのを感じ始めていた桔華は、それらに同行することを憚っていたためだった。留学生が女将や桔華に向ける笑顔は以前と変わることは無かったし、女将や桔華も以前となんら感情の変化が無いことは事実だったのだ。しかしかれらの「日本」という国そのもののへの感情は、才人の一件以来、確実に悪化しているようだった。

日露間の戦争が勃発した当初、日本はその戦争経費を集めることに非常に苦慮した。

10年前の清国との戦争の時は、臨時国債を大量発行し、戦後の平和条約で相手国から大量の賠償金を勝ち取ることができた。しかし今回は、大国清を倒した経験があるとはいえ、それをしのぐ大国、ロシアとの戦いである。ほんの数十年前まで鎖国をし、急ごしらえの近代兵器で大戦に望んでいるという風評の極東の小国に、外債を望むのはほとんど神頼みに近いものがあった。

それを担当したのが、後首相ともなる高橋是清である。ただいまより約半年前、彼はイギリスにいた。アメリカをはじめとする各国に日本への援助を断られ続け、八方ふさがりとなっているところに、かれの秘書である深井という男が、ある日本人商人を連れてきた。この男が、現北条商会会長、北条古月である。古月はイギリスへの販路を広げるための人脈をつくっていたのだが、その途上でユダヤ人の富豪・ロナルド・シフという男と知り合った。この男が大のロシア嫌いで、ロシア国内のレジスタンスらにも裏口援助をしているという話で、古月はそこに目をつけた。日本はロシアを交戦している。極東で善戦すればモスクワの警備は手薄となり、革命派も運動が効くようになるのではないか。

シフはその話に乗ってきた。古月は深井を通じて日本側の特使である高橋にシフを合わせた。高橋の人柄もあって交渉は成立した。結果的に、日本の戦費のうち6割を外債に頼ったが、その8割をシフが出資した。

明治37年5月の段階で、日露の戦況は、均衡から日本有利に進み始めている。こうしてはじめて、各国がロシアの内部事情等を考慮しつつ、少しずつ日本に出資を始めたのだった。

清国はその主戦場として満州の領土を侵されながら、あくまで局外中立の立場を貫いている。北京政府は外国の攻防よりも、内部の思想統制に政局の重きを置いていた。00年の戊戌の政変以降、西太后は自国の軍備を増強することで、国内の不安分子を排除しようとしたのだ。よって、彼女のやり方に異を唱える者は、例えば皇帝であろうと排除した。

「おかえりなさい。晩御飯ご用意しましょうか」

俊承は帰ってくるなりどかりと机に向かい、書物を広げた。あの日以来、俊承は才人の読んでいた書物を片っぱしから目を通していきるようだった。

朝も、医専の学生たちよりも早く、宿を出ていく。疲れているはずなのに、桔華はこの1週間、俊承の休んでいる姿を見たことがない。

「ありがとうございます。握り飯にしてくれますか」

桔華は梅の握り飯に沢庵とあつものをしつらえて、俊承の部屋に持ってきた。かれの傍らに置くと、俊承は「ありがとう」と言い、書物から目を放すことなく、握り飯を口に運んだ。桔華はそこに座ったまま。俊承の部屋の周りは、読み散らかした新聞や書物で溢れかえっていた。

「気持ちは分かりますけれど、少しはお休みにならないと。このままでは体がもちませんよ」

書は中国語で書かれており、『革命軍』という表紙以外、どんな内容なのかまで桔華には分からなかった。恐らく、俊承もこれらの書物の意図しているところを理解するのが本意ではないのだろう。かれが知りたいのは、才人が何を見ていたのかということであり、何を考えていたのかということだった。

「わたしは大丈夫です。桔華さんも早く休んでください。起こしてしまい、ごめんなさい」

俊承は書物から目を離さなかった。桔華は、揺らめくロウソクの灯りに照らされた俊承の横顔を眺めながら、胸の奥が疼くのを感じた。才人のこと、桔華にとってもショックであった。半年といえど、

寝食を共にした仲間だと思っていた。幼いころから一緒に育ったという俊承なら尚更だろう。才人はこのような結果になることを分かっている、同郷の知人らの代弁者となったに違いない。そうして、幼いころから共に学んだ俊承は、恩人の息子であり、自分の唯一残された家族を任せられる唯一の存在であつたに違いない。だからこそこのようなことに巻き込みたくなかつたのであり、それを貫こうとしているのだろう。

染み入るほど才人の気持ちは理解できた。だけど、と桔華は思う。幼いころから共に学んだ才人に「仲間はずれ」にされた俊承の気持ちは、おそらく才人や桔華には分かるまい。才人が俊承に望んだものの、そのために選ばざるを得なかつた現実。それが理解できて尚、俊承のくやしさを、桔華に推し量る術は無い。

部屋中に散らばつた才人の書物を拾いながら、いつまでも書物から顔を上げない俊承の後ろ姿が儂く見えた。同時に、今までの彼に無かつたなにかが、そこに影を見せていた。才人だけではない、俊承もどこか遠くへ行ってしまうのだろうか。そんなことを考えて、桔華は小さくため息を付き、そうしてまた、書物を拾い始めた。

夜更け、時計の針は二時を過ぎたあたりだった。

1階の裏口をけたたましく叩く者があつた。女将が不審そうに声をかけると、外から潜めた声がした。

「黒澤と申します。最上さんか柳君に至急取り次いでもらいたいのですが」

女将が返答するより早く、上着を羽織つた桔華が二階から降りて

きて錠を外し、扉を引いた。

「何かあったのですか」

「急を要します。柳君は……」

「わたしも行きます」

桔華が振り向くと、そこに俊承がいた。二人は不安そうな顔を向けてきた女将に心配ない旨を告げ、黒澤に従った。暗い小道の闇に寒気が落ちていた。黒澤は人目につかないよう、かつ目的地までの最短の道をとっているようだった。かなり早く走っていたので桔華は何度も着物の裾をつっかけそうになった。

嫌な予感がした。皇族の行幸は、たしか今日だ。

皇族の旅先で、なんらかの不祥事があってはいけない。不安の種は、どんな小さなものでも摘み取らねばならない。

おそらく、才人はその不安の種の一粒と看做されたのだ。才人だけではない、騒擾罪で捕まった留学生だけでなく、思想犯、殺人犯、犯罪予備軍の粛清に入ったのだろう。

桔華の予測を裏付けるように、鈍くくぐもった銃声が聞こえた。

どん。

どん、どん。

どん。

規則的に聞こえる音。胸の奥を搔き穿られるような思いを噛み殺しながら、桔華は黒澤と俊承の後を追った。想いが辛すぎて俊承の背中が見えなかった。

黒澤が急に立ち止まり、桔華は俊承の背中にぶつかつた。おもわず出た悲鳴の口をふさいで、こちらを振り向いた黒澤の声を聞きとるのに神経を集中した。

「すまないがおれはこれ以上案内できない。その角を曲がれば目の前に大きな河川敷があるから、その下だ。行くも行かないもあんなたちの自由だ」

「黒澤さん、ありがとうございます。わたしは行きます」

そう言うなり、俊承は走り出した。桔華は俊承を止めたかったが、意を決して自分も走りだす。とたん、黒澤に引きとめられた。

桔華は驚いて振り返った。黒澤は以前と変わらぬ、表情の読み取れぬ顔をしていた。

「あんた、あの男に惚れているのか」

こんなときになんて話を切り出すのだ、と桔華は半ばあきれ、開いた口がふさがらなかった。

「惚れていますか、何か！」

桔華はそう言い捨てると、黒澤の手を振り払い、俊承の背中を追った。黒澤は追ってこなかった。

目隠しされ、後ろでを縛られた罪人が布団のようなものを掛けられた小銃を後頭部に突き付けられ、鈍い音とともにその体が倒れると、二人の憲兵に体を支えられ、背骨にもう一撃入れられ、そうして橋下へ引きずられていった。桔華が確認できただけでも五人ほどの死体がそこには積み上がっていたし、刑殺されるのを待つだけの囚人らしき人間が三人ほど見えた。

月明かりのシルエットだけが見えている状態ではあったが、その囚人の中に才人がいるのが分かった。俊承もそれを見つけたらしく大声を出そうとしたところを桔華が後ろから組みついて芝生の上に押し倒し、もがく俊承を抑えつけた。何人もの憲兵が、小銃を構えて見張りをしているようだった。その上で人目につかぬ場所を選び、人目につかぬ方法で罪人を処刑しているのだった。

桔華はそれを直視するのが怖かった。そしてなんとも歯がゆかった。今自分たちが飛び出して行って、場を混乱させれば才人を逃してやれるだろうか。いやしかし、才人を逃したとしても俊承を無事にそこから逃してやれるとは限らない。もし自分が殺されて彼らが助かるのなら、よろこんでここから飛び出してやろう。そうしてさんざんに暴れて、何かがおかしい、何故気付かぬとのたうち回って、花筐のように憐れまれ、そうして死ぬのも悪くない。だがもし自分が才人の立場だったら。大切な友人の前途を不安にしまで、自分を救出してほしいとは思わない。少なくとも桔華の知りうる才人は、俊承に対して肉親以上の、いや、自身の身以上に儂く、大切に思っている人間だった。

またひとつ、動かなくなった体が運ばれていった。目隠しをされた才人がどんと背中を突き飛ばされ、膝をついた。頭をぐっと地面に押しつけられた。その頭に小銃が向けられ、厚い布が被せられた。

俊承は桔華の下で必死になってもがいていた。俊承は桔華の腕をかじり、足をばたつかせて折れそうなほど腕に力を込めていた。桔華は腕に引きちぎられるような痛みを感じながら、自分の体の端々が、いや、古月との不倫を篠にひた隠しにしてきた辛さとは比べ物にならないような、心の蔵を直接えぐり取られるような心持で俊承の抵抗に耐えていた。桔華の胸の下では、俊承は叫びにならない叫びを上げていた。それでも桔華は俊承の頭を抱えて、その場から動こうとしなかった。のどがひゅうひゅうと鳴った。終わるな、終わらないで、誰か助けて……！！桔華も声を噛み殺しながら、「その瞬間」を待った。

先ほどまでの規則的な銃声から、一音があいた。
桔華は縋るような想いで顔を上げた。

目隠しが取れたらしい才人がこちらを見ていた。二人に気がついたらしかった。

あつ、と桔華が思った瞬間に、銃弾は才人を貫いた。続いて例にもれず背中にもう一発撃ち込まれ、動かなくなった体は橋の下の残りの元に引きずられていった。

桔華は全身から力が抜けた。彼が今、眼の前で訳も分からぬ罪を以って殺されたことがすぐに理解できず、どうして、どうしてが何度も桔華の頭の中を反芻した。俊承も抵抗を止めた。二人の影は闇にまぎれ、動かなかった。

心に冷たいものが吹きこむのを感じながら、真っ白になった頭に、微かな嗚咽が聞こえてきた。まだ十分とは言えない働きしかしていない脳をわずかに動かせば、桔華が組み伏せた下で俊承が静かに涙を流していた。

「春陽」

俊承は涙を必死でこらえながら、つらそうに眼を閉じて、微かに「チュニャン」と言った。

「????????原?…、我…、我是…」

そこまで言って俊承の言葉は途切れた。俊承は顔を覆って泣き始めた。

才人は、最後に二人の姿を見て驚いたような顔をしたが、そうしてふわりと表情を緩めたのだった。

『ありがとう。俊承のこと、頼む』

無骨な彼の、日本語の発音にこだわる細やかな音韻。桔華や女将にもいつも礼を欠かさないその態度。彼の一番大切なものを託されたのだと桔華は思った。眼の前で子供のように泣きじゃくる俊承の頭を抱え、「大丈夫」「大丈夫」と何度も何度もつぶやいた。

「貴方の事は、わたしが守るから」

そのときかつ、と、夜闇にまばゆい明かりが二人を照らした。桔華は反射的に俊承を庇うように起き上がると、着物の袂で顔を隠した。

「貴様ら、そこで何をしている!!」

見張りの憲兵だった。その声を聞いた別の憲兵も、二人を取り囲むように集まり、小銃を構えた。

俊承は蹲ったままだ。桔華も憲兵の問いにどう応えたものか、考えを巡らせているところだった。

「何をしていると聞いている!」

痺れを切らした憲兵が銃剣を桔華の喉元に突き付けてくる。切っ先がひやりとして桔華は思わず息を呑んだ。だけどここを退くわけにはいかない。かといって、二人で逃げ出せるような状況でも無い。

万事休す、せめて俊承だけでもここから逃がすことはできないか。かれが話せば、俊承が日本人でないことはすぐにばれてしまうだろう。さあ、どうする。どうする桔華――。

「返して下さい」

亡羊に放たれた俊承の言葉は、そこにいた誰もの耳に届いたはずである。

「返して、才人を返して下さい!」

そう叫ぶなり才人が処刑された河縁へ走り出そうとする俊承。当然、屈強な憲兵二人がかりで抑えられたが、それでもその間を割って、俊承は才人のもとへ駆け寄ろうとした。

「放せ!放してください!放掉!」

もう無茶苦茶だった。俊承の荒ぶりに業を煮やした別の憲兵が銃剣を構えた。桔華はとっさにその憲兵にとりついて銃口を俊承から外した。「ばあん！」と甲高い銃声が響いた。銃弾は俊承の耳を掠ったが、かれが抵抗を止めることは無かった。

桔華もあつという間に憲兵に取り押さえられた。「かれは無実です、関係ありませんから！」と自分でも意味不明瞭なことを叫んでいるとは思ったけれど、ここで俊承を失うわけにはいかなかった。俊承は相変わらず「放せ!」「才人!」を繰り返しており、一向に興奮が収まる気配もない。憲兵隊が改めて小銃を構えた。隊長らしき憲兵が、撃ての合図をしようと右手を上げた。

だめ、誰か、誰か俊承を――。

「何事だ」

意識は一斉に声の主にそれた。二種軍装姿の陸軍将校だった。その後ろに黒澤が控えている。将校は明かりの照らす範囲のギリギリに揃え足で立ち止まると、役者と見間違えばかりの整った顔を桔華に、続いて俊承に向けた。俊承は抑えられていた憲兵に強引に押し戻され、勢い余って将校の足元に倒れこんだ。憲兵隊が一斉に捧げ筒をし、姿勢を正した。

「久坂少佐、ご報告いたします！国家転覆の恐れあるもの、及び清国より特令を下されしもの、十名の処刑を完了いたしました。これより死体の処分に入る所存であります！」

後ろの黒澤は、二人の姿を見ても表情を変えなかった。一体何のつもりだ、桔華は胸中でそうつぶやいたが、黒澤はこちらに視線を

寄こすこともしなかった。

久坂と呼ばれた将校は「お勤め御苦労」と敬礼を返して「ふうむ」と小首を傾げた。再び桔華にその美しい顔を向けたが、軍人には程遠い、能面のような微笑を浮かばせていた。

「極秘裏に、と厳命したはずだが？」

久坂は起き上がろうとした俊承の頭を蹴り飛ばした。その容姿に適わぬ行動に桔華も息を吞んだ。俊承はそのまま後方にふっとび、「ぐう」と唸り声を上げた。

「どうした、質問に応えろ、三井連隊長」

途端に、三井と呼ばれた憲兵は顔を真っ青にしてがたがたと震えだした。まるで全身に鋭利なナイフを突き付けられているような感覚だった。久坂のその美しい容姿と、相手に容赦ない行動力が、従うものに必要以上の緊張を強いているのだろうと桔華は思った。

「なんで殺した」

むっくりとおきあがった俊承が二、三度せき込みながら久坂を見据えていた。

「なんでかれらを殺した」

「ふうむ。どうやら日本人ではないようだけれど。生まれはどこかな」

「漢城」

「連中は清国政府からの極秘の要求もあって処刑が決まったんだ。朝鮮の人間には関係のないはずだが？」

「わたしは北京で育ちました。才人の幼馴染です」

久坂が黒澤に視線をやった。黒澤が一言、「周一樹。容疑者9号です」と簡潔に囁いた。

「そうか、幼馴染か。それは残念だった。だがこれから日本がアジア各国と結んで形成しようとしている恒久平和に、かれの思想は危険だと清国政府が判断した。同盟国として、わが国はそれを受け入れたんだ。かれがどんなことを考えていたのか、君もかれの幼馴染なら、それが、分かるな？」

この男、もしかしたら才人と俊承の関係を知っているのかもしれないと桔華は思った。だからわざと、俊承を煽るような言い分を申し立てているのではないか。

そしてその関係を直近で知っているとしたら、いま久坂の後ろに控えている黒澤以外にあり得ない。

俊承にこの久坂の言葉は体への暴力以上に効いているはずだった。事が起こってから知った才人の想い。春陽のためとはいえ、才人が命をかけた行動に同行させてもらえなかった悔しさ。俊承はふらりと立ち上がって、正面から久坂を捉えた。何をしようと言うのか、桔華は後ろ手に拘束されて動けないまま抵抗を試みたが、芳しい結果は得られない。

「なんだ、その眼は……」

久坂は幾分か顎を上げて、俊承を見下すようにそう言った。俊承は何も答えなかった。連隊長をはじめ、周りの空気が研ぎ澄まされるように凍りつくのを桔華は感じていた

。遠くの空で夜の空が白み始めていた。

「才人は何も悪いことをしていません。悪いことをしていない人を殺してくれと頼んだのがわたしの育った国で、そうしてそれを鵜呑みにしたのがわたしにたくさん新しいことを教えてくれたこの国なんですね。自分の大切な国をいまよりもよくしたいと考えることの何が悪なのですか。才人は、日本の事だって第二の故郷の様に思っていた。あなたたち軍人は、ロシアと戦争をするのだって、自分の領土を主戦場としようとしない、『アジアの恒久平和』とやらのために、朝鮮を、そして満州を焼け野原にしてなにが作り出されるというのですか！あなたたちは、そのアジアの中で他国に先んじてたくさん血を流し、そうして列強の侵攻から自立を勝ち取ってきたでしょう！ならばなぜそれを、列強と同じことを、同じアジアの国であるあなたたちが、わたしたちに仕向けるのですか！」

桔華は、体中に鳥肌が立つのを感じていた。ああそうか、かれらはやはり、広い海を越えてやってきた、異国の人なのだ、と思った。国家だとか列強だとか、それはどこか、自分の遙か遠いところで起こってるできごとなのだと思っていた。「開国した日本は、アジアの先兵となって欧州列強と渡り合う」ということ、そうして朝鮮や清国はその日本の隷下にあって指導を受けること、それはどの国にとっても有りがたいことなのだと思っていた。アメリカやアフリカのような植民地となった清国や朝鮮を思い描いたことなどなかった。だが彼等にとって日本とは、アメリカやアフリカにおけるイギリスやフランスと何ら変わりのないものとなりつつあり、それはかつてアジアでいち早く開国した極東の島国という羨望から、侵略国日本としての失望にかわりつつあったのだ。

ふらふらと久坂に近づいてきた俊承を再び殴り飛ばしたのは黒澤だった。軍刀を脇に抱えたまま久坂の一步前に踏み出し、そうして渾身の一撃を俊承のみぞおちにお見舞いした。流石の俊承もその場

に蹲ったまま、何度もせき込み、立ち上がれずにいた。

「日本が朝鮮と満州を侵略するだど？ふざけるな。貴様ら朝鮮人やシナの連中が不甲斐ないから、こうして海を越えて大国ロシアと戦ってやっているのだぞ。そのようなことも理解せずに、よくぞ知った口を叩けたものだな。貴様、あの才人とかいう男の幼馴染とか言ったな。馬鹿を言うな。あの革新派のインテリが貴様のような世間知らずと共に育ったというのか？そんな妄言をわれわれが信じるんでもいうのか！大方貴様が、今夜の宿代もないのであ的情婦をこんな人気のないところに連れ込んで楽しんでいたところなんだろう。今夜見聞きしたことをすべて忘れるなら、あ的情婦もろとも釈放してやってもいい。ええ、おら、聞いているのか朝鮮人！」

先ほどのまでのかれとはまるで別人のような振る舞いの黒澤に、桔華はとっさに、黒澤がこの場を逃れる口実をくれたのだと気がついた。後ろの拘束がゆるんだところを桔華は抜け出し、俊承の肩を抱き、背中をさすった。

「ああ、お前さん、いったい何がどうしたっていうんだい。いきなり憲兵さんに取り囲まれちゃって、あたしはもう、なにがなにやらだよ。昨日あんなにお酒を飲んだから、お前さんもなにがなんだかよく分からなくなっちゃってるみたいだけど、ああ怖い。こんなに怖い思いをしたせいですっかり酔いが覚めちゃったよ。軍人さん、あたしたちはおっしゃる通りの宿無しです。どうかその銃剣をおさめて、許してはもらえませんか」

「ふん、異国の地まで来て女に助けられるとは情けない。いいか。これきりだぞ。外部に情報が漏れたとなればまず貴様らを殺す」

黒澤は膝について二人に視線を合わせ、そう凄んだ。そうして久

坂のもとに戻ると簡単に状況説明を繰り返し、憲兵隊と連隊長には夜明けまでに川辺の死体の処理を申しつけた。久坂は相変わらず俊承を見下ろしていたが、かれの肩を抱きつつ、今度は桔華が彼を睨みかえしてやった。

黒澤が促したので久坂は何も言わずにその場を立ち去った。彼らの姿が完全になくなったことを確認して桔華はその場を動かない俊承の顔を上げさせ、頬を叩いた。

「俊承、生きている？大丈夫？」

反応の無い俊承の腕を肩に抱きかかえて、桔華は立ち上がった。朝日が水平線上にあった。長い夜が明けた。

その時、着物の袂に何か紙切れが挟まっていることに気がついた。

『下宿には戻るな。早朝に憲兵隊が一斉検挙に動く。お前たちは下の住所に来い。ただし、人目には付くな』

黒澤』

裏切りの祖国（3）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

裏切りの祖国(3)

正直、桔華はここまできて、黒澤を信用できるかどうか決めかねている。

黒澤のメモの住所は、広瀬通りを一つ越えた先の、長屋街の中の一つだった。維新前の江戸の街並みを遺したといえは聞こえは良いが、風が吹けば戸板がガタガタ鳴り、隣人の会話の聞こえるような薄い壁。気を失った俊承を抱えつつ、いまさらどこにいきこうという先も思い浮かばずに、意を決して黒澤指定の家の戸に手をかけた。鍵は掛かっていなかった。

早朝六時前。まだあたりも人の動きだした様子もなく、カラカラと戸を閉じるとそこにしんと沈黙が落ちた。6畳ほどの部屋に文机が一つ。本棚にはぎっしり本が積まれており、読みかけのものが数冊机横に重ねられている。蒲団は綺麗にたたまれてちゃんと奥に納められており、シャツが一枚掛けられているほかは家具らしいものも見当たらない。

とりあえず土間を上がり、奥の布団を借りて俊承を寝かしつける。押入れを開けたら風呂道具のようなものを見つけたので、共同の水くみ場で水を汲んできて手ぬぐいを絞り、俊承の体をふいてやった。瓶底の眼鏡は割れていたので外した。憲兵にやられたらしい痣が体中に残っていたが、黒澤にやられた鳩尾は赤黒く変色していて桔華

はぎよつとした。演技にしろ、そこまでやる必要があったのか。とりあえずもう一度洗った手ぬぐいを絞り、患部に当ててやった。そうして布団を掛けてやる。

ようやく桔華も膝を崩し、大きく深く息を吐いた。たった一晚の出来事ではあったが、親しい友人が死に、自分らも殺されそうになり、その窮地を脱してきた。急激な疲労感とともに、先ほどの出来事がまるで夢だったのではないかと思えてくる。才人のことも夢だったのではないか。きつとひと眠りすれば、またむつとりとしたあの顔をぶら下げて、ひよつこりと帰ってくるのではないか。

下宿の女将やみんなはどうなっただろう、黒澤は本当に信用できるのだろうか、これから私たちはどうしようか……そんなことを考えているうちに、桔華もうとうと意識を虚ろにし始めていた。まあいい。私たちが落ちついたところに、憲兵たちがここを襲撃するかもしれない、いやだが、眠い……

そのとき、ガラッと戸が開いた。とはいえ桔華は反射的に身構え、俊承を庇うように身を乗り出す。

帰ってきたのは黒澤だった。そんな様子の桔華を見ても大した反応もせずに静かに戸を閉めると、軍帽と外套を脱ぎ、軍刀を外して土間を上がった。桔華の視線は黒澤をずっと追っているが、当の本人はそれを気にした様子もなく通り過ぎ、軍服の上着を脱ぎだした。そのときになって桔華はようやくはっとして、慌てて後ろを向いた。なんとなく気まずい思いをしているのは、桔華だけのようだった。

「き、着替えるなら先に言ってください!」

その空気に耐えきれなくなった桔華が、隣の部屋に感付かれない

よう声を殺しつつ、黒澤に文句を言う。黒澤はやはり意にすることはないようでシャツを脱ぎ軍袴を脱ぎ、単衣を羽織り、きゅつと腰帯を締めた。押入れから酒瓶と銚子を取り出して、俊承の寝ている布団の横にどんと座って胡坐をかいた。そうして手酌で一杯ひっかけると、桔華にも杯をすすめた。

「なんですか」

「薩摩の紅いも。旨いですよ」

「そーではなくて！あなたはなんなんですか！私たちを殺したいの、それとも生かしたいの！そしてここはどこなんですか」

桔華ははっとして語尾の声をひそめた。つつこみどころが多すぎる。

勢い立ち上がった桔華を見上げる黒澤は、やはり大した反応もないまま再び手酌で飲み始めた。

「以前話したでしょう。俺は陸軍の中尉、一昨年士官学校を卒業したばかりの新米です。女房と子供が出て行ってからはここに一人で住んでいます。よって、ここは俺の家。あんたたちをどうしたいのかは、正直俺もよくわからない」

そういうと黒澤はまたぐつと杯をあけた。焼酎だが、随分いける口のようなだ。

「将校さんって、もっと立派な家に住んでいると思っていました」

「中尉の月給は世間のさらいめんよりずっと安いですよ。戦費を国民に借金するような国に雇われているんだから当然です」

釈然としないが桔華はとりあえず座る。俊承は規則的な寝息を立てていて、ぐっすりと眠っているようだった。それを確認して桔華はほっと胸をなでおろす。

「私たちの住んでいる下宿、どうなるんですか」

「とりあえず、今日処刑された10人の関係者は、今日の行幸が終わるまで憲兵の監視下に置かれることになっている。一応事情聴取はすると思うが、事前に素行調査など行っています。すでに白黒はついているはず」

「じゃあ、またさっきのようなことが起こるということ？」

「さあ。昨晩中に始末しろというのは久坂中佐の指示です。中佐は在京近衛隊の参謀。今日の春日宮殿下の仙台入りの全権を任されて着任した。三月まではイギリスにいた人です」

――イギリスで、耕三郎と士官・陸大が同期の久坂廣枝という男に出会った。

「久坂……廣枝？」

そうして初めて黒澤が感情をあらわにした。

「驚いたな。知っているんですか」

「今イギリスにいる知人からの手紙に、その名前を見ました」

「最短で陸大を出て、そのまま在英駐在員として数年を過ごし、参謀本部へ出仕している、超エリートですよ。あの年で皇族の出御を任されるのは前例もない。お上には随分覚え目出度いらしい」

「尊敬しているのね」

ふと黒澤の手が止まった。

「まあ、そうですね」

ところで、と黒澤は切り出した。

「あんたさつき、俺がその男に惚れているのかと聞いた時、そうだと答えた。それは本当ですか？」

ずいぶんと引っ張ってくる男だ、と半ば訝しげになりながら、桔華は少し、考えた。

「まあ、そうかもしれませぬ。確かにさつき、この人のためなら死んでもいい、そう思いましたから」

黒澤は何も言わずにまた杯を口に運んだ。奇妙な間が生まれて桔華はまた居心地が悪くなった。

「それは同情ではなくて？」

黒澤の会話の意図がまったくつかめない桔華は、「どういう意味です！」と食ってかかる。黒澤は杯をすんと置くと背筋を伸ばして桔華に対峙した。

「初めにあんたたちに会った時、最上さん、あんたが一方的に柳君を追いかけているように見えた。男女の中に生じる感情なのかとも思ったが、どうやら違うらしい。それとはちがう、もっと穏やかで優しい何か――それが何なのかは俺にもよく分からないがとにかく、そう感じたんだ。」

あんたたちを返した後に、周君と話をした。彼もまた、柳君にたいして友情とひとくくりにできないような、素晴らしく単純なようではないかとも説明しがたい感情を持っていた。家族や恋人、自分の命よりも大切に思える存在、それが周君や最上さんにとっての柳君だ。

だがわからない。なぜ皆そこまで彼に拘る。何が君たちをそこまでさせる。俺は軍の学校や大陸での演習で何人もの思想家や知識人を見てきたが、どんな賢人も技術者も、それだけではことを起こすことができない。ことを起こすためには何が必要か。それは多くの人を引き付けることのできる人間の存在だ。それには博学の知識も、端麗な容姿も、理想的な思想も必要ない。ただそこにあるだけで、人々の興味を引き付けることのできる人間が、世に大きなことを起こすことができる」

「何が言いたいのか」

黒澤は視線を落とし、俊承の寝顔を眺めていた。俊承の方は先ほどの喧騒が嘘のように穏やかな寝息を立てていた。桔華は黒澤の言わんとしていることは分かるような気もしたし、分からないような気もした。俊承がもし、何かを成し遂げようとするのなら、それをする事ができる素質を持っているのであり、そうして黒澤は、これから俊承をどうしたいということなのだろう。ほんの一週間ほどの付き合いではあるが、この男には何度も危機を救われている。はじめからその目的のために、俊承に恩を売ったということか。

「少なくとも、日本軍のために働けと言っても、無駄ですよ。才人のことだって納得できていないんです。むしろ、俊承は日本を憎んでいるかもしれない」

「そうですね」

「私が彼に抱いている感情は確かに男性に抱く恋心とは違うものかもしれません。それでもわたしは俊承や才人のことがとても大切です。人間として、尊敬もしている。だからこんな形で、『国家』なんてモンが勝手に私たちの仲を裂こうとしていることが許せない。黒澤中尉、この一週間、確かに貴方に助けられました。だけどこれとそれとは話が別。俊承を、俊承の意に沿わない形で使おうなんてこと、私が許さない」

「誤解をさせてしまったようですね。そうではなく、これは単に、俺が柳君を見ていて感じたことと、その将来性についての話です」

「はあ」

「この男に惚れているといいましたね。最上さん、あなたはもし、この男との間にこどもが生まれたら、どうします」

「どうとは？」

「日本人として育てるのか、それとも中国人、いや、朝鮮人として育てるのかということです」

「先ほどからあなたの言っていることの意図がわからない。つまりあなたは、日本人と大陸出身者で恋愛をしてはいけないということ

？それならば結構。先ほどのあなたのご高説の通り、私は俊承に確かに惚れているけれど、それは男としてというよりはその人間性に深く寄与する感情であって、大切な友人という意味よ。けれどもそれはそれとして、私は人を愛するという感情に国境なんてものは関係ないと思っているわ。言葉が通じないなら互いの言語を学べばいい。一緒にいたいという感情は、そういうものをいとも簡単に凌駕してしまうものだと思うもの。大切なのは、それがお互いの正直な気持ちであるかどうかということよ」

「理想論だ。あんたもさっき見ただろう。逼迫する国際情勢は、それに比例するように国民の心境を圧迫し、その歪は近隣の諸外国への優越感となって表れ始めている。本人同志が好きあって一緒になったとして、その間に生まれた子供はいつたい、自分を何者だと思っただけ生きていけばいい。日本人には混血と忌まれ、大陸出身者には僻まれ、そうして誇るべき自国も持たぬ力なき幼子が、どうやって自我を確立する。これはもはや、親の努力ではどうすることもできない領域の問題だ」

「あなた何を恐れているの。そんなこと、こどもが自分で考え、そうして自分で答えを見つけ出すわ。親ができることは、そのような時代に翻弄されることなく、自らの正義を貫き通す大人の背中を見せることよ。今が自分の力でどうしようもないような時代の力に押し流されている時期なのだとしたら猶更、それに異を唱え、行動しようとする姿を見せる時期ではないのかしら。たとえそのために」

桔華はそこまで言ってはっとした。

今から自分が言おうとしていることは、果たして正しいのだろうか。そう思ったからだ。

「そのために、こどもと、その家族を顧みることなく己の信じた道

を突き進んでいくのだとしても」

黒澤は相変わらずその感情が読み取れぬようなぼんやりとした眼をこちらに向けていて、一言「そうか」とだけ呟くと手酌で杯を満たし、桔華に差し出した。焼酎は苦手だったが、二度も断るわけにはいかぬと思い、それを受けて、一気に干した。喉の奥から燃えるように熱くなった。脳髓の先から染み渡るように痺れが走った。

「そうか……」

そういったきり、黒澤は項垂れてだんまりしてしまった。桔華は感情の高ぶりと慣れないアルコールにもっと何か話をしていたいような気分だったが、黒澤にかける言葉も見つからず、なんとなくまた、気まずい空気が流れた。時の針の音だけ、こちこちと正確なりズムを刻んでいた。

そうしているうちに、遠く、外から鼓笛隊の音楽が聞こえてきて、ざわっと人々が湧いた。皇族の行幸だろう。沿道に詰めかけた人。日章旗を振るこども。訓練された鼓笛兵が整然とラッパを構えながら先導し、その後ろを春日宮とその奥方を乗せた馬車が続いているのだろう。

「あなた士官でしょ。行かなくていいの？」

「今日は非番だ。久坂少佐が指揮を執る。上に自分のやり手ぶりをアピールする絶好の機会でしょう」

「こちらから聞いてもいいかしら」

「何でしょう」

「おいくつ？」

「25」

「驚いた。やっぱり私よりも若かったのね」

「女性に歳は聞けぬと思っておりましたが、おおよその見当は付き
ました」

「もう一つ。いやなことを聞いていいかしら」

「国家機密に関しない限り」

「あなた、陸軍のお偉いさんによく思われていないんじゃないの。
今戦争の真っ最中だというのに、士官学校を出たあなたがこんな地
方の憲兵のお目付け役だなんて。しかも皇族のご来訪にも顔を出さ
せやしない。なにか悪いことでもしたの」

桔華が見る限り、黒澤は軍人、いや、帝国陸軍の士官としての素
質、態度、行動力とともに備え持つ優秀な将校であるように思われ
た。憲兵官舎での問答。思想偏向無く、その場の空気を読み、適切
に処理しぬける決断力。どれをとっても申し分がない。その彼が、
このような日陰の任務を負わされるのには、何か理由があるのでは
ないか。あるのだとしたら、先ほどからやたらと突っ込んでくる自
分と俊承との関係性、いや、日本人と大陸出身者との関係について。
軍上層部が好ましくないと考える要素が何かしら彼には認められる
ということか。

「もしかして、出て行った奥さんって……」

黒澤は答えなかった。

桔華が覗き込むと、黒澤は酔いに任せてそのまま眠りについதாகしく、あぐらのまま健やかな寢息を立てていた。

俊承も黒澤も、穏やかな寝顔はまだ少年のあどけなさを残していて、その間に隔たる国家などという極めて人為的な抑制装置は、どこをみても見当たらない。

桔華は自分が着ていた上着を黒澤に掛けてやると、静かにその部屋を出た。

遠くで鼓笛隊のパレードの音が聞こえている。

——わたしに何かあったら、エンゲルス全集の裏表紙に挟んである手紙を、俊承に渡してください。

脳裏によぎる才人との約束を胸に、桔華は自分たちの暮らしていた下宿へと走り出した。

下宿を前に桔華はあたりの様子を陰から見渡している。

今日は休日。街道に面するこのあたりは普段はもう少し人出があるのだが、皇族の行幸が幸いしてか、あたりは閑散としていた。

憲兵隊もない。桔華は小走りで下宿の裏口に回り、戸に手をかけた。開いた。

できるだけ物音を立てぬよう慎重に戸を閉めた。すると人の気配に気が付いたらしい女将がやはり静かに降りてきて桔華の顔を改めるなり、驚き、安堵といった感情を交互に顔に表しつつ、声を低くして桔華に声をかけた。

「無事だったのね、よかった」

「女将さん、憲兵隊は来たのですか」

「ええそうよ、あなたたちが出て行ったそのすぐあとくらいかしら。十人くらいの憲兵さんたちが急にここに来て、今から名前を読み上げるものを引き渡せというのよ。才人の関係かとも思ったから、なんとなく言葉を濁していたら、騒ぎを聞きつけた留学生の子達の方から出てきてしまって、そうして連行されていたわ。あの子たち、『自分たちは何も悪いことをしていない、ここに迷惑をかけるわけにはいけないから』なんてことを言っていたけれど、才人だって戻ってきていないし、それに……」

桔華は先だって二階の俊承と才人の部屋の戸を引いた。おそらく憲兵隊がさまざまに物色していたのであろう。部屋は書物や生活用具が入り乱れて雑多としていた。

女将は桔華の後ろからついてきている。この部屋を見て溜息を付く。

「引き渡せという名簿の中に、あなたや俊承の名前もあったわ。あなたのことは実家に帰るから昨日で辞めたということにして、俊承

には申し訳ないけれど昨日から出かけていて居場所はわからないと言っておいたわ。ところで俊承は無事なの？」

才人が下宿の人間と自分の行動には何の関係もないと最後まで言い張ったのだと黒澤は言っていた。

だとするとあの日、才人に面会を求めに行ったときに名乗ったことが、関係者と見なされることになったというわけか。

女将の問いに桔華は頷いて見せて、雑多となっている部屋をかき分けるように進み、いつもは整然と整理されていた才人の文机の一番下の引き出しを引いた。エンゲルスの全集も数冊が抜き去られた後だったが、その一番手前にある全集の裏表紙を外すと、茶色い封筒が出てきた。念のため、桔華はその封筒の中を確かめる。

一枚は中国語で書かれた俊承への手紙らしかった。

そうしてもう一枚は先月の日付のある新聞記事の切り抜きだった。10行ほどのベタ記事ではあったが、それを見て桔華は絶句した。

「桔華さん」

後ろで女将が自分の名前を呼んでいることにも気が付かなかった。桔華はその記事を見つめたまま、全ての思考が停止してしまうような気さえた。

才人との約束は果たさねばならない。しかし大切な友人を失ったばかりの俊承に、この事実はあまりにも残酷だ。

「桔華さん」

ようやく我に返った桔華が振り返ると、女将が風呂敷に二人分の手荷物を簡単にまとめたものをよこしてきた。

「才人がどうなったか、知らない？」

桔華は少し押し黙った後、首を横に振った。

「女将さん、私、才人にこれを俊承に渡すよう言われているんです。でも、今の彼にこれを渡していいものか、正直迷っています」

桔華から切り抜き記事を受け取った女将は、それを改めると沈痛な面持ちで黙って返してよこした。

「それが才人の気持ちなら渡すべきよ」

桔華が荷物を受け取り、立ち上がった後も、女将はそこに膝を折ったまま、顔を上げることをしなかった。

「長い間お世話になりました。こんな形でここを離れることになってしまうのはとても辛いけれど、騒ぎが落ち着いたら必ずまた戻ってきます。女将さん、憲兵隊に何を聞かれても、自分は彼らには何の関係もないのだと言い通してください。それが、ここでともに暮らした留学生たちの願いでもあるのです」

「私は、あの子たちは無実なのだと証言する。自分たちの暮らしをよりよくしたいと思うことの何が罪だというのかしら」

「女将さん！」

悲痛な心地で振り返った桔華に、女将は立ち上がっていつものように優しく笑うと、桔華の肩を抱いた。

「心配しないで。私にできることをするだけ。捕まったりなんかし

てやらないわ。それより桔華さん、俊承の事……」

才人が俊承に残した手紙と、新聞記事。

記事には、ガリ版の小さな文字が、北京近くの村で起こった馬賊の襲撃事件を伝えていた。

『過日、北京郊外李甲屯にて馬賊の横暴あり。村人の多くは日系・朝鮮系の移民であり、反日の意思昂じた梁統山率ゐる一派数十名による虐殺行為が行われたとの報告。』

漢城にて蘭学を学びたる由にて高名な柳 隆盛氏（53）の一家もその被害に遭遇、本人とその家族の死亡が確認されたり。柳氏は親日派として内外に知られ……』

「辛いのはあの子ね。信じていた祖国のすべてに裏切られたのだから……」

桔華はその女将の言葉に応えることなく、荷物を抱えなおすと深く一礼してその場を後にした。

俊承はひとりだ。たった一晩で、帰るべき祖国も、敬うべき祖国も、大切な友人も、家族も、そのすべてを失ってしまった。

いいえ、絶望なんかさせない。

わたしが、あなたの傍にいる限り。

裏切りの祖国（4）（前書き）

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

裏切りの祖国（4）

桔華が黒澤の部屋に戻ったのは昼過ぎだった。

当の部屋の主はいなかった。俊承は起きていて、黒澤所有の書物に目を通していろいろだった。

「おかえりなさい」

桔華はただいまも言わずに戸を引いたというのに、俊承は少し元気はないものの、いつもの柔らかな笑顔を桔華に向けてよこした。

「起きたのね。調子はどう？」

「黒澤さんに入れられた一発がだいぶ響いていますけれど、そのほかは問題ありません。さっき本人にも演技とはいえかなり本気でぶち込んで申し訳ないと言われました」

そういつて笑う俊承の、ビン底眼鏡は割れていた。もしかしたら夢かもしれない昨夜の出来事が、全部本当のことだったという証だ。

「その、黒澤中尉殿は？」

「ええ、官舎の様子を見てくるとかで、先ほど出ていきましたよ。わたしたちは憲兵に目をつけられているから、できるだけここを動

かない方がいいと言われました。夜には帰ってくるそうです」

親切なのやら、自分たちに何をやらせようとしているのか。

結局黒澤の真意は分からぬまま、桔華は一つ溜息を付き、そうして土間を上がった。

今晚帰ってくるなら晩飯ぐらい用意してやろう思ったが、この部屋には食糧がまるでない。煤けた鍋が一つあるだけで、口に入りそうなものといえば『薩摩の赤いも』とかいう焼酎くらいのものである。

堪能な中国語やあの才人を「革新派のインテリ」と形容できるほどの知識人でもあるようなので、給料の大半は書物につき込んでいるらしかった。

陸軍中尉の安月給というものは随分深刻なのだ、とそのときはじめて桔華は黒澤に同情した。

それから三日は、黒澤の言いつけ通り、俊承も桔華もほとんど家を出ずに過ごした。

黒澤はほとんど家にいなかったが、外出の前には水とある程度の食糧を用意してくれた。桔華もせめて居候させてもらうのだから掃除洗濯ぐらいでもと申し出たのだが、人がいると見つからない方がいいだろうと丁重に辞退された。

俊承は一日中、黒澤所有の書物に目を通していた。ワグナー、ブリュッセル、ニーチェに始まり、論語、墨子、孫子と、古今東西のあらゆる言語の書物があるようで、俊承はそれらを食い入るように読みこみ、そうして「面白い」「すごい」とその話を桔華に聞かせ

たりした。あの軍人がどんな顔でダンテを読むのだろうと思いつつ、俊承の笑顔が今の桔華の唯一の救いのような気がして、黙ってそれを聞いていた。桔華は、俊承にあの手紙をまだ渡せずにいた。俊承も、下宿の人間のこと、才人のことを話題にしようとは思なかった。

「あんた、北条桜花の孫なんだってな」

才人の一件から三日目の夜更け、俊承は銭湯へ行っていて、一人で留守番をしていたところに黒澤が帰ってきた。

「ええ、そうですけれど」

「なるほど。それで分かった。久坂少佐のことは、北条古月に聞いたんだな」

桔華は黒澤から軍帽と軍刀を預かった。始め本人は「別にそういうことを求めている」と断ったが、せめてやれることをやらせてほしいと桔華が押し切ったのだった。

「社長をご存じなんですな」

「まだ直接は知らない。だが今回の戦争には民間の海運会社も大きくかわっていて、『北条』もその例にもれないということだ。もっとも北条社長は、イギリスで高橋蔵相にユダヤ人実業家を会合させて日本への戦債確保に尽力したと言われている。社長の友人が、俺の上官だ」

桔華は胸のすく思いで古月の名前を聞いていた。目をとじると、かれの大きな手が、桔華を求めてくるような気がする。そうするうちに桔華の中にふんわりとやさしい何かが浮き上がって、堪らなく

なる。会いたい、声を聴きたい、その気持ちが頂点に達するより早く、「後悔しないで」とのたまった、篠の辛い顔が浮かぶ。

ふと、唇をぎゅっと噛んだ桔華い黒澤はちらりと見、それには気が付かぬというように「そういえば」と話を切り出した。

「あんたたち、これからどうするつもりだ。ここにいるのは構わないが、このとおり、いろいろと不便な思いをさせてしまうだろう。しばらくは官憲の目も煩いだろうから、いつそ二人で仙台を離れるのが得策だと思うのだが」

仙台を出る。それは桔華の中にもあった答えだった。だが出てどこに行こう。京都にはまだ戻れない。

桔華が黙っていると、着替えを終えた黒澤がいつもの焼酎を片手に桔華の前にあぐらをかく。

三日ほど過ごしてみてもわかったことだが、この男、別に酒に強いというわけではないらしい。強い酒を煽ることで、入眠を促しているようだった。

「ま、あんたと柳君が一緒に行動するという義理はないのかもしれないな」

桔華ははっとして即答する。

「バカなこと言わないで！私が、私が俊承のそばにいてあげなくちゃ、かれはもうどこにも帰るところなんてないのよ！かれがどこかに行こうというのなら、私はそれについていきます。それがどこであってでもです」

黒澤はその桔華の言動を見逃さない。

「それは、北京にいるという柳君の家族に何かあったということですか」

桔華は言葉に詰まった。才人の残した新聞記事にそうあったただけだ。それが事実である確証などどこにもない。

悩んだ末、桔華は才人からの手紙と記事の切り抜きを黒澤に手渡した。黒澤はその内容を一通り確認すると、それを丁寧に現状に戻し、そうして桔華に返してきた。

「手紙、なんて書いてあるんですか」

「知ってどうする。周君は柳君に渡してほしいといったんだろう」
「迷っているの。この手紙を、かれに渡していいものか」

もし手紙の内容が、清国の革命のために自分の志を継いでほしいというものだったら？

家族を清国の人間に殺された俊承が、その発端となった日本や、家族を見殺しにした中国を心から恨んでしまったら？

たくさんのことに絶望した俊承が、日本や中国を、そして自分を嫌いになってしまったら？

俊承が遠くへ行ってしまう。

私の手の届かない、どこか遠くへ行ってしまうような気がして。

「惚れていない、ということではなかったのか」

「惚れている、と言ったはずよ。人間として尊敬しているの。だからこそ、私は彼の見方であり続けたいの。だからこの手紙が、今の彼を否定するものならば、それがたとえ才人の頼みであっても私は受けることはできない」

古月の顔が浮かんで消えた。かれに言えなかったたった一言を、こんなにも容易く口にできる自分が怖かった。

偽りのない事実。これから俊承を助けて生きていかなばならぬ。桔華はそう心に固く、決めていたのだ。

「本人がそれを望まないかもしれない」

「そんな、だって」

「あんたは自分の独りよがりな妄想で、柳君を弱者にしてしまっているんじゃないのか。自分がいなければあの男が一人ぼっちで、頼るべきものもないのだとなぜ言い切れる。あんたは目の前で見せつけられた大陸民に対する日本人の優越感を否定し、自らかれらを保護しようとすることで自分だけはこの国の熱狂の外にしていると自覚したいだけじゃないのか。そういうあんた自身が、周君や他の活動員たちの啓発運動のきっかけとなっていたのだと考えたことはないのか」

違う、自分は純粹に俊承の力になりたいと思っているのだ、そう思う心に必死で抗おうとしている自らの思念に気が付き、桔華はその場で絶句してしまった。心の隅に引かかっているものがあつた。自分は日本人で、かれは半島出身者。才人の怒りも、俊承の悲しみも、分かったようなふりをして、その実、心の中では日本人である自分がかれの理解者であることにどこか抛り所を求めてしまっていたのではないのか。黒澤の言うとおり、本当はそうであろうとしている自分に酔いしれ、俊承を自己満足の道具にしてしまっているのではないのか。

俊承の力になりたい。

俊承の近くにいたい。

これは同情や自己満足なんかじゃない、これが私の本当の気持ちなんだ。

それはつまりどういうことだろう。

天涯孤独となったかれを支え、ずっとそばにいたいということは。

「……違う」

「どう違う」

黒澤は間髪入れずに返してきた。

「同情や憐憫ではないとどうして言い切れる」

「私は、一生愛していくと決めた方がいます。でもそれは俊承ではないの。今でもその気持ちは変わらない。私の心はずっと彼のものよ。でもこれと俊承のこととはわけが違う。たった半年だけでも、一緒に寝起きた仲間なの。私にとっても大切な友人であった才人が、最後まで守りたかった男なの。それが自己満足だというのならそれで構わない。俊承が私の力が必要としてくれるなら、私はどこまでもかれについていく。そう決めたのよ」

「女心とはつまり理屈だな。男には理解できん」

そういうと黒澤は何かに気が付いたようにばっ、と立ち上がり、がらりと戸を開けた。

驚いた桔華がその後ろに従う。玄関には風呂の湯桶と手ぬぐいが

あるばかりだった。

「まさか俊承」

「官憲の目もある。探しに行った方がよさそうだな」

仙台駅から電車で松島まで約三十分。市内中を駆け回った末に桔華が思いついたのは、俊承が常々言っていた、「太平洋を見てみたい」という言葉だった。

先日の花見の際に、行きたいと思いつつまだ行けていないということを経華に漏らしていた俊承に、才人は「近いうちにな」と返した。思えば新聞の日付はあの日よりも前のことであつたから、才人はすでに祖国で何が起こっていたかを知っていたはずであつたのだが、俊承を思つてか、かれは存命中、そういうところを一切俊承に見せなかった。俊承の父は、北京でも高名な学者だったいうから、他の留学生の口から彼にその旨を伝えられることも考えられたが、ほとんど影のように俊承につき従っていた才人がそのようなことを許すはずがなかった。

終電に間に合い、桔華は松島の駅で降りた。観光客用の土産屋が何軒あるがそれも締まっており、街灯もなく、あたりはいやに静かだった。電車が行ってしまったのを見てから、遠くにざざんと波の音がした。桔華は音の方に足を向けた。

月の明るい夜だった。

照らされた離れ小島だけが、ネイビィブルーの夜空に黒く縁どら

れている。穏やかな波が打ち寄せる白浜に、人影を見つけた。

「俊承！」

下駄が砂に飲まれるので、裸足になった。砂は昼間の太陽の熱を少し残していて、なまぬるかった。海風が熱を持ち始めた空気に心地よかった。

「俊承」

桔華の呼ぶ声に、俊承は二度とも応えなかった。ただ膝を抱いて海の向こうをずっと見ている。

俊承のすぐそばまで来たが、桔華は俊承の隣に座ることができなかった。さっきの黒澤の言葉が、おおきく頭をもたげていた。

——自己満足でないと、なぜ言い切れる。

「この向こうに」

俊承はずっと海を指差した。桔華の視線もそれに従った。

「この向こうに、ハワイがあってアメリカがあって、そうしてずっとずっとまっすぐ行けば、イギリス、フランス、インド、そうして北京、朝鮮」

俊承はぱっと後ろを振り返って、桔華に笑いかけた。

「そして、桔華さん」

いったい何の話だ、と桔華は一瞬わけがわからなくなったが、俊承がそう言って一人で笑い出すので、桔華も吹き出してしまった。そうしてしばらく、わけがわからぬまま二人で笑いこけた。静かな波の音に、二人の笑い声だけが響いた。

そうして一通り笑い終えて、桔華は俊承の横で手足を投げ出して大の字になって寝ころんだ。俊承はまだ余韻が残っているらしく、相変わらずくすぐすと笑っていた。桔華はそうして波の音を聞きながら、天の星を見上げていた。無数に広がった天の海は果てしなく広く、そして途方もない時間を抱いて、そこに有った。

「本当は知っていたんです。北京の家族のことは」

桔華はぼっと起き上がった。

さっきの黒澤との話もどこまで聞いていたのだろうか。心地恥ずかしいような気もしながら、桔華も膝を抱き、俊承のことばに耳を傾ける。

「才人がわたしになにも言おうとしなかったから、わたしも何も知らないつもりでいました。才人はやさしいひとだから、わたしがそれを知って悲しむ姿をみたら、かれも辛いだろうと思ったからです。わたしたちは、とても小さなころから一緒にいました。いつもいちばん近くにいました。でもだから、もしかしたらいちばん遠いひとになっていたのかもしれないかった。言わなくてもわかってるからこそ、言わなくちゃわからないことがあるんです。わたしは、才人の本当の痛みを、分かってやれなかった」

俊承は泣いてなかった。いつものあの穏やかなで儚げな微笑を湛えて、才人よりも少しおぼろげな日本語で。

「才人はきつと、痛いなんて思っていなかった。ずっと悲しいと思っていた。自分の国を少しでも良くしようと思って、皇帝と一緒に事を起こそうとした両親を殺されたこと、誰のせいだとも言わなかった。それが正しいとされる国が悲しい、だから自分で変えていかなくちゃって思っていた。才人は本当は、孫中山老師たちと一緒に、国を変えるために働きたかったのに、わたしが日本にいくと言い出したから、心配してここまでついてきてくれたんです。いつも自分のしたいことは後回し。だから、才人が自分のしたいことを始めてくれたんだって、わたしはよろこんだのです。でも、ほんとうのほんとうは、心の底では、才人が遠くに行ってしまったようで寂しかった。才人が変革のための行動にわたしを巻き込みたくないのだった。わかっていたから、わたしはそれ以上才人に何も言えなかった。でももしかしたら、わたしが寂しいっておもっている気持ちを才人は理解してくれるんじゃないかって思って期待をしていた」

海がざざんとなった。

「わかってくれていたんです。だからあるとき、わたしを納得させるための理由に春陽の名前を出した。才人はわたしのことをすべてわかってたんです。わかってやれなかったのは、わたしです」

そこで俊承の言葉が途切れた。俊承は膝に頭を埋めて、堪えきれない何かを必死になって抑え込もうとしているようだった。いつも自由で、無垢で、その笑顔に才人は救われていたに違いない。親を国に殺された悔恨を、本当にしたいことをあきらめてまで俊承とともに海を渡ったのも、すべて、この笑顔を絶やさないためであったに違いない。

才人は最期、確かに桔華に言った。「俊承を頼む」と。

それは才人が生きる上で最も大切にしていたことであり、俊承が才人を理解しきれないといったまさにその部分であったに違いない。

誰かが誰かを想うという気持ちを内向きにとらえるならそれはただの自己満足なのだろう。黒澤の言うとおり、押しつけがましい恩情も、弱者に対する無意識な優越や憐憫も、大方自己満足の域を域を出るものは少ないに違いない。だが、その何が悪いというのだ。才人の自己満足は、現にこうして一人の命を助けた。そうして、桔華をここまで動かした。才人の気持ちを、俊承や桔華が理解したことで、かれのそれは自己満足などではなくなったはずだ。たとえばそれを、事実才人が自覚していたとしても、他者に理解してもらうことで、それは単なる内なる感情から、誰かを敬い、慕う純粋な感情として認められるのだろう。

桔華は、涙を堪える俊承を抱いた。突然の行動に俊承の方は驚いた様子であったが、それに大人しくしたが、やがてぼろぼろと大粒の涙を流し始めた。桔華はそれが落ちて着くまでだまって胸を貸し、肩を抱く手に力を込めた。守ってやらねば、そう思っていた俊承の肩は、桔華が思っていたよりもずいぶん大きかった。

「ねえ桔華さん」

俊承はまだ涙の線が残っている顔を上げ、桔華の名前を呼んだ。

「なに？」

「わたしは桔華さんが好きです」

臆面も無くそう俊承に言われて、桔華は返す言葉を失った。言葉を探して口をぱくぱくさせているところに、

「女将さんと、下宿のみんなが好きです」

と、やはり臆面も無くそう言った。それから、北京の家族と友人と、従妹の名前、医専の同級生、そして最後に黒澤の名前などを上げて、「みんな大好きです」と言った。

「だから、わたしは、才人がしようとしていたこと、実現しようと思います」

「それはつまり、清国に革命を起こそうということ？」

桔華の胸に不安がよぎる。それはつまり、才人と同じ、今の北京政府や日本からも、ましてや朝鮮からも迫害を受けかねない。

「才人は、祖国を愛していました。そうして、日本のことも、父の出身である朝鮮のことも、憧憬の念を抱いていました。自分の国だけがよくなればいいってことじゃない。才人がしようとしていたことは、そのどれもが、お互いを尊敬しあい、理解しあっていけるということ。誰が優れているということではなく、誰もが優れていることを認め合っているような世界にしたい。だからわたしは、行きます」

桔華から離れようとした俊承を、桔華はきつく抱きとめた。

「だめ、だめよ、あなたまで才人のようになってしまう。もう個人の力ではどうしようもない。あなたはここにいて。私があなたを守ります。だからここにいて。お願い」

精悍な俊承の背中 of 温もりを感じながら、桔華はそう必死になって訴えた。応えて俊承。お願い、はいと言って――。

気持ちが強まるほどに、俊承を抱く腕に力がこもった。しかし俊

承はその問いに応えることなく、そうしてふわりと、初めて桔華に手を伸ばした。かれの大きな手が、桔華の肩を抱いた。

「多？、桔華」

こみ上げる感情に、必死で抗おうとしている自身がいる。

これは違う。私は俊承の力になりたいだけなの。

私が心に決めたのは、古月さんだけ。

私の気持ちに嘘をつかない、そう篠さんとも約束をした。だから、この気持ちは、きつと嘘。

俊承を「愛している」なんて、嘘――。

「ならば私を抱いて。あなたの『祖国』を裏切らないと私に誓って。お願い、私はあなたの傍にいたい――」

月影が水面に揺らめいて、燦然と瞬く星々がふたりの仲を取り持った。

それならばなぜ、私たちは出会ってしまったのだろう。

いずれ辛い別れをせねばならぬとするならば。

だけど私はこの夜を後悔することはないだろう。

それがたとえ、誰に認められることがないのだとしても。

「目が覚めたか」

長い長い夢を見ていたような気がする。古月との関係に始まって、追い出されるようにして京都を離れたのも、才人が目の前で殺されたことも、俊承に恋心を抱いてしまったことも、それがすべてわずかの間に起きたことのような、目覚めの悪い夢のような心地だった。意識が覚醒してくると、昨日市内を走り回ったせいか体中が痛むし、それに俊承の体温をまだ肌がおぼえているような気がして無自覚にそれを探した。見つからないと自覚するより早く、かれがいないことを自覚し、がばっと起き上がった。そこは黒澤の自宅だった。当の主は、机に向かい本を読んでいる手を止めてこちらをみていたのだった。

「俊承は……」

「出て行ったよ。そろそろ船が出る頃だろう」

桔華はその声を聴く前に玄関に向かおうとする。その後ろ手を、黒澤は強く引いた。

「今から行っても間に合わない」

「ならばひとつ遅い船で後を追います。教えて、かれはどこへ行っただの」

「柳君がそれを望まない」

「そんなもの関係ない、私は、私はかれに連いていくと」

言うことを聞こうとしない桔華に、黒澤は強烈な平手打ちを食らわせた。俊承のときと同様、手加減を知らない黒澤の打撃に、桔華の体は壁まで吹っ飛び、そうして崩れた。

体中に電気が走るみたいに痛みが充満した。それを自覚しながら痛みに耐え、その痛みが昨日のことを徐ろに甦らせてくる。

私は、俊承についていくと決めた。

でも、才人の遺志を継ぐためにここを出るといった俊承に、私を連れて行ってほしいとは言えなかった。

ここにいてほしい、傍にいてくれとしか言えなかった。

引き留めることはできないとわかっていても、引き留めることも、ついていくこともできなかった。

そうして俊承も、桔華に、自分についてきてほしいとは最後まで言わなかった。

「駄々の次は泣き出すのか。女とは本当に手が負えないな」

「あなたに言われたくないわ。自分ができなかったこと、私にさせようとしていたんでしょ。出て行った奥さんを追えなかったことを悔やんで、私にそれをさせようと思ったのでしょ。自分が日本人ではない奥さんと幸せになれなかった分、私と俊承には幸せになってほしい、そう思って手を貸していたのでしょう？　ねえ違う？　それはあなたが言う他者への憐憫という姿を借りた、単なる自己満足

と何が違うというの!？」

カッとなった黒澤は再び桔華に手を上げようとし、衝撃を恐れて桔華は強く目を閉じたが、しばらくしても黒澤の平手は襲ってこなかった。桔華が恐る恐る目を開けると、何かを堪えるように右手を挙げたまま黒澤は震えていた。奥歯を強く噛みしめて、言葉にならない言葉をいくつも噛み殺していた。

「共に、いることで大切な人を苦しめてしまうのなら」

感情を押し殺した黒澤が、一語一語を絞り出すように口にする。

「いっそ、離れてしまったほうが互いのためだと、大切だからこそ、その背中を追ってはいけないのだと……」

上げられた手がゆっくりと降ろされた。黒澤の意図しない涙が、彼の頬を伝った。

黒澤はその涙を拭うことなく顔を上げ、そうして桔華を見据えて、言った。

「柳君から。『あいさつもせずに出ていくことを許してほしい』」

ほんとうは、今朝一番の大阪行きの列車の切符を黒澤さんをお願いしていたんです。

大阪から広島へ行って、そこから大連まで行く船に乗ります。

わたしは、昨日お話した通り、才人の目指そうとした世界、誰もが幸せに暮らすことのできる世界を作るために、何ができるかを考えるつもりです。

才人からの手紙は、黒澤さんから受け取りました。

その手紙には、才人とその家族を最後までかばい続けた父への感謝と、その家族が災難に遭っても何もできなかった自分への悔しさと、わたしの身を想い、自分の後は絶対に引き継がず、医師への道を究めるようにとありました。

桔華さん、あなたが言った通り、才人はわたしがこの道を進むことは、望んでいないのだと思います。でも他の誰でもない、わたし自身がそうしたいと願うのです。いつかまた、あのときのように桔華さんと笑いながらお話ができるように。才人のように、自分が正しいと思ったことを、誰にも臆せずに主張できるように。万民が、何か得体のしれない大きなものにいのちを狙われるようなことがない世界。そんな世界がもし、実現したら、桔華さん、わたしはもう一度、あなたに会いたい。あなたに会うために、かならず日本に戻ってきます。

だからその日のために、わたしは励みます。

どうかあなたも、お元気で。

「柳君があんたを連れて行こうとしなかったのは、周君が柳君をこの問題に関わらせたくなかったのと同じ理由だ。分かるな」

桔華は返事をしなかった。そんなことはわかっていた。分かっているが、納得ができないのだった。

ぼろぼろととめどなく涙が溢れてきた。やがて肩をゆすり、こどもが泣きじゃくるように声を上げ、叫んだ。もはや長屋の薄い壁など関係なかった。俊承の気持ちを痛いほど理解し、そうして、それを分かったうえで追いかけることのできない自分が悔しくて、情けなくて、苦しかった。黒澤も、音もなく涙を流しながら桔華の様子

をじつと静観していたが、桔華がその胸に泣きついて胸をどんと叩いても、黒澤は動じなかった。桔華は力いっぱい黒澤を叩いた。何度も何度も、殴りつける拳の一つ一つにありったけの想いをぶつけた。

やがて泣くこと殴りつけることに疲れた桔華は、黒澤のシャツを掴むようにしてぐったりと倒れこんだ。そうして初めて黒澤が桔華の体を支えてくれた。惨めだ。桔華はそう思った。

「惨めだな」

「惨めね、私たち二人そろって、大切な人を追いかけることもできなかったのね」

「あんたのいうとおり、俺は、あんたたち二人に自分を重ねていたのだと思う。俺がらくにしてやれなかったこと、お前たちを成就させることで、俺は救われるのだと思っていた」

「奥さんに、また会えるといいわね」

「あんたもな」

古月さん、私はあなたに言えない事実を持ってしまいました。今でもあなたを愛しているといったら、あなたは、信じてくれないかもしれません。

あなたのことを愛しています。

言葉にして伝えられたら、どんなにいいだろうと思うのだけれど、

それはやっぱりできない。

私にとって、あなたはすべてのあなたがあなたであって、ご家族を悲しませるようなあなたではないと信じているからです。

大切な人ができました。

あなたと同じくらい、大切な人。

純粹で健気で、意思が強くて、とても優しい心を持った人。

だれに認められなくてもいい。

私は、あなたたちと出会えたことを後悔しない。

私は私の道を生きます。

それがだれに認められなくても、私は、私の意思を持ち、そして生きる――。

「いのち」(1) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanol902.blog.fc2.com/>

「いのち」(1)

明治38年が明ける頃には、満州の荒野における日本とロシアの戦争に一筋の光が見え始めていた。

極東の小国が、超大国の白熊を倒すかもしれないという機運が各国に広がっていた。それは欧州の日本に対する認識の変化であり、アメリカの仲裁への動きであり、アジア各国の黄色人種の未来への明るい展望であったに違いない。

前年八月から二度にわたる旅順への総攻撃と、遼陽、沙可の大会戦を経て、日本は旅順を開城した。同時に、長期戦は慣れぬ荒野の厳冬をも相手にせねばならなかった。塹壕を掘ってその中に何もせずじっとしていると、手先から寒気が蝕み、やがて凍傷に至る。

先立つこと3年前、陸軍は青森第八師団歩兵第五連隊第二大隊が厳冬の八甲田山の冬季訓練中に遭難し、参加者二百十名中百九十九名の死傷者を出している。そのときの生存者の言をもとに、足に唐辛子を擦り付けて体温を保ったり、食糧に油紙を巻いて凍結を防止したりしている。それをもつてしても、大陸の寒波は白露多くの将兵たちを苦しめた。当初の計画よりも長く続いた戦争は、前線の兵士ばかりでなく、それを後方で支える国家財政、もしくは戦争を遂行した国家権力への不満となって国内の民力がすべて戦争につき込まれないような状況と化してきている。

「今日は吹雪くわね」

晴子は降り始めた雪から家の中を閉ざすように雨戸をがたがたと閉めていた。桔華は、囲炉裏の前で綿入れを被ってぼんやりとしていた。臨月を迎えた桔華の腹は誰が見ても妊婦とわかる大きさとなっている。二月に入ったあたりからは腹の重さと吐き気に体の自由が思うように効かなくなり、今はもうほとんど一日そこから動けないような状態が続いていた。

病は気からとよく言ったもので、桔華の中にはなにか黒いものが蠢くような、スッキリしない靄のようなものが始終心を満たしていた。晴子は桔華から聞き及んだ仙台での出来事を彼女なりに理解し、桔華の気持ちに寄り添おうとしてくれる。晴子のそんな優しい労りをその身に重々感じながらも、桔華は自らの罪悪感に苛まれ、腹が膨れるほどにその思いを強くしていった。すっかり憔悴しきった桔華の表情を見て、晴子が気晴らしにとおもしろい話などをしてくれるのだけれど、最近ではもう、それに頷くことも困難な心理状況に陥りつつあった。

「母親に何か懸念事項があるのなら、それを解決してやるのが一番いいのだけれど」

と医者は晴子に言ったそうだが、晴子にもその方法は皆目見当がつかない。母親の心理状況がわるければ、それは直接こどもの命に関わるからだからと理解してはいるものの、桔華が己の中に妥協点を見つけようとすればするほど、己の身の軽率さを恥じ、不貞操を悔やみ、大切な者たちへの懺悔となって桔華の心を蝕んでいく。死ぬのは一瞬の苦痛、生きることでの苦しみを背負い続けると決めたのもまた自分であったが、それにしてもこの数カ月で桔華はげっ

そりと痩せこけ、その顔から生気を失ってしまったている。

あの夜を後悔しないと決めた。

古月を一生愛し抜くと決めた。

私自身はそれで納得したとして、この子にはなんと説明してやればいい。

この子は自分に父親がいないことを恨むかもしれない。

父親が自分たちを捨てたのだと思うかもしれない。

そうではない、俊承にはどうしてもやらねばならぬことがあるのだとこの子に告げるのか。

ならばなぜ、あの時かれの後を追わなかったのかと問われたら？

自己満足ではないとなぜ言い切れる。

黒澤の言葉が脳裏によぎる。自己満足でも構わない、私一人の問題なら、それでも構わないと思ったのだ。

生まれてくるこの子は、いったい何を抛り所に生きていくのだろう。

私に、母親になる資格などあるのだろうか。

「はい桔華さん」

そういつて差し出されたお椀に、ゴボウやニンジン、こおり豆腐の汁物に白玉が二つ入って、旨そうな湯気を上げていた。

桔華は無言で受け取った。食欲がなく、膝に乗せたまま箸を付けなかった。晴子は「これは品川汁というのよ」とにこやかに話した。

「太平洋側を回って江戸の商人さんと交流のあった商家さんが川内に伝えたのですって。品川宿で聞いたから『品川汁』。でも今、当の品川にはあつものに白玉を入れる習慣はないそうよ。なんだかおかしい話ですよえ」

晴子はそう言って笑った。桔華もそれに同調するつもりで笑おうとするのだが、息がはき出ただけでなんとも情けない顔のままだった。

晴子はそれを意に介しないように、今朝方、兵衛と何を話したのだとか、たえさんが新しい着物を買ったのだとか、そういうたわいもない話をしてはころころと一人で笑っていた。桔華は、晴子のその振る舞いにありがたいとは感じながらも、その話に同調して気分を高まらせることはできなかった。

この半年間、晴子さんに世話をかけっぱなしだというのに、自分はこの有様。

望んでも子供のできない晴子さんに、今の自分はどんなふうに写っているのだろう。

私は、望まない結婚をさせられたわけでもない。

大切な人のことを思い続ける自由もある。

家族に縛られているわけでも無く、自由気ままに全国を放浪している。

晴子とはすべて真逆の自分。何もわからぬまま脇野沢に嫁ぎ、石女として家族や近所に忌まれ、自殺しようとしたところを、唯一の理解者である旦那に命を救われた晴子。その愛する人の子供を産めないまま、大切な人は今、戦地にいる。そうして一人、愛した人の帰りを待っている。愛した人は、戦争が終われば、必ず晴子のところに返ってくる。

「そのくらいは食べなければだめよ、桔華さん。朝だってごはん半分も食べられなかったんだから」

そういうと、先に食事を済ませた晴子は台所へと立った。桔華はお椀に盛られた白玉を眺めながら、猛烈な吐き気と、得体のしれない憔悴感に苛まれている。

「いのち」(2) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

「いのち」(2)

イギリスにいるという古月からの連絡は、八月以降無い。

こちらから返していないのだから当然と言えば当然であるが、もう三年も顔を見ていない従兄の、いや、今でも愛しているかれの身の上が気になる。

そうして何か得体のしれないおおきなものと戦うことを自ら選び取った俊承は、今頃北京だろうか。

それすらも定かでない今、この身重の体をしてかれの後を追うこともできない。

いったい自分は何をしているのか。

これから何がしたいのか。

答えに行き詰ると脳が熱を持ち、そうしてそれは体中の神経を伝わって自分を、そして血を分けた俊承のこどもを苦しめている。自分が苦しむことは同時に腹のこどもにも少なからず影響を与えているのだ。頭では分かっている、決着を付けられない自分自身の心の弱さに絶望し、そうしてまた、桔華の脳は熱を持ち始め、それは重度の倦怠感と吐き気となって身体に現われる。

桔華が囲炉裏の前で裂き織りの上着の端を掴み、背中を丸めて蹲っているところに、晴子が湯呑にお茶を二つ持ってきて、桔華の隣に腰を下ろした。がたがたと震え、顔面が蒼白となっている桔華に寄り添うように肩を抱くと、優しく背中を撫でてくれた。晴子は何

も言わなかった。

この人はいつもそうだった。桔華がこの家に来た時も、自分が苦しくて悩んでいるときも、自分から言い出さなければその理由を問おうとはしないのだ。どんな理由があったっていい、理由なんてなくともいい、話したくないのなら、その辛さに、その感情に寄り添い、そうして桔華に「ひとりではない」と自覚させてくれる。そんな晴子の優しさにこの半年、ずっと甘え続けてきたわけだが、今回もその例に洩れず、こうして何も言わずに背中をさすってくれている。

ねえ晴子さん、あなたの目にわたしはどんなふうに見えているの？

もしかしたらそれは、好意的な感情とは限らないのではないかしら。酷い悪阻に咽こみながら、桔華はなおも身体を屈める。もう母体は安定している時期だというのに、桔華の身体はまるでそれまでの自分の生き方に罰を与えるかのように、自らの体調の安定を拒み、そして苦しめ続けている。

「晴子さんは――」

桔華は青白い顔をかすかに上げながら晴子の名を呼んだ。唇も血色を失い、幾分も歳を取ったように衰弱している。

「わたしのことが、お嫌い？」

「まあどうして？　こうして親しくお話しできる同年代の女性と同居できるなんて、そうそうあるものではないわ。私は、桔華さんと同じく暮らしているのがとても楽しいの」

だがそれも和葉が満州から帰ってくるまでの話だ。

こどもを産み、そして容体が落ち着いたら、桔華はここを出ねばならない。

「もし、あなたがそれを望んでくださるのなら、桔華さんと、赤ちやんもずっとここで一緒に暮らしたらどうかしら。和葉さんには私からお話するわ。あの人も、にぎやかなのは大好きなのだし、もちろんこどもだって大好きだから、きっと大賛成してくれます。もちろん、桔華さんはおばあさまのお申し付けもあるから、日本中のいろいろなところにいかなければならないのよね。こども連れはきつと大変だから、そのときは私が預かるわ。その子が大きくなったら、母娘二人で出かけるというのはどうかしら――」

そうして晴子は、伊勢と熊野、鎌倉といった有名どころの観光名所の名前を上げた後、「祇園なんて素敵ね。あらやだ、そこは桔華さんにご実家のご近所ね。旅行にはなりませんね」と言って一人で残念がり、そうしてふふっと笑った。晴子はいつもの調子のまま、その感情に曇りを見せなかった。この半年、一度も晴子の辛い顔を見たことがなかった。桔華とは本当に対照的に。

桔華は微かに口を開いた。うまく聞き取れない、と晴子はもう一度聞きたい仕草をした。

「……めて」

外は吹雪きでしたらしく、がたがたと雨戸が鳴った。連日の大雪で二米ほども積雪がある。それに更に降るのだ。北国の雪とは、そこに住むものに容赦しない。

「……やめて、ください。同情なんか」

「桔華さん？」

少し怪訝な顔をしたあとに、軽口でも言おうと口を開きかけた晴子に、桔華は畳み掛けるように叫んだ。

「わたしの、こと、惨めな女だと思っているのでしょ。この歳になつて結婚もしないで、初恋の従兄のことばかり意固地に想いつづけて、あげく旅先で知り合った男に身体を許して、『それも自分の道だ』と言ひ聞かせてここまで来た私のこと……！　そうよ、私は情けない女なの、大切なものを何度も天秤にかけて、そうしてそれを自分で選び取ることもせずに時流に身を任せて、されるがままここまで流れ着いた……！　そうして今は、自分が母親になることにすら覚悟を決められず、生まれてきた子供に、なんて言い訳をしたらいいのかも分ならず、古月さんや俊承にどんな顔して会えばいいのか見当もつかないで、いつそ死んでしまえば楽になれると思うのにその勇氣もないこんな私……！！　晴子さん、あなたは和葉さんという大切な人との間にこどもが欲しかったのでしょうか？　それが適わないと、己を死に追い込むまで苦しみぬいたのでしょうか？　きつと……、きつとわたしなんかとは比べ物にならないような苦しみだったのでしょうね……。私は、この身が憎くても、死ぬこともできない、それでもこの子を、俊承のこどもを産んであげたい、でも、私はこの子の母親にはなれない、父親のいないこの子は、産まれても幸せになれない……。そう思うと、辛くて、苦しくて、何もかも投げ出してしまいたくて――」

「あなたが産むのだもの。きつとその瞬間から、その子にとってあなたは母親なのだわ。あなた自身がそれを認めなくても、こどもにとって母親はあなたしかいないのだもの」

桔華はその背中に触れていた晴子の手を払いのけるようにして身を引いた。

奥歯がぎりぎり言っていた。がたがたと震えながら、その蒼白な顔を晴子に向ける。桔華の着物の襟もとを掴む手首、投げ出された2本の両脚は、半年前よりも明らかにやせ細っており、そうしてその痩せた体に腹帯を付けた腹だけが大きく出張っているのだった。

「知ったような口を利かないで！ あなたにわたしの気持ちがかかる訳がない！！ 大切な人と、心から結ばれることのない痛みを、その人の忘れ形見を一人で産まねばならぬ辛さも、帰るところのない悲しみを！ あなたにはそのすべてがある。戦争が終われば、和葉さんは帰ってくる！ あなたのところに帰ってくる……！！」

古月。

俊承。

いつ会えるとも、互いに寄せ合った愛おしい感情を成就させることも無い、最愛の二人。その二人とも、桔華のところに帰ってくることは無い。

古月には家族がある。

俊承と、結婚の約束をしたわけでもない。

そこには、ただ一方的な愛情があるだけなのかもしれない。それがさまざまな事由と結びついて、貫かねばならなくなった感情が絡まりすぎて、今の桔華にはそれが言ったなんだったのか、自分が一体何で苦しんでいるのか、今自分が何をしゃべっているのかまったく解らなくなってしまった。

熱。そう、熱だ。脳に熱気が溜まり始める。

かっとなって晴子にそう叫び、再び我に返る。晴子は返す言葉も

なく桔華を見つめるばかりで、しかしその視線を逸らすことはしなかった。自分はなんてことを言ってしまったんだろう、そう思うや否や、桔華は立ち上がり、玄関へ向かった。

晴子もはっとしてすぐその後を追ひ、桔華の名前を呼んだ。掴まれた腕を必死で振り払うと、その勢いで晴子は後ろに吹っ飛び、商品陳列棚の角に頭をぶつけ、動かなくなった。

桔華はそれに気付くことなく、視界も不明瞭な暴風雪の暗闇に、吞まれていった。

「いのち」(3) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

「いのち」 (3)

もうどれだけ時間が経過したのか、分からなかった。

猛烈な吹雪は、視界どころか行く手そのものを強烈に阻んだ。こんなに荒々しい雪の中を歩くのは初めてだった。ほとんど道知れぬ土地で、そうして雪にすっぽりと頭まで浸かっているような今の川内村の、今どのあたりを歩いているのか桔華には見当もつかなかった。腰まである積雪を漕ぐようにして強引に歩を進めていた。外套も羽織らず、寝間着のままの桔華の皮膚は、極寒の境地を感じているはずであるのだが、当の本人は熱を持った思考回路が完全に麻痺してしまっており、現状を的確に判断できないような精神状態にある。

海はだめ。海を越えれば、俊承や古月さんに見止められてしまうから。

意味不明な結論が、方向感覚も完全に喪失したこの嵐の中の唯一の指針となっている。桔華の頭の中には、桜花や古月、篠、俊承、才人、そして晴子らへの、想像を絶するような懺悔と、強烈な自己嫌悪が渦巻いていた。体が埋まるような豪雪を一心不乱に漕ぎ進み、進めずとも進まねばならぬこの情動。自らを痛めつけることで、自分に深くかわってくれたすべてのものに対する後ろめたさ、己への失望、そして自分がこの世に存在したということへの抑えることのできない嫌悪から、少しでも逃れられるのだと思ったのかもしれない。

ない。理性を失った桔華の身体は、そんな感情や思考すら肯定することをせず、自らを死中に追いやることのみを求め続けた。何度も雪の海の中に嵌まり込んだ。それでもなお、桔華の身体は道とも山とも知れぬ内陸——自分を取り囲むすべての何かから逃れること——へと進み続けた。

もはや視界はほぼ、皆無だった。胸までもある積雪は地面もあぜ道も分け隔てなく、ただ木の幹と枝だけが寒風にその身を晒していた。差し込むような鋭い雪に、防寒もろくに身につけていない桔華の下半身は、すでに熱いだの寒いだの、そんなものを感じることも無くなっていった。

ただ頭だけは熱が持っていた。

噴出しそうなほど、感情が出ては消え、また噴出した別の感情に絡め撮られ、新たな感情を生み出していく。悲しいのか悔しいのか、泣きたいのか辛いのか、桔華にはもはや判断することも不可能だった。わんわんと大声で叫びながら、ずぶずぶと雪道を漕いでいた。右足を前に引っ張り出せず、そのまま転倒した。大きく出張った腹から落ちたが、柔らかい雪が緩衝材となった。火照りきったむき出しの顔が、冷たい雪に触れた。頭の中は相変わらず混乱していたが、一つだけ、確かに心に浮かんだことがあった。

腹の子は、無事だろうか。

桔華は、はっとした。人間として未熟な自分に、人の親など、ま

して母親など務まる訳が無いと思っていた、そんな弱弱しい自分とは裏腹に、「承俊の子を産まねばならぬ」「生まれてきた父無し子を守らねばならぬ」と固く心に決めて譲らぬ、強く、そして自らの足で地を踏みしめている自分が居る。体が半分雪に埋まった状態で、桔華はどこかあたたかい光の溢れる場所にいた。そこは無音で、遮るものがなくて、倒れた桔華の目の前に、誰か人がいるようだった。桔華は、ぼろぼろな顔を上げ、その女を見上げた。女は腕に幼子を抱いていて、そして桔華を見下ろしていた。強い意志を秘めた瞳。小さな迷いや、自らの煩惱をかなぐり捨て、「母親」としての自覚に溢れるその華奢な体。幼子は、彼女の腕の中で、たわいも無い声を上げていた。女が桔華を見下ろすその瞳とは対照的に、子は何者にも犯されぬ、自愛に満ちたその腕に抱かれ、女に手を伸ばしている。

誰かに似ている。

そうか、これは、おばあさま。

強く、揺ぎ無い意思をその小さな体に満ち占めている、北条桜花。桔華の憧憬であり、そして人生の目標。

しかし、桔華の脳が否定する。今まで認めてはいけないと思っていた、紛れのない事実。

途端、桔華の熱を持った頭の中でなにかが爆発するような感覚が全身を覆った。淡い光の中、桔華は意識を覚醒させた。

目の前にいる女は、よく見知った顔をしていた。

その顔が大嫌いだった。

いなくなってしまうばどんなにいいだろう、そうして何度もなんども、殺したいと思った。

だけどできなかった。そんな勇気もなかった。

大切な人が、こんな彼女をあいしていると言ってくれた。
その気持ちが、ほんものだ知っているから。

そうして桔華は覚醒した意識の中で、目の前の女に声をかけた。

桔華。

お前は、母親になったのだね。

途端、体中の痛覚が悲鳴を上げた。

猛吹雪は先ほどよりもさらに勢いをまし、呼吸することもままならない。

雪の深みに前のめるようにして嵌まり込んだ身重の桔華は、そこから身動きを取ることができない。

体中の皮膚という皮膚が感覚を麻痺させるか否かの混乱の中で、明らかに異質な下腹部の激痛を自覚している。

それは新たな命が、自らの出生を桔華に願っている証だった。

「桔華さん！！！」

遠くなり始めた意識の向こうに、晴子の声が響いた。

藁で編んだ防寒着を身に纏った数名の男たちと、そのなかに乱れた髪をまとめることも無くそのまま防寒着をかぶっただけの晴子が、ほとんど視界のない吹雪の中に倒れこんでいる桔華を発見した。

男たちが止めるのも聞かず、晴子は彼らも驚くような力で掻き起けるようにして桔華の元に辿り着くと、むんずと桔華の体を抱き起こして、何度も頬を叩いた。

「桔華さん、桔華さん、返事しへ！桔華！」

「……はるこ、さん」

晴子の額に無造作に貼られたガーゼに血が滲んでいた。桔華はその傷に気が付きながらも、それを労わる声を出す力も失っていた。次の瞬間に再び下半身に激痛に走り、悲痛な叫び声を上げた。

晴子はハッとして桔華の腹を見た。体が硬直し、苦痛に顔を歪めながら歯を食いしばる桔華。

晴子は自らも歯を食いしばって、桔華の頬を叩いた。何度も何度も、桔華の名を呼んで、意識を保たせようとした。

「あんだ、こったとごで寝ればわがんねえよ！家に帰るから、連れて帰るから、それまでしっかり気張っての！」

桔華に声をかけ続ける晴子の後方で、村の男たちが声を掛け合い、集まり始める。

桔華は、極寒と陣痛の激痛に意識を消失するところだった。
晴子の声が聞こえた。

桔華は晴子に何かを言いかけ、そうしてそこで、意識が途切れた――。

「いのち」(4) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

「いのち」(4)

耳の底で、晴子の声が聞こえている。

声は聞こえるが、言葉を認識できない。逃れようのない体の違和感と自分の中に蓄積された憤怒とも悲哀ともいえぬ何か。その何かが今まさに、桔華の身体から剥がれ落ちようとしているのかもしれないとそう思った。

古月への懺悔も、俊承への悔恨も、己が生きていることに対する罪悪も、そのすべてが今こうして、体中のくぐもった空氣の塊となつて、桔華の下半身に注がれていく。どろどろの血液を内包する子宮は、身を引き裂くような激痛を伴って腹の中でうごめいていた。得体の知れぬ鈍痛が、一定の時間を置きながら桔華の身体と精神を苛んだ。何度も意識をもぎ取られそうになりながら、そのたびに晴子の声がどこか意識の上の方を飛び交い、くもの糸でも掴むような心地で辛うじてその声を聞き分けていた。そうして晴子や産婆の息に合わせて息み、悲鳴を上げ、何度も誰かの名前を呼んだ。もうそれにも疲れ果て、やがて身体が急に弛緩したと思った刹那、赤ん坊がぎゃあと鳴いた。桔華の身体の中のどろどろが体外に排出され、その中から命が生まれた。女の子だった。

「桔華さん、桔華さん」

生まれ落ちた赤子は文字通り真っ赤なまま、外界の空気のわけがわからぬというように泣き続けていた。小さな口をいっぱいにあけて。小さな手足をばたばたとさせて。

産婆が臍の緒と後産の処理を終え、晴子が赤ん坊を桔華の枕元に寄越してくれた。桔華は心身ともに疲れ果て、赤ん坊に手を伸ばすこともままならなかったが、晴子が手を貸してくれ、己が身を分けた新たな命をその腕に抱いた。泣き出したのは晴子だった。「よかったのう」「ほにのう」と言いながら、赤子を抱く桔華を抱いてくれた。桔華は己の腕の中でぎゃあど泣きながら伸ばしてくる小さな掌に触れた。その掌は、ぎこちなげに桔華の指を掴んだ。

光だ。

光が見える。

胸の奥底から、何か清らかなものが湧き出てくるような感覚。どろどろの意識の中に、細く強く貫く一筋の光。

ああ、そうか。お前が私を助けてくれたのか。

わたしは、ここにいてもいいのか。

わたしは、生きていてもいいのだな。

桔華の頬に無意識に涙が伝った。赤ん坊はいつの間にか泣き止んでいて、桔華の指を掴んだまま小さく息を吸っていた。まだ体の自由がきかない桔華に代わって、晴子が赤子を産湯に入れてくれた。産婆は、「えなを殺す」といって外に出て行った。川内では、後産の排出物を「えな」といって、縁起の良くないものとして早々に地

中に埋めるのだと後で晴子が教えてくれた。「えな」はときに、それが赤子の首に巻きついて、殺してしまうことがあるのだそうだ。

桔華はまる一晚かけて出産したので、赤ん坊の声を聴いたのはほとんど夜明けと同時にであった。桔華を捜索に出た男たちも、何人かが様子を見に来てくれたが、出産のときは兵衛が家にいて、晴子とともに桔華に寄り添ってくれた。桔華は体中がだるく、しばらく動けずにいたが、晴子が産婆とともに立ち回ってくれた。赤ん坊の後には、桔華の身体を湯で清めてくれた。極寒に身をさらし、さらに大量に出血した後で桔華の身体は冷え切っており、湯で絞った手ぬぐいは本当に体の芯まで染み渡った。そうしているうちに河野のたえが朝刊を届けに来て、桔華に顔を見せた。たえが「えんつこ」に入っている赤ん坊を抱きあげたら、びっくりしたらしい赤ん坊はぎゃんぎゃんと泣き出した。桔華はどうにも申し訳ないような心地であったが、晴子もたえもそんなことを意に介する様子もなく、「元氣な子でえがったの!」と笑った。その声にさらにびっくりしたのか、赤ん坊はさらにがんと泣いた。

三月二日の早朝のことだった。
この日、桔華は母親になった。

産前の不安定な感情がうそのように、体が軽かった。

三日もすれば桔華は日常生活など晴子の手を借りなくてもよくなり、赤ん坊を背に家の掃除をしたり店番をしたり、赤ん坊の世話を焼いたりした。晴子はまだ大事を取ってゆっくりしていたらと氣を使ってくれたのだけど、もともと、幼いころから家事などを自然と

こなしてきているので、桔華にとってはそのほうが自然であった。赤ん坊が泣けば、居間のえんつこまで走って行って母乳をやった。まだ目も明けないこどもが、桔華の乳房を探り当ててそれを吸い始めるとき、自分の中の「どろどろとした何か」をこの吾子にも分け与えてしまうのではないかと不安がよぎる。しかし赤ん坊の方はそれを解することもせずに、きっかのどろどろを吸いだして、己が中で浄化する。それは光となって母の心を照らした。母はその光に導かれるように、子を守らねばならぬという自覚を己が中で育んでいく。

赤ん坊は昼夜を問わずぐずったが、桔華とともに晴子も赤子をあやすのに手を貸してくれた。晴子が赤ん坊を抱く姿は、ありがたいと思うより「申し訳ない」を桔華に強く想起させるのだ。自らのこどもを抱くことの適わなかった晴子。こうして流れ者の桔華を引き取り、ここまで面倒を見てくれた晴子に、どうしたら感謝の気持ちをお返しすることができだろうか。赤ん坊はまるで二人目の母をもったというように、晴子の腕の中で静かな寝息を立てている。晴子は、どんな想いでこの子を抱いているのだろう。そう思えば、どんな謝辞の言葉よりも、こうしてわが子を抱いてもらうことが何よりの晴子への感謝の気持ちではないのかとも思えてくる。それもまた、ずいぶん手前勝手な話だと思う。

「名前はもう決めたのですか？」

もう五日にもなる。産前もちらほらと候補を考えてはいたのだけれど、桔華はまだ、赤ん坊の名前を決められずにいた。

「この子はきつと、新しい時代を切り開く力を持った子になるわ。お父様のように優しくて強く。お母様のようにしなやかに美しく。そう思うの」

晴子は、そういつて赤ん坊に顔を寄せた。
まだ呼ばれる名を持たぬ赤子は、無垢な寝顔を晴子に向けている。

「いのち」(5) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピンオフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

「いのち」(5)

実は先日、京都にいる祖母、北条桜花より文を受けた。

桔華は、仙台での出来事や今はここ川内に滞在していることを桜花には告げており、腹に子が入ったことまでは報告している。秋口に手紙を出して、つい先日返信が来たのだ。桜花の文は、ことばが少ない。古月の筆まめがあるのも手伝って、桜花の文には便箋の空白がよく映える。

用を申し付きたい。

落ち着いたらこちらに顔を出しなさい。

当然だが、古月や最上の人間に顔を出すつもりはない。しかし桜花の言いつけである以上、桔華はそれに従わねばならぬと思っている。

ここを出るのは、新芽が息吹く時節になろうか。

桔華はそう考えている。身体が落ち着いた頃、川内から海路青森へ向かい、そこから東北本線で上野まで向かう。東京で乗り換え、東海道線で京都まで行こう。桔華は、京都から青森まではほぼ徒歩で踏破した。それは自分の足でなければ感じることでできないものを感じたかったからであり、今回はそれに勘定しないことにした。桜花の用を申し付かったら、今度は進路を西に取るのもいい。何れ

にしても、京都にとどまるつもりはない。

私は、歌を詠まねばならない。

何事にもとらわれず、あるがままの事物を受け止めて。

たくさんの人の想いを。

果たせなかった夢を。

そうしてわたしのころを。

赤ん坊は今朝も早朝に泣き出して、桔華がそれをあやしている。ぐずりつかれたらしい赤ん坊は、目のあたりを真っ赤にはらして、ようやく落ち着いたようだった。晴子がそうにしてるのを見て、桔華もやさしく赤ん坊を揺らしてやる。すると赤ん坊も大人しくなるにつれて、母親の心もしんと静まってくる。互いに同調するようにあたりに落ちる空気の一部となり、やがて赤ん坊は寢息を立て始める。

こうして、腕にずっしりと娘の体重を感じていると、遠く、海を隔てた満州で戦っている多くの日本人とロシア人のこととか、おそらくその様子をうかがっているであろうその他欧米列強の白人であるとか、イギリスにいるという古月や、同じく赤ん坊を抱いているであろう篠、京都の桜花、仙台の黒澤を一通り思い出して、かれらはかれらだ、と思った。連中と自分の相対的な位置取りをどこに求めればよいのかわからず、その距離感に苦しんだ日々。日本は開国して世界と連絡するようになったけれど、そうして自分はやはり世界と直接連絡する必要があるのではないかと自問した、仙台での出来事。清国からの留学生と交わりを持つことで、やがて祖国の一市民としての自分を自覚したこと。そしてそれは同時に、同じ祖国を持たぬものとは、決して相容れぬことのできぬ心の壁を見てしまったということ――。

そうして俊承が意識に顔をもたげる。

そんなことはない、桔華さん。あなたはこうして、わたしたちを受け入れてくれたではありませんか。

わたしたちを憐れむことなく、さげすむことなく、異国民としてではなくて、ひとりの人間として迎えてくれた。

だから祖国なんて関係ない。わたしにとって、世界のすべてが祖国なんです。

ねえ俊承。あなたのこどもが生まれたのよ。

私とあなたのこどもなの。

とてもかわいらしい女の子。

産んだことを、後悔なんてしていない。だけど不安なの。

私とあなたがどんなに分かりあっていたとしても、この子は、周りの人にどんなふうに使われて育つのかしら。

もしかしたら、あなたの「祖国」を恨むかもしれない。

己の中に流れる二つの「血」を忌まわしく思うかもしれない。

そうして己の生きる意味を見失った娘に、私はなんて弁明したらいい？

あなたのことをなんというて聞かせればいい？

あなたがまた、私を訪ねてきてくれること、いつまでも信じて待っています。

だけどきっと、あなたのいう才人の理想の国家は、ずっとずっと遠い未来のお話。今よりも残酷な、今よりも非人道的なたくさんの「痛み」の向こうに見えるもの。あなたはそれでも、私を――それはあなたを苦しめる何者かと同じものかもしれない――を迎えに来てくれる？

私と、あなたの娘を。

健やかな寝息を立てている、桔華の腕の中の娘。

その未来をはかなんで、ちくりと桔華の胸がうずく。

この子に罪はない。

俊承が悪いわけでもない。

得体のしれぬ何か大きなものが、この小さな無垢の背中に黒くそびえ立つ。正体の定かでないおぼろげな何かを前に、桔華の心中は再びざわめき出す。すべての事実が、正しいとは限らない。この子は、何も知らぬ方が幸せなのではないのか。産んだ母のこと、その父のこと、何も知らず、何者でもないありふれたこどもとして生きる方が、この子のためになるのではないだろうか。

「晴子さん!!」

その性急な声に桔華は振り向いた。まだちらほらと粉雪が舞っていて、防寒着もそこに兵衛が店の方から顔をのぞかせた。

開けられた戸から、ちらちらと小雪が軒先に入ってくる。兵衛は桔華の顔を見るなり、「晴さんは!？」とまくし立て、桔華が今朝はまだ姿を見ていないから寝ていると思うという曖昧な答えを返すより早く、その声に重なるように桔華に強い視線を投げつけた。

「和葉が、和葉が……黒溝台で、戦死、したど……」

兵衛が今朝の「東奥日報」を右手で力いっぱい握りしめていた。現状の把握に追いつけない桔華は、呆けた頭で上がり場に目をやった。

晴子の履物はそこになかった。

「いのち」(6) (前書き)

ブログで連載中「櫻花往生」の登場人物、最上桔華にスポットを当てたスピノフ作品です。『陸奥湾を抱く街』は本編の中の一章ですが、独立した作品として執筆しております。

「櫻花往生」<http://kanayanon1902.blog135.fc2.com/>

「いのち」(6)

黒溝台会戦は、一月二十七日に開戦。

度重なる日本軍参謀の「判断ミス」を、弘前第八師団という本来後備配置であった「虎の子」を前線に投入することで辛くも勝利を得た。

この会戦で弘前第八師団では多数の犠牲が出た。これは日露戦争における特筆事項には値しないかもしれない。黄海、旅順、奉天、璽霊山……幾多の戦場で多くの人が死んだ。日本人もたくさん死んだ。当然、ロシア人も死んだ。多くの家族が肉親の死を悲しむより、大國ロシアを満州の地にて打ち破りつつある、アジアの独立を、日本が勝ち取りつつあるといういわば国家意識レベルの熱に支配されつつある。大切な人の死は、声を荒げて悼むべきものではない。かれは、国家と、アジアの真の独立のために名誉ある戦死を遂げたのだ。残されたものはそう強く思うことで、その悲しみを乗り越えようとするのかもしれない。

そういう空気が許されるのが、「戦時」である。

桔華は兵衛の声を聴くや否や、娘を兵衛に預けて走り出した。

幸い、夜半より小振りになっていた雪が、微かに晴子の進んだ道を残していて、雲間から除いた太陽がきらきらと足跡を照らしていた。

降り積もった雪は、早朝から人々が手分けして除雪していた。往來の両端に、自分の背丈よりも高い雪が壁を作り、門のところだけが出入りできるように除雪されている。何人かの顔なじみに晴子の行方を聞いたが、誰もがかぶりを振った。新聞を購読している住民が、晴子の名前を聞いて心中を慮った。しかし、死亡通知が来たのは、川内でも晴子の家だけでは無いらしい。先ほど兵衛に見せてもらった「東奥日報」にも、第八師団で戦死した青森県人の死亡判明リストが一段にも連なっていた。ここ下北の地からも多数の犠牲者が出ている。それだというのに、人々はいつもと何も変わらぬといったふうな表情もないまま、もくもくと除雪を行い、そうして仕事に行くものは行く。家のことをする者はする。近隣で葬式が出るのと段取りが組まれる。それは実に機械的で、実に人間らしい行動なのかもしれないと桔華は思った。そうしなければ、生きていくことができないからだ。

当然のことなのかもしれない。

誰かの死はそれは生き物である以上当たり前のことで。

いつまでもそれに胸を痛めていたのでは前に進めない。

そんなの。

そんなの――。

晴子は、誰もいない船着き場にいた。

そこはまだ除雪が入っておらず、晴子の足跡だけが残った薄積の雪は、きらきらときらめいて。

昨日まで鈍色だった波間も、久しく顔を見せなかった太陽の光を寿ぐように穏やかに押し寄せている。

晴子はじつと海の向こうを見ていた。
ただずつと。ずうつと向こう。

風が冷たい。晴子は上着も着ていなかった。

「風邪を召しますよ」

桔華はようやくその言葉を選んで、晴子に声をかけた。

晴子は答えなかった。桔華は持ってきた晴子の裂織の綿入れを、背中からかけてやった。

晴子の心中を思い図ることができない。

才人のときと同じだ。自分は、何をしてやればよいのだろう。なんと、声をかけてやればいいのだろう。

波は変わらず、穏やかな音を伴って眼前に広がる。

桔華が何も言えずにいると、晴子がぽつりと言った。

「この海の向こうには、青森があるだけ。内海うぢうみだもの。大陸には届かない」

俊承は太平洋を臨んで、桔華の背中を見ていたのかもしれない。
海の向こう。それはかれにとって、見たことのないすべてのもの。
必ずしも絶望ではなかった。

しかし晴子は違う。

かつてこの海に自らの命を沈めることをし、この海を見ながら自らのこどもを無くし、そうして今度はこの海の向こうで、かけがえ

のない、ただ一つの大切なものを失った。

晴子にとって、海とは母なるものではなく、それは同意義であり真逆の、絶望的なものであるのかもしれない。

晴子は言った。

昨夜遅く、在郷軍人会より和葉の戦死を伝えられたのだと。

遺品もなく、和葉の名前と所属、死亡日時と、何人かの朱印が押された半紙を一枚、渡されたのだと。

「仕方ないのよ。何万という人が広大な大地の中に命を落として、戦争はまだ続いているから、遺体をすべて収容することができないのですって。仕方がないわ。仕方が無い。仕方が……」

「晴子さんもう」

「ねえ、もしかしたらこれは何かの手違いで、和葉さんが明日ひよっこり帰ってくるなんてことがあるのかもしれないと思わない？ そうしたらね、私、桔華さんと娘さんのことを自慢するのよ。あなたがお留守にしている間、私はこんな素敵な友人ができたの。その出産に立ち会うこともできたのよ。こんなに素敵なことはあるかしらって。あなたが戦争で大変な思いをしているのを知っていたから、自分が、誰かのためにできることを必ずやり遂げたいという人だから、私も、自分のできる範囲で桔華さんのことを助けたいと思ったのよ。彼に恥じない妻になりたかったの。でもね、桔華さん。だから私はあなたを助けたのかもしれない。和葉さんの志につりあいたくて、彼に認めてもらいたくて、あなたを利用したのかもしれない。あなたを助けることで、私自身が救われようとしていたかもしれないなんて……。あなたは失望するかしら。でも、それすら意味がなくなってしまうたわ。和葉さんはもう、ここに帰ってくることはない。それは私だけが特別なのではなくて、世界中の兵士の家族がそ

うであることのうちの一つでしかないのに、私は、私自身の悲しさに、どうすることもできないの。なんて利己主義なのかしら。結局自分のことしか考えていないのよ。ねえ、桔華さん。私は、どうしてこんなに惨めなのかしら。ごめんなさい、桔華さん、ごめんなさい――」

晴子は顔を上げたままぼろぼろと泣き出した。それを拭うこともせず、しかし必死で何かを堪えるようにして、体を震わせていた。桔華は、まるで金縛りにあったように動けなかった。その行動が誰かのためにと銘打っていても、それは自分が救われることに帰納する。黒澤も同じことを言っていた。そうしてそれは、桔華自身もよく理解していることであつた。

桔華にとつて、晴子は、自分にないすべてのものを持っていた。

帰るべき場所、愛する人。それを羨ましいと思っていた。

それに比べて、私は自分で自認できる家族も、帰るべきところも女としての幸せもなく、決して口外することを許されぬ恋に身を焦がし、やがて北の果てにたどりつき、女の身一つで女兒を産んだ。その父親は、かつて密やかな恋を誓い合つた従兄ではなく、旅先で出会つた朝鮮人。かれは桔華とともに生きる道ではなく、ただ一人苦難の道を歩みゆく。桔華もまた、己が使命と半ば強引に自らに言い聞かせ、祖母のいいつけを全うする。

「あなたには、私にないすべてがある。愛すべき人がいて、それはどんな形であるとはいえ、命ある限り再びめぐり合うことができるわ。その愛した人との間に愛らしい女の子も生まれた。女性だというのに、歌道で将来を嘱望されていて、家や地元に縛られることなく自由にどこにでもいくことができるのよね。ねえ、どうしてあなたはそんなご自分を哀れだと思うの。あなたが望めば、日本中の女性が手に入れることのできないたくさんのもを手に入れることが

できるのよ。家に縛られ、家庭に縛られ、そうして女として生きるべき道徳にがんじがらめにされている私たちは、どんなに望んでもあなたのような生き方を選ぶことはできない。ねえ、なのにあなたは、どうしてなにを悩んでいるの。どうしてあなたなの。あなたは、わたしの――」

そこまで言って、晴子の言葉は途切れた。

兵衛に預けてきた赤ん坊のことが頭をよぎった。

桔華は、正面から晴子の肩を抱いた。細っそりとした肩幅。先日、桔華が晴子を振り払った際に殴打した額のガーゼには、まだ血が滲んでいた。その身はまだ微かに震えていた。

海猫がみゃあ、と鋭い声を上げて泣いた。さっと桔華と晴子の視界に影を作り、風を切るように飛び立った。

三月、陸奥湾には春陽が差し込んでいる。

ロシアとの戦争も終わる。維新に続く、日本の第二の開国が始まる。

それは、終わりに向かう始まりなのかもしれない。

古月も俊承も、黒澤も晴子も、それぞれの立場で国を背負って立つ日が来るのだろう。

あるいは母として。

あるいは一企業を背負って。

あるいは国防を担う軍人として。

そうしてあるいは――。

なればわたしも、何を迷うこともあるまい。

私は私として生きることを決めたのだ。そのほかを選ぶことは許されぬ。

翌日、晴子は赤ん坊の泣き声で目を覚ました。

早朝の空気の冴えわたる中、赤ん坊はえんつこで無邪気に泣き声を上げていて。

その傍らにいつもいたはずの、母親、桔華の姿がない。代わりにきれいに畳まれた布団と、彼女が発句の際に利用していた雑記帳が一冊、そこに置かれていた。

陸奥湾を抱く街のなかひとり 吾子の手や君を求めをり

晴子は、何も知らぬ赤子を抱きあげた。

赤ん坊は晴子の腕のぬくもりを感じてか、すぐに大人しくなった。

「あなたはひとりなんかじゃない、そうでしょう、桔華」

明治三十八年三月、こうして最上桔華は、晴子のもとから姿を消

した。

桔華と晴子、このち二人が生きて再会することは、無い。

ただそこには、二人が確かに邂逅したという証——無垢な赤子が、「母親」に向かって小さな手を虚空に伸ばしている姿があるだけである——。

「いのち」(6) (後書き)

ご愛読いただき、ありがとうございました。

このお話は、本編主人公、和泉桔華生誕秘話の位置付けのおはなしです。

いろいろと小難しいお話となりましたが、人を愛することの困難さや、時代や環境の理不尽を表現したいなと思って構成しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0423u/>

陸奥湾を抱く街

2011年11月14日21時38分発行